高岡市埋蔵文化財調査概報第63冊

岩坪岡田島遺跡調査概報

－ 平成16年度、グラスキューブ地区の調査 －

2005年3月

高岡市教育委員会

序

高岡市域におきましては、旧石器時代から近世までの埋蔵文化財包蔵地が所在すると考えられています。

高岡市教育委員会においては、毎年これらのうちのいずれかに発掘調査を実施しておりますが、次々と明かされていく当地の歴史と対面するたびに、先人たちの残した歴史の深さに感銘を受ける次第です。

本書に報告しますのは、平成16年度に実施した岩坪岡田島遺跡「グラスキューブ地区」の本発掘調査成果です。

同遺跡については、東大寺領須加荘の比定地の一つと距離的に近いことから、研究者間において注目をされて参りました。過年度においても数度の発掘調査を実施しましたが、今回は、上記の荘園の存続時期と一部が符合する歴史的様相を検出するという、貴重な成果を挙げることができました。

したがいまして、本書につきましては、当地の歴史を知るうえでも重要な資料になるものと思われます。また、学術調査や郷土の歴史研究などにも、お役立ていただければ幸いに思う次第です。

末尾になりましたが、この調査にご協力をいただきました、関係各位ならびに地元の皆様に、感謝申し上げます。

平成17年３月

高岡市教育委員会

教育長　　村井　和

例　　言

１．本書は、株式会社グラスキューブによる事務棟及び倉庫の建設工事に伴う岩坪岡田島遺跡の埋蔵文化財発掘調査概報である。

２．発掘調査は、高岡市教育委員会と株式会社グラスキューブ、そして有限会社山武考古学研究所（所長　平岡和夫）の３者協定を締結し、高岡市教育委員会の指導のもとで有限会社山武考古学研究所が実施した。

３．今回の発掘調査にかかる担当者は次の通りである。

　　高岡市教育委員会　　根津明義（高岡市教育委員会文化財課主任）

　　山武考古学研究所　　武部喜充　桐谷　優　大橋忠昭（山武考古学研究所調査員）

４．自然科学分析については㈱吉田生物研究所、藤田秀臣氏に依頼し、出土木製品の年代測定及び樹種同定を行った。

５．今回の調査で出土した遺物や図面及び写真などの記録類は、すべて高岡市教育委員会が保管している。

６．現地調査から報告書作成に至るまで次の諸機関の指導及び協力を得た。記して感謝の意を表します。

　　㈱三芝硝材、㈱日本テクニカルセンター、高岡市シルバー人材センター

７．本書の執筆は、第１章を大橋、第５章を根津、その他を武部が行った。

凡　　例

１．遺構実測図などにおける方位はすべて座標北を示す。

２．本書で使用した遺構記号は次の通りである。

　　掘立柱建物ＳＢ０１～、柵列ＳＡ０１～、小穴Ｐ０１～、

　　土坑ＳＫ０１～、井戸ＳＥ０１～、溝ＳＤ０１～

３．遺物の注記については、岩坪岡田島遺跡の略号「ＩＷＯ」・出土地点・遺構番号の順を基本とした。

４．土器実測図の断面表示は須恵器がベタ黒、珠洲が平行斜線、土師器などは白ヌキである。また、内面黒色処理及び緑釉は細粒網点、灰釉の施釉範囲は一点破線で表した。

５．遺物観察表中の胎土含有物と粒度は各々以下の記号組み合わせによって示した。

　　ａ）含有物は、ａ（長石）、ｂ（石英）、ｃ（白色針状粒）、ｄ（赤色粒）、ｅ（黒色粒）、ｆ（黒色細粒）ｇ（角閃石）、ｈ（砂粒）で表し、小文字は少量、大文字は多量を示す。

　　ｂ）粒度は、緻密（0.2mm以下）、密（0.3mm～1.0mm）、粗（1.0mm以上）の３段階で表示し、その中間的な様相は「やや」という表現を用いた。

６．遺物の時期決定に用いた土器編年観は、太宰府白磁碗編年（横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４九州歴史資料館普及会）と、珠洲吉岡編年（吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館）である。

高岡市埋蔵文化財調査概報第63冊

岩坪岡田島遺跡調査概報

目　　次

序

例　言

凡　例

目　次

第1章　序　説

遺跡概観……1

調査に至る経緯……3

調査の方法……4

調査の経過……4

地形と層序……5

第2章　遺　構

掘立柱建物及び小穴……7

柵列……12

土坑……13

井戸……15

溝……15

第3章　遺　物

掘立柱建物出土遺物……19

小穴出土遺物……19

土坑出土遺物……20

井戸出土遺物……20

溝出土遺物……20

遺物包含層出土遺物……21

第4章　自然科学分析……23

第5章　結　語……28

挿　図　目　次

第１図　岩坪岡田島遺跡位置図〔1〕(1/50,000) …… 1
第２図　岩坪岡田島遺跡周辺図（1/15,000） …… 2
第３図　岩坪岡田島遺跡位置図〔2〕(1/150,000) …… 3
第４図　調査区方眼網設定図（1/800）…… 4
第５図　基本層序（1/40） …… 5
第６図　岩坪岡田島遺跡調査区位置図（1/5,000）…… 6

図　面　目　次

図面01　遺跡全体図　(1/250)、但し、溝SD30・37・38の断面図は（1/150）
図面02　遺構実測図　掘立柱建物SB01・03（1/100）
図面03　遺構実測図　掘立柱建物SB02・10・11、小穴P210・253・257（1/100）
図面04　遺構実測図　掘立柱建物SB04・10・11（1/40・1/100）
図面05　遺構実測図　掘立柱建物SB05・06、小穴P360・367・369（1/40・1/100）
図面06　遺構実測図　掘立柱建物SB06・07・08、小穴P195・196（1/100）
図面07　遺構実測図　掘立柱建物SB09・12・13、小穴P301（1/100）
図面08　遺構実測図　掘立柱建物SB14・15、小穴P173（1/100）
図面09　遺構実測図　掘立柱建物SB16・17、小穴P78・114（1/100）
図面10　遺構実測図　掘立柱建物SB18・19（1/100）
図面11　遺構実測図　掘立柱建物SB20、小穴P102・346・364（1/100）
図面12　遺構実測図　柵列SA01・02・03、小穴P372（1/100）
図面13　遺構実測図　土坑SK01～05・08～13・15～17（1/60）
図面14　遺構実測図　土坑SK18～23・26～28、井戸SE01（1/60）
図面15　遺構実測図　溝SD02～10・12・14・15・18・19（平面図1/100、断面図1/60）
図面16　遺構実測図　溝SD11・16・17・20～26・31（平面図1/100、断面図1/60）
図面17　遺構実測図　溝SD30・32～35、小穴P368（平面図1/100、断面図1/60）
図面18　遺物実測図　掘立柱建物SB02・05・08・09・13・14・15、小穴P78・114出土遺物
図面19　遺物実測図　小穴P173・195・196・210・257・301・369、土坑SK17・21・22・28出土遺物
図面20　遺物実測図　井戸SE01、溝SD02・05・06出土遺物
図面21　遺物実測図　溝SD09・11、遺物包含層、表土層出土遺物
図面22　遺物実測図　遺物包含層、表土層出土遺物
図面23　遺物実測図　遺物包含層、表土層出土遺物
図面24　遺物実測図　遺物包含層、表土層出土遺物
図面25　遺物実測図　遺跡内出土土錘（掘立柱建物SB10P10・SB20P7、小穴P253・346、土坑SK22、溝SD02・11、遺物包含層、表土層）

図　版　目　次

図版01　遺跡写真　遺跡全景（上空から）
図版02　遺構写真　1．遺跡遠景（南東上空から）　2．掘立柱建物SB01完掘状況（北から）
図版03　遺構写真　1．掘立柱建物SB02完掘状況（東から　2．掘立柱建物SB03完掘状況（東から）
図版04　遺構写真　1．掘立柱建物SB04完掘状況（北から）　2．掘立柱建物SB05・06完掘状況（北から）
図版05　遺構写真　1．掘立柱建物SB07完掘状況（北から）　2．掘立柱建物SB10・11完掘状況（東から）
図版06　遺構写真　1．掘立柱建物SB16・19完掘状況（東から）2．掘立柱建物SB20、柵列SA02・03完掘状況（北から）
図版07　遺構写真　1．掘立柱建物SB10柱穴P10遺物出土状況（東から）2．掘立柱建物SB14柱穴P10柱根出土状況（東から）
3．小穴P360栗石出土状況（北から）
図版08　遺構写真　1．小穴P195遺物（17）出土状況（東から）2．井戸SE01土層堆積断面（南から）
3．井戸SE01完掘状況（北から）
図版09　遺構写真　1．土坑SK28遺物出土状況（西から）　2．掘立柱建物SB01発掘調査状況（東から）
3．掘立柱建物SB02発掘調査状況（南から）
図版10　遺物写真　掘立柱建物SB02・05・08・09・13・14・15、小穴P78・114・173・195・196・210・257出土遺物
図版11　遺物写真　小穴P301・369、土坑SK17・21・22・28、井戸SE01、溝SD02・05出土遺物
図版12　遺物写真　溝SD06・09・11、遺物包含層、表土層出土遺物
図版13　遺物写真　遺物包含層、表土層出土遺物
図版14　遺物写真　遺物包含層、表土層出土遺物
図版15　遺物写真　遺跡内出土土錘（掘立柱建物SB10P10・SB20P7、小穴P253・346、土坑SK22、溝SD02・11、遺物包含層、表土層）及び製塩土器

表　目　次

表１　放射性炭素年代測定の結果……25
表２　^{14}C年代を暦年代に較正した年代（範囲）結果 ……25
表３　遺物観察表（1）……30
表４　遺物観察表（2）……31
表５　遺物観察表（3）……32

第１章　序　　説

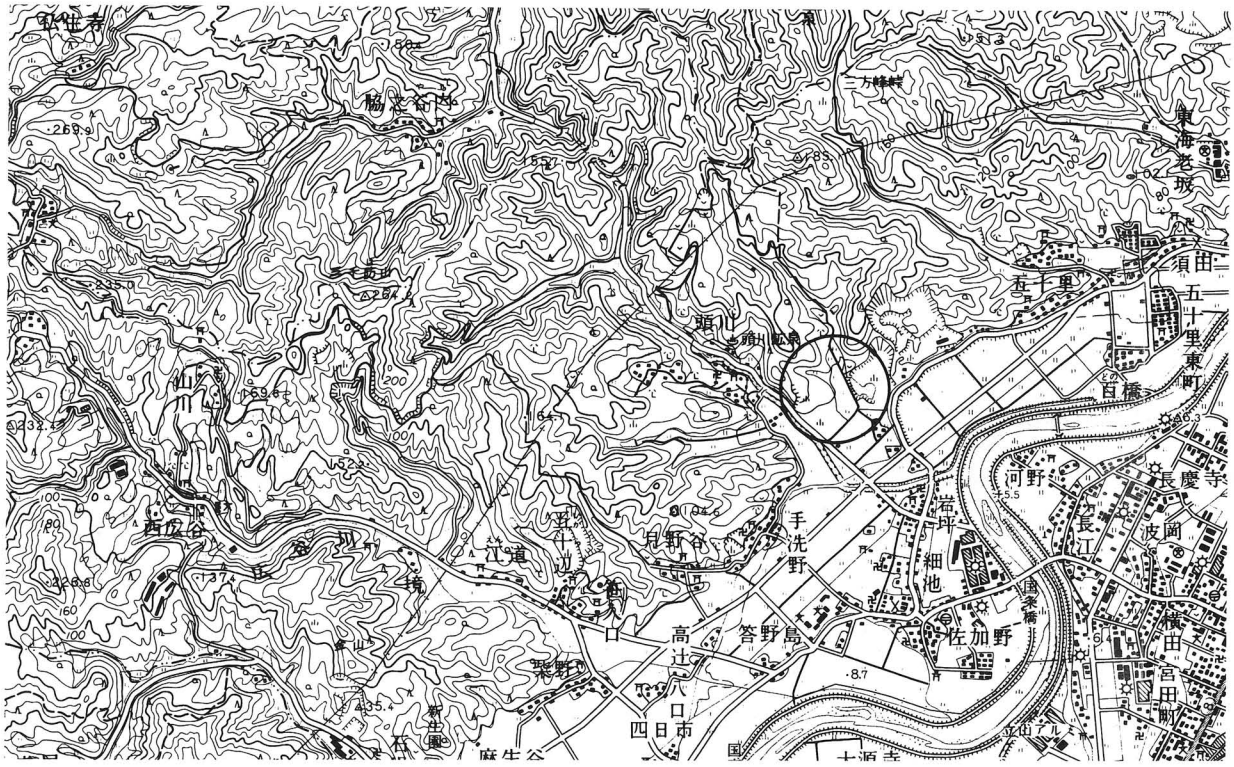
遺跡概観

「岩坪岡田島遺跡」は、高岡市街地北西部、JR高岡駅からは北西約4.6㎞の地点に位置する。遺跡の北西側一帯には西山丘陵が連なり、対する南方では富山平野の主要河川の一つである小矢部川が蛇行する傍ら、主要地方道小矢部伏木港線と能越自動車道が同河川とともに南西方向から北東方向へと走る。また、遺跡の周辺はやや複雑な地理的様相を呈しており、岩坪岡田島遺跡そのものは、小矢部川により形成された沖積低地をはじめ、標高９～10ｍを測る微高地・丘陵・開析谷の計４地形を縦断する。

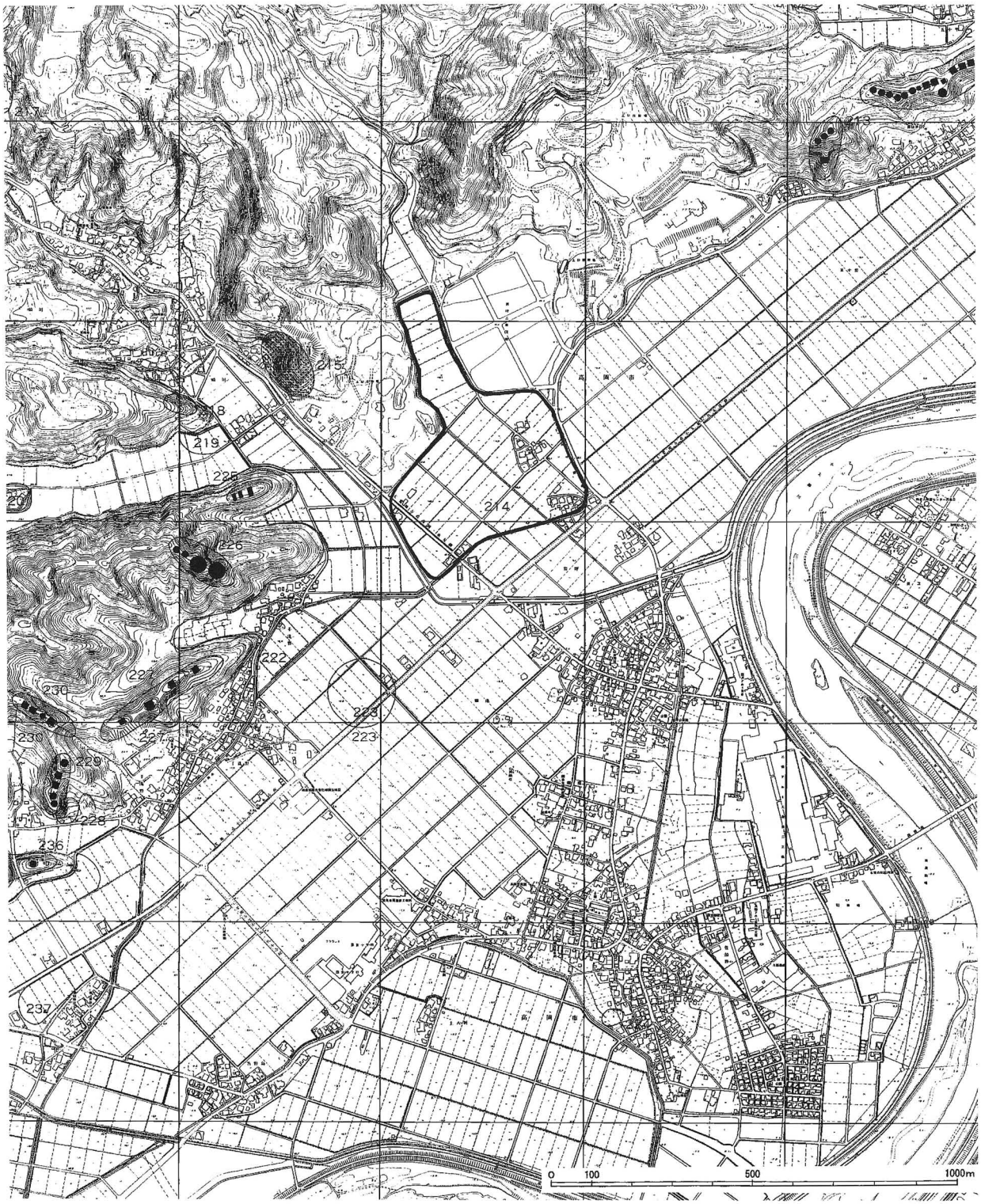
上記した主要地方道小矢部伏木港線の沿線付近には、延喜式段階の古代北陸道がはしっていたとされる。近世以降は北陸街道の脇往還である氷見往来や山根道が通り、現在の高岡市佐加野の地には佐加野駅がおかれ、小矢部川の水運と共に交通の要衝として機能した。遺跡の西方の丘陵斜面には頭川城ヶ平横穴墓群がある。昭和57年に土砂採掘中に発見され、昭和57年度から２箇年にわたり発掘調査が行なわれた。同横穴墓群は20基からなり、出土遺物により飛鳥時代を中心に築造されたものと考えられている。平成10～12年度にも調査が行われ、新たに３基の横穴墓を確認した。

周辺を流れる頭川川（外古川）の西側には、弥生時代～中世にかけて営まれた間尽遺跡がある。天王山式土器ないし東日本系の弥生土器が検出されたことで知られる。この背後の丘陵上には、倉谷古墳群をはじめ、安居山古墳群や四十九古墳群などが所在する。当遺跡の北西側約２㎞には須田藤の木遺跡があり、岩坪岡田島遺跡の周辺と同様に、東大寺領須加荘の比定地の一つに数えられている。

なお、岩坪岡田島遺跡については、平成10年度の能越自動車道建設に伴う分布調査や試掘調査を経て、新たにに命名されたものである。また南西側の沖積低地では、手洗野赤浦遺跡が新規に確認されている。



第１図　遺跡位置図〔１〕（１／50,000）



212.板屋谷内B古墳群　213.板屋谷内C古墳群　**214.岩坪岡田島遺跡**　215.頭川城ケ平横穴墓群　218.頭川古墓　219.滝ケ谷内Ⅰ遺跡　220.滝ケ谷内Ⅱ遺跡　221.明田Ⅰ遺跡　222.間尽遺跡　223.手洗野赤浦遺跡　225.安居山古墳群　226.四十九古墳群　227.倉谷古墳群　228.道ケ谷内遺跡　229.道ケ谷内Ⅰ遺跡　230.道ケ谷内Ⅱ遺跡　231.道ケ谷内Ⅲ遺跡　230.宮田遺跡　235.月野谷大谷内遺跡　236.立山古墳群　237.高辻遺跡

第２図　遺跡周辺図（１／15,000）『高岡市遺跡地図』より転載

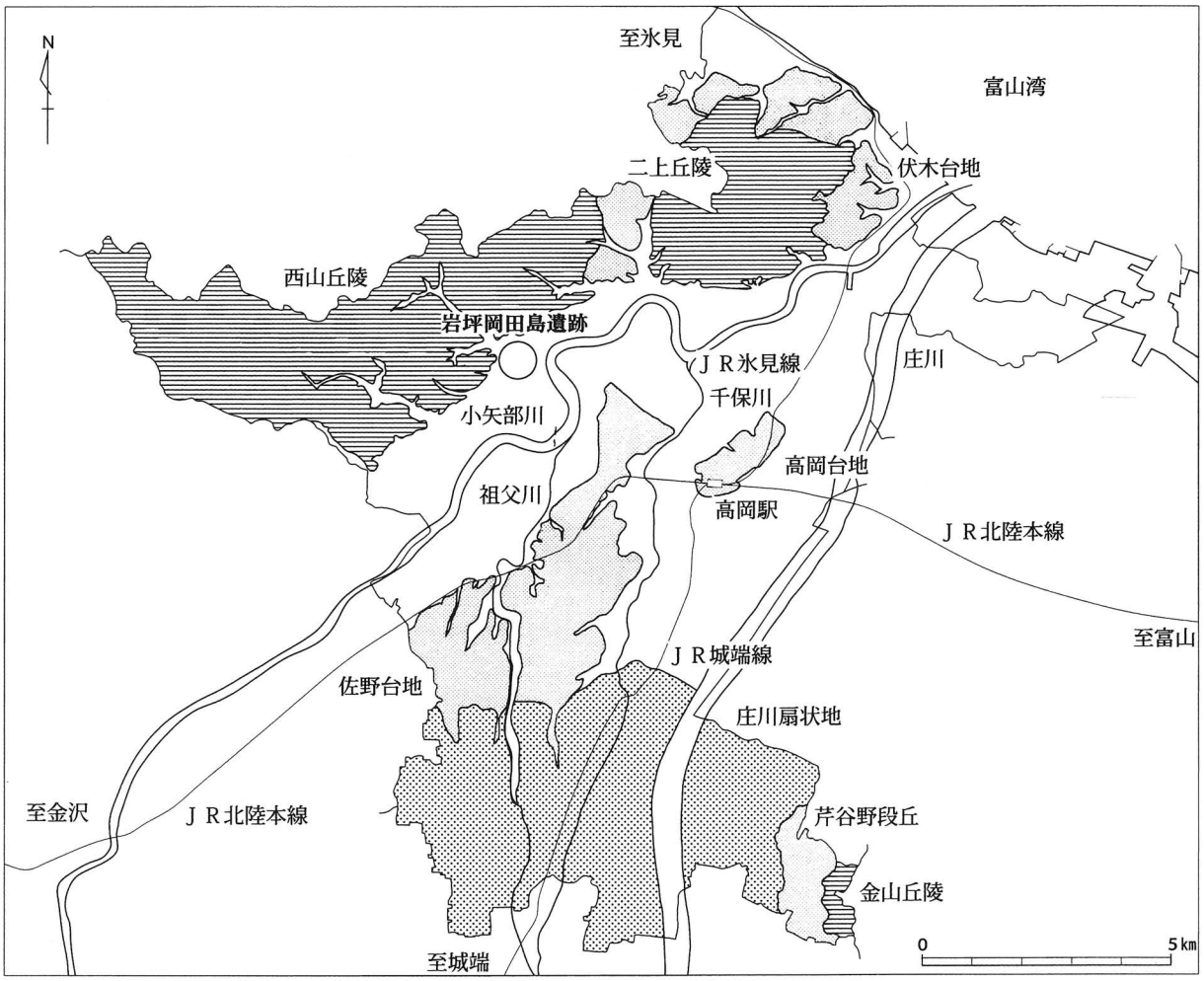
調査に至る経緯

今回の発掘調査は、平成15年７月に株式会社グラスキューブによる事務棟及び倉庫の建設が計画され、同建設予定地おける埋蔵文化財の取扱について、同社から高岡市教育委員会あてに照会が寄せられたことに端を発する。

しかし、当該地は岩坪岡田島遺跡の包蔵地として周知されていたことから、開発行為を行う際には事前に埋蔵文化財の有無を確認するとともに、その所在が明らかとなった場合には、何らかの方法でその保護措置を行う必要性があった。

これを受け、高岡市教育委員会と株式会社グラスキューブとの間で協議の場がもたれ、平成15年10月から試掘調査を実施することで合意に至った。試掘調査は平成15年10月１日から同年10月８日まで高岡市教育委員会が実施したが、その結果、各トレンチから多数の遺構及び遺物が検出されたことから、「富山県発掘調査等対応基準」に照らし、建物の建設部分については本発掘調査を実施する必要があるものと判断された。

この結果を踏まえ、高岡市教育委員会と株式会社グラスキューブとの間に再び協議の場がもたれたが、行政事務とのかねあいのほか、建造物の竣工や営業開始期日などの関連から、前記２者のほか、調査実施業者をくわえた３者協定のもとに本調査を実施することで合意に至った。そして、株式会社グラスキューブによる業者選定及び３者協定の締結を経て、平成16年８月９日から今回の本発掘調査に着手した次第である。



第３図　遺跡位置図〔２〕（１／150,000）

調査の方法

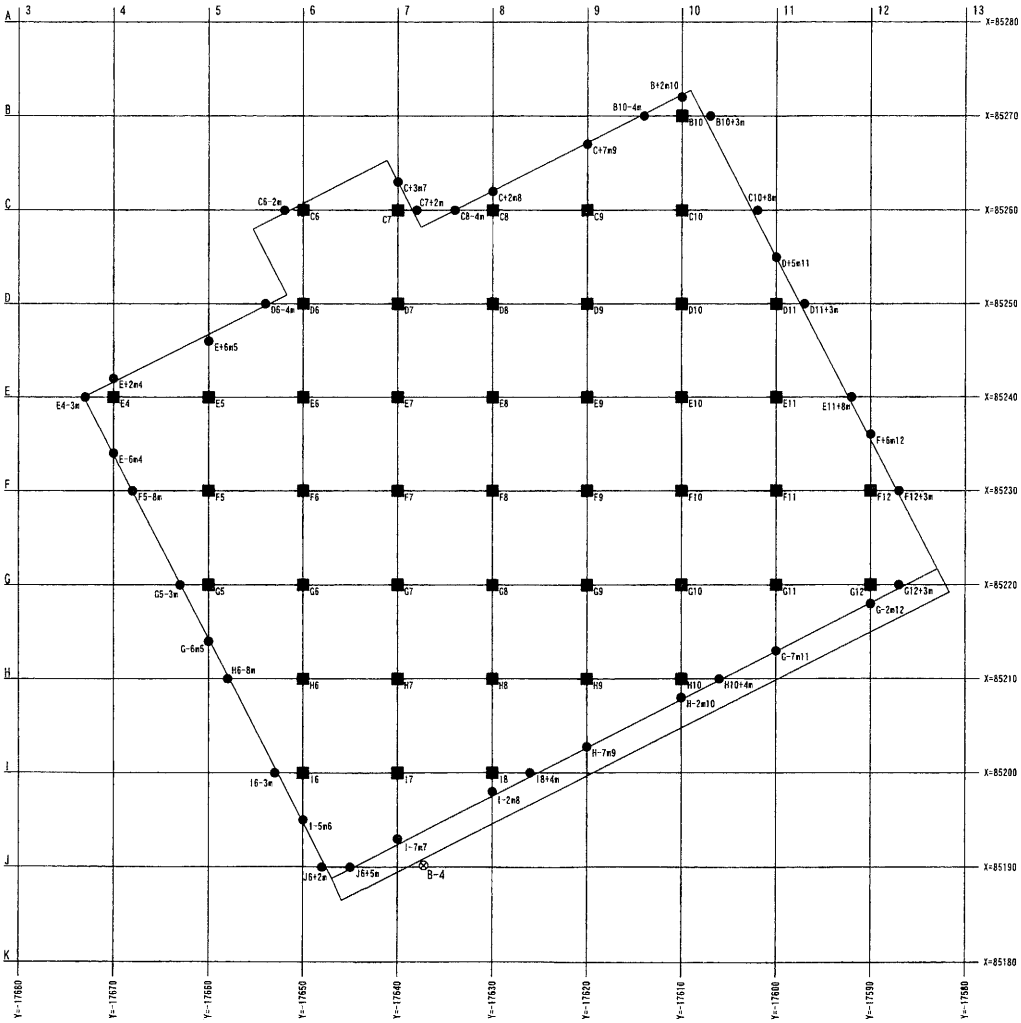
発掘調査は、緊急時と細部調整をのぞき、高岡市教育委員会の作成した仕様書にもとづき山武考古学研究所が実施した。遺構確認面までの掘削のうち、表土については大型重機を用い、遺物を包含する層と遺構覆土の掘削は人力にて実施した。遺構実測図は土層断面図と平面図を作成した。前者については1/20縮尺図を基本とした。後者については航空測量を用いて1/20縮尺の割図と1/100縮尺の全体図を作成した。また、この他にも必要に応じて1/10及び1/40縮尺図を作成した。

写真撮影は35mmのモノクロ及びカラースライドフィルム・120mmモノクロフィルムのほか、補足的にデジタルカメラを使用した。空中写真については測量会社に委託し、ラジオコントロールヘリコプターを用いて撮影をした。

調査区のグリッドは、世界測地系第Ⅶ系を基準として調査区全体的に10m方眼のメッシュを設定した。各方眼の呼称については、北から南へはアルファベットを、西から東へは算用数字を付し、この交点となる記号を組み合わせた（例：A－１）。

調査の経過

本発掘調査は、平成16年８月９日から同年11月６日までに実施した。８月９日から17日までは、調査区域の設



第４図　調査区方眼網設定図（１／800）

定に従事したほか、現場事務所の設置及び発掘器材搬入などの発掘調査にかかる準備を行った。8月17日から表土除去作業を開始し、これをもって実質的な発掘調査を開始した。８月30日からは遺構確認作業に移行し、調査区を縦断する浅い谷を挟んだ東側に多数の小穴や溝を確認した。遺跡空中撮影は調査の進捗に合わせて３期に分けて実施した。10月28日に最終撮影を実施し、実質的な発掘調査を終了した。

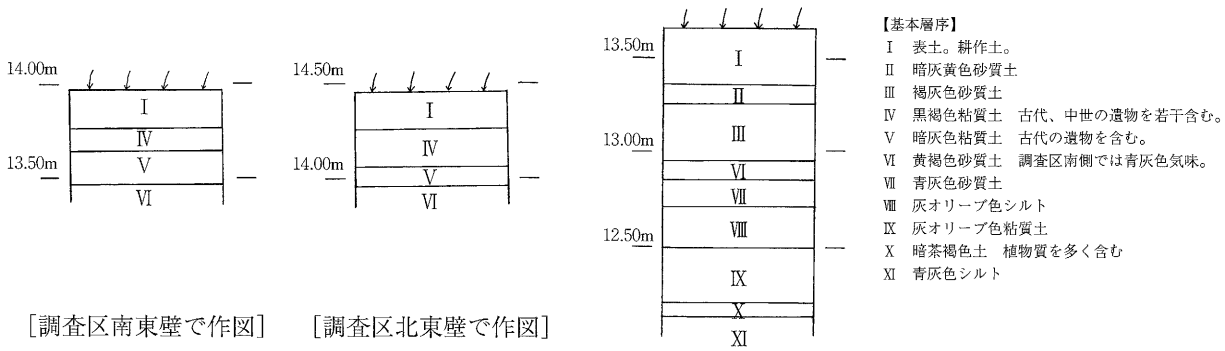
整理調査及び報告書作成作業については、基本的に山武考古学研究所群馬支店で実施した。細部をのぞき、こちらも高岡市教育委員会の作成した仕様書にもとづき、洗浄・注記・接合・復元といった一連の作業を行った。

地形と層序

岩坪岡田島遺跡そのものは複数の地形上に立地するが、今回の調査区周辺については、前出した西山丘陵に付随する開析谷付近に立地している。現地は調査を開始する直前まで水田として利用され、区画整理の際に整地が行われたものの、大きな地形の改変はなかったとみられる。

基本層序については地点により異なる。調査区東側と西側では表土（耕作土）を最上層とし、以下、黒褐色粘質土層・暗灰色粘質土層の順にそれぞれ20cmほど堆積しており、その直下に地山（基盤層）が現れる。調査区の中央部付近では、表土（耕作土）より下位では、厚さ40cm前後の暗褐色粘質土層と、同20cmの暗灰色砂質土層の順に堆積し、その直下に青灰色砂質土の地山が現れる。ちなみに、地山は青灰色ないし黄褐色砂質土を基本とする。基本的に、谷筋と直行する方面では概ね水平な層序堆積を呈するが、谷筋と平行する側ではその開口部の南側へと向い約３～５°の緩やかな勾配を呈して下る傾向にある。

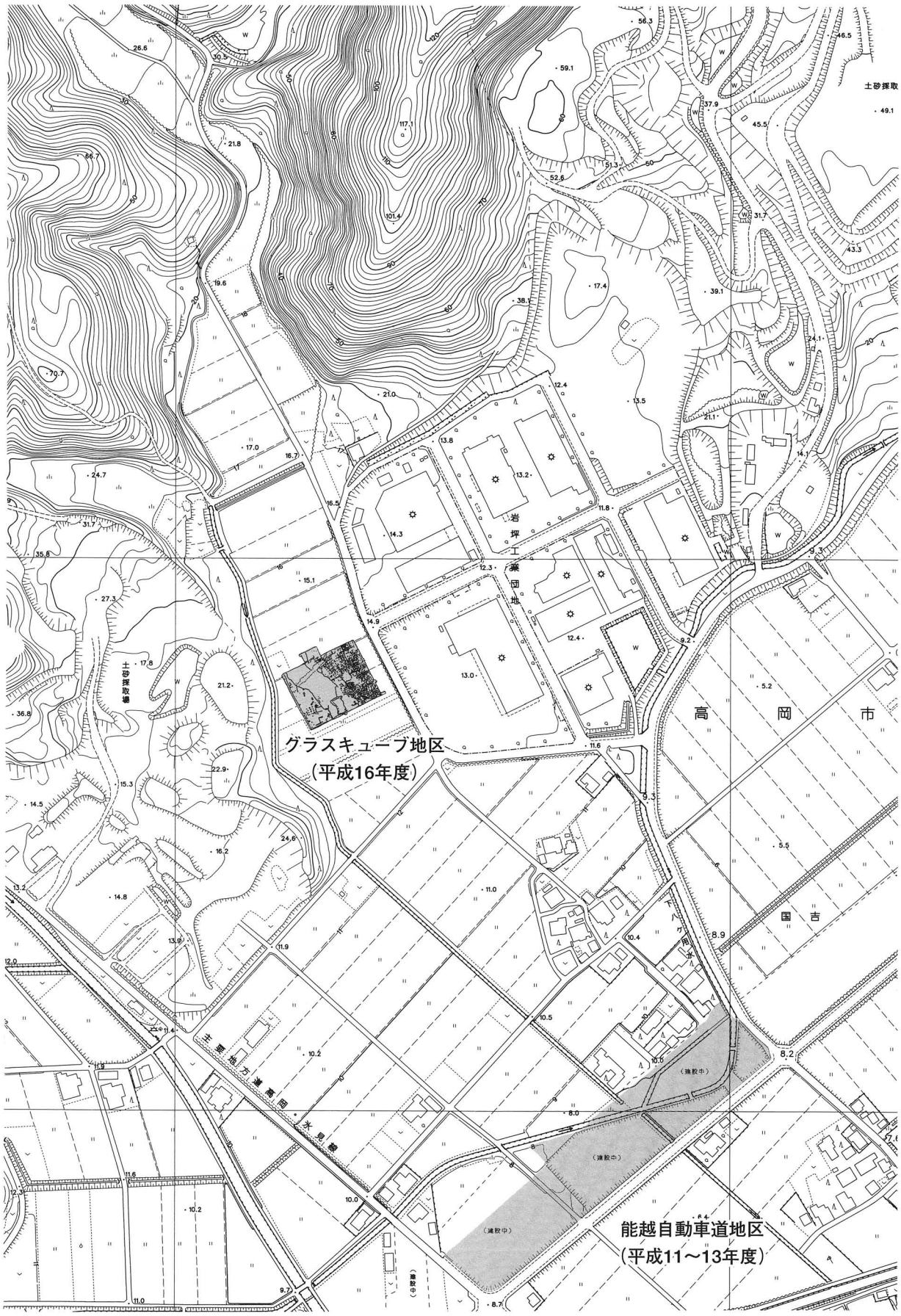
中世から古代までの遺構の確認面は、下図においてⅥ層と表記した青灰色及び黄褐色砂質土の上面である。ちなみにⅣ層とⅤ層中からは中世ないし古代の遺物の出土をみた。



［調査区南東壁で作図］　［調査区北東壁で作図］

［調査区中央北寄りで作図］

第５図　基本層序（１／40）



第６図　岩坪岡田島遺跡調査区位置図（１／5,000）『高岡市都市計画地図』に一部加筆

第2章　遺　　構

岩坪岡田島遺跡（グラスキューブ地区）における本発掘調査区においては、１面の遺構確認面から、古墳時代後期・古代・中世といった時代に帰属するものと思われる遺構が検出されている。検出遺構は掘立柱建物20棟（SB01～20）、柵列３条（SA01～03）、小穴300余基、土坑23基（SK01～05・08～13・15～23・26～28）、井戸１基（SE01）、溝30条（SD02～12・14～26・30～35）、である。以下にその概略を記載する。

掘立柱建物及び小穴

調査区中央を縦断する浅い谷を挟んで西側に１棟、東側に19棟で、合計20棟の掘立柱建物が組み立てられた。

とりわけ、建物群の密集した東側は建物どうしの重複が著しく、柱根が遺っていたり、半截した土層断面に柱痕跡が観察されたりした小穴に柱筋が通らず、組み立てた建物跡から取り残された小穴が300余基も在り、本書で掲載した建物以外にも何棟か組み立てられるものと考える。上記20棟の建物を構造別に分類するならば、側柱構造を呈するものが16棟であるのに対し総柱構造の建物は４棟と少ない。これとは別に付属施設という点では、総計20棟のうち庇をもつと考えたもの６棟、建物の外側に溝を付帯するものが４棟検出されているものと思われる。

各建物の規模は、SB02の6間×５間を最大とし、4間×2間が4棟、3間×2間と5間×3間が3棟ずつ、5間×2間が2棟である。

建物の方向は次のAからDまでの４大別を提起したい。A群は真北を基軸としてN－21～27°－Wを呈するものとしたい（SB01・02・04・10・12・16・18～20）。また、Ｂ群は同N－34～39°－Wを呈するものとし（SB03・05・06・11・13）、さらにＣ群は同N－76～80°－Wを呈するものとする（SB07・08・09・15）。そしてD群についてはN－48～52°－Wを呈するものとしたい（SB14・17）。

次に掘方の規模から各建物を概観するならば、上端径40cmを基準としてこれよりも規格の大きいSB01・08・09などの9棟が所在する。上記基準より小規模を呈するのはSB02など11棟である。

また、掘方の平面形状は略円形と楕円形を主とし、方形基調の可能性があるのはSB01のそれだけである。柱根に限定されるものの、柱として丸太材を使用したと思われる20個体が確認されている。多くは下端を粗く調整し、表皮を剥いだだけのものとみられるが、小穴P102と小穴P364では丸太分割材が用いられていた。

掘方の基底部からは、栗石及び土錘をこれに代用したとみられるものが数基確認されている。SB10－P10では扁平な河原石を礎板とし、その直下に2個体の土錘を栗石の代用とされていた。同様な例としてはSB20－P7がある。一方、これとは別に拳大ほどの石を栗石とする小穴P360も特筆される。

掘方の出土遺物を勘案するに今回の調査で検出された掘立柱建物の築造年代は4時期に及ぶものと思われる。SB19は7世紀から8世紀前半、SB01は8世紀後半から9世紀前半、SB08・09など11棟は9世紀後半から10世紀代、SB03・06など6棟は11世紀代から12世紀前半にそれぞれ帰属するものと考えられる。

掘立柱建物SB01（図面2、図版2－2・9－2）

調査区南西端の谷を挟んだ西側H－６区の平坦面に立地する。建物群の密集した谷の東側とは異なり、西側は本建物１棟のみで他遺構との重複も無い。桁行（南北）3間×梁間（東西）2間の総柱式建物で、棟方向はN－22°－Wを指す。桁行全長5.90m、梁間全長5.20m、柱間は桁行が北から1.90＋1.90＋2.10mでほぼ７尺等間、梁間は西から2.70＋2.50mである。床面積は30.68㎡である。

掘方内に柱根が遺存しているものがP7・8、P10は断面で柱痕のみ確認した。P7・8の柱根は直径26～28㎝の丸太材を用い、下端底面は斧で粗く平らに調整している。また、P5・6・11は、土層断面が単層なことから柱抜き取りも考えられる。掘方の規模は大きく、平面形状はいずれも方形基調とみられ、深さは15～43㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、強い粘性を持つ灰色粘質土を基調に4層に分けられた。掘方内から8世紀後半から9世紀前半の所産である須恵器甕・蓋が出土している。

掘立柱建物SB02（図面3・18、図版3－1、10、表3）

谷を挟んだ東側の調査区北東側C－9・10、D－9・10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB10・11と重複しており、新旧関係は不明である。桁行（東西）6間×梁間（南北）5間の側柱式建物で、北辺と東辺の2面に庇を付設している。棟方向はN－63°－Eを指す。桁行全長11.93m、梁間全長10.08m、柱間は桁行が北から1.62＋1.70＋1.94＋2.35＋2.56＋2.00m、梁間は西から2.34＋1.38＋1.34＋1.98＋2.80mである。床面積は120.25㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形、掘方は小さめで、深さは9～38㎝である。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土である。掘方内から僅少ではあるが、土師器甕・皿が出土した。うち、10世紀代に比定される底部回転糸切り無調整土師器皿（1）を掲載した。

掘立柱建物SB03（図面2、図版3－2・9－3）

調査区北東側B－9区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、溝SD15～17・35と重複しており、いずれも本建物が古い。桁行（東西）3間×梁間（南北）1間の側柱式建物で、南辺に庇を付設する。棟方向はN－56°－Eを指す。桁行全長5.98m、梁間全長2.24m、柱間は桁行が北から1.70＋2.20＋2.08mである。床面積は13.40㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、深さは17～38㎝である。掘方はやや小さめで、ほぼ直に掘り込まれているものが多い。掘方埋土は、径10～30mm大の炭塊を２～３％含む粘性を持つ黒灰色土を基調とし、P9内からはとりわけ大きな径30～50mm大の炭塊が出土した。掘方内から11世紀後半に帰属する土師器柱状高台杯、土錘が出土した。

掘立柱建物SB04（図面4、図版4－1）

調査区北東側B－8・9、C－8・9区の平坦面に立地する。遺構群の密集したなかに在り、本建物も溝SD21・22・23・35と重複しており、新旧関係はいずれも本建物が古い。桁行（南北）4間×梁間（東西）１間の側柱式建物で、北辺と西辺の二面に庇を付設している。棟方向はN－25°－Wを指す。桁行全長6.63m、梁間全長2.12m、柱間は桁行が北から1.30＋1.74＋1.74＋1.85mである。床面積は14.06㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は小さめである。深さは15～23㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、炭を少量含む灰黒色粘質土を主体とする。掘方内から僅少ではあるが、土師器甕・杯が出土している。10世紀代に帰属するとみられる。

掘立柱建物SB05（図面5・18、図版4－2、10、表3）

谷を挟んだ東側C－7・8、D－7・8区の緩斜面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB06と重複している。新旧関係関係は柱穴の切り合いから本建物が新しいとみた。桁行（東西）5間×梁間（南北）3間の総柱式建物で、棟方向はN－38°－Wを指す。桁行全長10.55m、梁間全長9.46m、柱間は桁行が北から2.06＋1.80＋1.86＋2.55＋2.18m、梁間は西から2.85＋3.75＋2.86mである。床面積は99.80㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形である。深さは８～37㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、暗灰色粘質土を主体とする。柱掘方内から須恵器甕・杯、土師器杯などが出土した。うち、土師器甕（2）と木

製皿（3）を掲載した。11世紀代に帰属する。

掘立柱建物SB06（図面5・6、図版4－2）

谷を挟んだ東側D－7・8、C－8区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB05と重複しており、新旧関係関係は柱穴の切り合いから本建物が古いとみた。桁行（東西）2間×梁間（南北）2間の総柱式建物で、棟方向はN－40°－Wを指す。桁行全長6.20m、梁間全長4.35m、柱間は桁行が北から3.15＋2.84m、梁間は西から2.18＋2.16mである。床面積は27.00㎡である。

P7の掘方内に柱根が遺存していた。柱根は径27㎝の丸太材を用い、底面は斧で粗く平らに調整している。柱掘方の平面形状は円形か楕円形で、掘方は小さめである。深さは10～35㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から遺物は前述の柱根以外は出土しなかった。P7の柱根はAMS法による年代測定の結果、11世紀前半から13世紀前半までの結果が出された。

掘立柱建物SB07（図面6、図版5－1）

調査区北東側B－9・10区の平坦面に立地する。溝SD14・35と重複し、新旧関係はいずれも本建物が古い。南西端の柱穴は溝SD35に切られて消滅している。桁行（東西）2間×梁間（南北）2間の総柱式建物で、棟方向はN－77°－Eを指す。桁行全長4.25m、梁間全長4.12m、柱間は桁行が北から2.01＋2.20m、梁間は西から2.14＋2.16mである。床面積は17.51㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は小さめである。深さは12～32㎝で、ほぼ直に掘り込まれている。掘方埋土は、炭を少量含む暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から僅少ではあるが、土師器甕が出土している。細片で図示はできなかったが器形と器面調整から6～7世紀のものとみられるが、流れ込みの可能性もある。

掘立柱建物SB08（図面6・18、図版10、表3）

調査区北東側D－10、E－10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB09・13や、溝SD11・32と重複している。新旧関係はSB09については不明であり、溝との関係は本建物が古い。桁行（東西）3間×梁間（南北）2間の側柱式建物で、棟方向はN－8°－Eを指す。桁行全長6.49m、梁間全長4.44m、柱間は桁行が北から2.25＋2.30＋1.75m、梁間は西から1.96＋2.50mである。床面積は28.82㎡である。

掘方内で柱根遺存が確認できたのがP1・8・10である。P1の柱根は幅24㎝、厚さ17㎝の分割材、P8・10は径16～19㎝大の丸太材を用いている。掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は大きい。深さは16～43㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は極暗褐色粘質土を主体とする。

柱掘方内から須恵器瓶・杯・蓋、土師器杯が出土した。うち、10世紀代に比定される足長高台土師器杯など3点である。土師器杯（5・6）、須恵器高台付杯（4）を掲載した。また、P10の柱根をAMS法による年代測定した結果、8世紀後半から10世紀後半までの結果が出された。

掘立柱建物SB09（図面7・18、図版10、表3）

調査区東側D－10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB02・08や、溝SD11・26と重複しているが新旧関係は不明である。桁行（東西）3間×梁間（南北）3間の側柱式建物で、棟方向はN－14°－Eを指す。桁行全長6.46m、梁間全長6.18m、柱間は桁行が北から2.16＋1.92＋2.34m、梁間は西から1.86＋2.46＋2.25mである。床面積は39.92㎡である。

掘方内で柱根遺存が確認できたのがP2・11である。P2の柱根は径24㎝、P11は径20㎝のいずれも丸太材を用いている。掘方の平面形状は円形か楕円形で、P7・8を除くといずれも規模は大きい。深さは8～48㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は極暗褐色粘質土を主体とする。

掘方内から須恵器瓶・蓋、底部回転糸切り無調整の土師器杯、製塩土器が出土した。うち、10世紀代に比定さ

れる内面黒色処理土師器杯（7）を掲載した。

掘立柱建物SB10（図面3・4・25、図版5－2・7－1、15、表5）

谷を挟んだ東側の調査区北東側C－9・10、D－9・10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB02・11と重複しているが新旧関係は不明である。桁行（東西）4間×梁間（南北）3間の側柱式建物で、棟方向はN－63°－Eで、SB02と同じ方向を指す。桁行全長11.64m、梁間全長5.86m、柱間は桁行が北から2.96＋3.62＋2.52＋2.42m、梁間は西から1.95＋2.02＋1.78mである。床面積は68.21㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は小さめである。深さは8～32㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土を主体とする。柱掘方内から僅少ではあるが、11世紀代に帰属する口縁部内傾の土師器甕や底部回転糸切り離し無調整の杯が出土した。P10出土の土錘（106・107）を掲載した。

掘立柱建物SB11（図面3・4、図版5－2）

谷を挟んだ東側C－9、D－9・10区の平坦面に立地する。本建物は建物群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB02・10と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行（東西）5間×梁間（南北）2間の側柱式建物で、棟方向はN－60°－Eを指す。桁行全長10.65m、梁間全長3.96m、柱間は桁行が北から2.04＋2.08＋1.86＋2.14＋2.32m、梁間は西から1.98＋1.84mある。床面積は42.17㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、掘方は小さめである。深さは6～37㎝で、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器瓶・甕・杯、土師器甕・杯が出土している。底部回転糸切り無調整で内面黒色処理の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB12（図面７）

調査区東側B－10、C－10・11、D－10区の平坦面に立地する。桁行（東西）6間×梁間（南北）2＋α間の総柱式建物で、棟方向はN－27°－Wを指す。桁行全長14.40m、梁間全長3.16＋αm、柱間は桁行が北から1.60＋2.52＋2.74＋3.04＋2.58＋1.86m、梁間は西から2.00＋αmである。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は小さめである。深さは13～32㎝で、ほぼ直に掘り込まれている。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器甕・杯、土師器甕・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB13（図面７・18、図版10、表３）

調査区東側D－10・11、E－10・11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB08・14・15や、溝SD32と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行（東西）3間×梁間（南北）2間の側柱式建物で、棟方向はN－56°－Eを指す。桁行全長7.90m、梁間全長5.23m、柱間は桁行が北から2.70＋2.74＋2.28m、梁間は西から3.05＋2.10mである。床面積は41.32㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は大きめである。深さは16～44㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径10～30mm大の炭塊を2～3％含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から土師器甕・杯、製塩土器などが出土している。内面黒色処理及び足長高台の土師器杯は10世紀代に比定される。古墳時代後期の手捏ね土器（8）と製塩土器（9）を掲載した。

掘立柱建物SB14（図面8・18、図版7－2、10、表3）

調査区東側D－11、E－11区の平坦面に立地する。本建物は建物群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB13・15や、溝SD32と重複している。新旧関係溝より本建物が古い。桁行（東西）5間×梁間（南北）2間の側柱式建物で、棟方向はN－52°－Wを指す。桁行全長10.36m、梁間全長4.76m、柱間は桁行が北から1.92＋2.38＋1.70＋2.45＋1.98m、梁間は西から2.38＋2.32mである。床面積は49.31㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは10～50㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径５～20㎜大の炭塊を２～３％含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から土師器甕・杯、製塩土器などが出土した。10世紀代に比定される足長高台の土師器杯（10）と土師器甕（11・12）を掲載した。

掘立柱建物SB15（図面8・18、図版10、表3）

調査区南東側E－11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB13・14と重複しているが新旧関係は不明である。桁行（東西）3間×梁間（南北）2間の側柱式建物で、棟方向はN－77°－Wを指す。桁行全長8.43m、梁間全長5.20m、柱間は桁行が北から2.62＋2.98＋2.84m、梁間は西から2.46＋2.65mである。床面積は43.84㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは18～41㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10㎜大の炭塊を1％程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から土師器甕・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB16（図面9、図版６－１）

調査区南東側E11、Ｆ－10・11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB17や、溝SD03・05・07・31・33と重複しており、新旧関係は溝より本建物が古い。桁行（東西）5間×梁間（南北）3間の側柱式建物で、棟方向はN－59°－Eを指す。桁行全長10.06m、梁間全長6.40m、柱間は桁行が北から1.35＋2.74＋1.45＋2.10＋2.52m、梁間は西から1.60＋2.24＋2.15mである。床面積は64.38㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは12～40㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径５～10㎜大の炭塊を1％程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器甕、土師器甕・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB17（図面9）

調査区南東側Ｆ－11・12区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB16・18や、溝SD04・05と重複しており、新旧関係は本建物が溝より古い。桁行（東西）４間×梁間（南北）２間の側柱式建物で、棟方向はN－42°－Eを指す。桁行全長6.88m、梁間全長4.50m、柱間は桁行が北から1.60＋1.54＋2.00＋1.72m、梁間は西から2.70＋1.52mである。床面積は30.96㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模はバラツキがある。深さは８～33㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10㎜大の炭塊を１％程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器甕・杯、土師器甕・杯が出土した。内面黒色処理や底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB18（図面10）

調査区南東側Ｆ－11・12、Ｇ－11・12区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB17、溝SD03・05と重複している。新旧関係は溝SD05よりも本建物のほうが新しい。またSD03は掘立柱建物SB17の付帯溝と考えられ、いずれも本建物のほうが古い。桁行（東西）3間×梁間（南北）２間の側柱式建物で、棟方向はN－21°－Wを指す。桁行全長5.90m、梁間全長4.41m、柱間は桁行が北から1.90＋2.20＋1.86m、梁間は西から2.16＋2.24mである。床面積は26.02㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは10～48㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10㎜大の炭塊を1％程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器瓶・杯、土師器甕・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB19（図面10、図版６－１）

調査区南東側F－10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物溝SD02・12と重複しており、新旧関係は本建物が古い。桁行（東西）4間×梁間（南北）2間の側柱式建物で、棟方向はN－21°－Eを指す。桁行全長8.20m、梁間全長4.28m、柱間は桁行が北から1.98＋2.35＋1.75＋2.02m、梁間は西から2.30＋2.12mである。床面積は35.10㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模はバラツキがある。深さは12～46㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径５～10㎜大の炭塊を1％程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から7世紀～8世紀前半に比定される土師器甕・杯が出土した。

掘立柱建物SB20（図面11・25、図版6－2、15、表5）

調査区南東側Ｆ－９・10、Ｇ－９区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、溝SD08と重複しており、新旧関係は本建物のほうが新しい。桁行（東西）5間×梁間（南北）3間の側柱式建物で、棟方向はN－29°－Eを指す。桁行全長8.82m、梁間全長5.98m、柱間は桁行が北から0.84＋2.40＋1.32＋1.35＋2.70m、梁間は西から1.70＋2.55＋1.65mである。床面積は51.95㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは18～41㎝で、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10㎜大の炭塊を１％程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器蓋、土師器甕・杯、製塩土器が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。土錘（104）を掲載した。

本建物に付帯する溝SD09が、本建物東側をコの字形に囲むように廻る。出土遺物は10世紀代のもので占められる。なお、詳細は溝の項目による。

柵　列

柵列SA01（図面12）

調査区北東側B－9、C－9・10区の平坦面に立地し、直線的に小穴列が並ぶ。掘立柱建物SB02の北側に在り、柱穴列方向はN－60°－Eを指し、柵列全長11.40m、間隔は西から0.42＋1.60＋2.12＋3.20＋2.00＋0.95＋0.92mである。掘方の平面形状はいずれも円形基調とみられ、平面規模は小さめで、深さは６～23cm、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土はやや粘性を持つ暗灰色土を基調とする。掘方内からは遺物は出土しなかった。また、相互の位置的なことから掘立柱建物SB02の庇の可能性も考えられる。

柵列SA02（図面12、図版6－2）

調査区南東側E－9、F－9・10区の平坦面に立地し、直線的に柱穴列が並ぶ。掘立柱建物SB20の東側に在り、小穴列方向はN－30°－Wを指し、柵列全長7.68m、間隔は西から2.08＋1.30＋1.30＋1.20＋0.96mである。掘方の平面形状はいずれも円形基調とみられ、平面規模は小さめで、深さは6～30cm、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は強い粘性を持つ灰色粘質土を基調とする。掘方内からは遺物は出土しなかった。

柵列SA03（図面１２、図版6－2）

調査区南東側E－9、F－9・10区の平坦面に立地し、コの字状に柱列が並ぶ。掘立柱建物SB20の北側に在り、小穴列方向はN－39°－Wを指し、柵列全長18.66m、間隔は西から1.54＋3.26＋2.54＋1.40＋1.74＋2.04＋1.65＋2.16＋0.88＋1.45mである。掘方の平面形状はいずれも円形基調とみられ、平面規模は小さめで、深さは10～31cm、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、強い粘性を持つ灰色粘質土を基調とする。P2掘方内に柱根が遺存していた。柱根は表皮を剥いだ直径19cmの丸太材を底面だけ斧で粗く平らに調整している。また、

掘方内から9～11世紀代の土師器甕・杯が出土した。相互の位置的なことから溝SD10を付帯する建物の可能性も考えられる。

土　坑

今回の調査区では総計28基の土坑の掘削を試みた。このうちSK06・07・14・24・25の５基については、近・現代のものであることが整理調査段階で判明したため、本書では残りの23基のみを掲載することとした。

土坑SK01（図面13）

調査区南西側のI－6区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸84cm、短軸62cm、深さ12cm、長軸方向はN－55°－Wを指す。埋没土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は10世紀代に比定される土師器甕・杯の細片である。

土坑SK02（図面13）

調査区南西側のI－6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は椀形である。規模は、長軸55cm、短軸43cm、深さ９cm、長軸方向はN－26°－Wを指す。埋没土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に２層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK03（図面13）

調査区南西側のI－6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸49cm、短軸44cm、深さ８cm、長軸方向はN－29°－Wを指す。埋没土は炭を含む灰黒色粘質土を主体に２層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK04（図面13）

調査区南西側のI－7区の平坦面に立地する。平面形は不規則な楕円形、断面形は逆台形で、底面に凹凸がある。規模は、長軸119cm、短軸55cm、深さ14cm、長軸方向はN－79°－Ｅを指す。覆土は炭を含む褐灰色粘質土を主体に３層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK05（図面13）

調査区南西側のH－6区の平坦面に立地する。平面形はほぼ方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸62cm、短軸57cm、深さ14cm、長軸方向はN－76°－Ｅを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に4層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK08（図面13）

調査区南西側のI－5区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸62cm、短軸58cm、深さ14cm、長軸方向はN－68°－Ｅを指す。覆土は暗褐色砂質土の単層である。出土遺物は無い。

土坑SK09（図面13）

調査区南西側のH－5区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸95cm、短軸50cm、深さ23cm、長軸方向はN－25°－Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に２層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK10（図面13）

調査区南西側のH－5区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸58cm、短軸54cm、深さ10cm、長軸方向はN－21°－Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK11（図面13）

調査区南西側のH－5区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸59cm、短軸41cm、深さ10cm、長軸方向はN－50°－Wを指す。覆土は炭を含む灰褐色砂質土の単層である。出土遺物は無い。

土坑SK12（図面13）

調査区西側のG－6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸129cm、短軸109cm、深さ43cm、長軸方向はN－64°－Eを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK13（図面13）

調査区西側のG－6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸205cm、短軸77cm、深さ26cm、長軸方向はN－24°－Eを指す。覆土は炭を含む灰黒色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK15（図面13）

調査区西側のG－6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸146cm、短軸103cm、深さ14cm、長軸方向はN－39°－Wを指す。覆土は炭を含む暗褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK16（図面13・19、図版11、表３）

調査区西側のG－６区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸84cm、短軸67cm、深さ10cm、長軸方向はN－17°－Wを指す。覆土は灰褐色砂質土で単層である。出土遺物は無い。

土坑SK17（図面13・19、図版11、表３）

調査区西側のF－5区の平坦面に立地する。平面形は不定形で複数の土坑が重なっていた可能性もある。断面形は皿形である。規模は、長軸168cm、短軸138cm、深さ17cm、長軸方向はN－43°－Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は9世紀代に比定される土師器甕・杯が出土し、うち土師器甕(23･24)を掲載した。

土坑SK18（図面14）

調査区西側のG－6区の平坦面に立地する。平面形は方形、断面形は皿形である。規模は、長軸121cm、短軸89cm、深さ11cm、長軸方向はN－86°－Eを指す。覆土は黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK18（図面14）

調査区西側のE－4、F－4区の平坦面に立地する。平面形は方形、断面形は皿形である。規模は、長軸70cm、短軸69cm、深さ16cm、長軸方向はN－20°－Wを指す。覆土は黒褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は9世紀代に比定される須恵器蓋と土師器甕の細片である。

土坑SK20（図面14）

調査区西側のE－4区の平坦面に立地する。平面形は方形基調、断面形は皿形である。規模は、長軸97cm、短軸73cm、深さ10cm、長軸方向はN－4°－Wを指す。覆土は暗褐色土で単層である。出土遺物は8・9世紀代に比定される土師器甕の細片である。

土坑SK21（図面14・19、図版11、表3）

調査区西側のF－5区の平坦面に立地する。平面形は円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸92cm、短軸

89cm、深さ24cm、長軸方向はN－47°－Eを指す。覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物は8～9世紀代に比定される須恵器杯・蓋と土師器甕が出土し、うち須恵器杯（25）を掲載した。

土坑SK22（図面14・19・25、図版11・15、表３・５）

調査区西側のF－５区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は、長軸110cm、短軸73cm、深さ８cm、長軸方向はN－85°－Wを指す。覆土は褐灰色砂質土で単層である。出土遺物は８世紀後半に比定される須恵器甕・杯と土師器甕が出土し、うち須恵器杯（26）、土錘（119）を掲載した。

土坑SK23（図面14）

調査区南東側のG－11区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸144cm、短軸74cm、深さ26cm、長軸方向はN－33°－Wを指す。覆土は暗褐色土を主体に2層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK26（図面14）

調査区東側のE－10区の平坦面に立地する。平面形は不定形、断面形は逆台形である。規模は、長軸126cm、短軸96cm、深さ18cm、長軸方向はN－69°－Eを指す。覆土は灰黒色土で単層である。出土遺物は10～11世紀代に比定される土師器甕・杯である。土師器杯には底部回転糸切り離し無調整や内面黒色処理の技法がみられる。

土坑SK27（図面14）

調査区南東側のF－8・9区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸 122cm、短軸102cm、深さ8cm、長軸方向はN－37°－Wを指す。覆土は灰褐色砂質土で単層である。出土遺物は10世紀代に比定される底部回転糸切り離し無調整の土師器杯が出土した。

土坑SK28（図面14・19、図版９－１・11、表３）

調査区東側のC－9、D－9区の平坦面に立地する。平面形はやや不定な長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸359cm、短軸110cm、深さ15cm、長軸方向はN－83°－Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土で単層である。出土遺物は8世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕が底面着でまとまって出土し、うち土師器甕（27･28）を掲載した。

井　戸

井戸ＳＥ01（図面14・20、図版８－２・３、11、表３）

調査区南東側のG－10区の緩斜面に立地する。素掘りである。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸210cm、短軸166cm、深さ100cm、長軸方向はN－53°－Eを指す。覆土は炭を含む黒褐色砂質土を主体に9層に分層される。全体的にレンズ状堆積で、井戸側を抜き取ったような痕跡も観察されなかった。出土遺物は土師器甕・杯などが出土し、うち12世紀代に比定される白磁碗（29）と、板材（30～33）を掲載した。

溝

現地調査の時点では38条確認されたが、整理調査段階で土坑に変更し、溝SD01のように近・現代の所産と判断したものは本報告から除外した。最終的な溝の数は30条である。また、溝SD30・37・38も現地調査で出土遺物や掘り込み面などから近・現代の所産と判断したため、全体は掘りあげなかった。溝SD37・38は耕地整理直前まで谷筋に沿って走行していた水路で、昭和21年撮影の航空写真でも看取できる。また、遺跡全体図で調査区を縦断する浅い谷の外端として図化した線は、耕地整理直前の水路溝SD37・38の護岸用に打ち込まれた板材の分布線である。

なお、30条の溝は、すべて調査区を縦断する浅い谷を挟んで東側に偏在し、その大半は建物に付設するものと考える。西側は、近・現代の耕作に関連する溝で、遺構として取り扱わなかった。

溝SD02（図面15・20・25、図版11・15、表3・5）

調査区東側のF－10・11，G－10・11区に位置し、東西方向に湾曲ぎみに走行する。断面形は逆台形、上幅56～98cm、全長8.30m、深さ15～50cmである。覆土は暗灰褐色土を主体とする。土師器杯や土錘が出土した。柱状高台の土師器杯（34）・土錘（109）を掲載した。11世紀から12世紀前半の遺物が主体である。

溝SD03（図面15）

調査区南東側のF－11・G－10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅36～45cm、全長8.78＋αm、深さ4～12cm、走行方向はN－48°－Wである。覆土は黒褐色土の単層である。土師器甕、須恵器杯が出土した。9世紀代の遺物が主体。位置的に掘立柱建物SB17に付設するものと考える。

溝SD04（図面15、図版10）

調査区東側のF－11・G－11区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅48～70cm、全長5.50＋αm、深さ5～6cm、走行方向はN－14°－Wである。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物は僅少ながら9世紀代の須恵器杯が出土した。

溝SD05（図面15・20、図版11、表3）

調査区南東側のF－11・12区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は逆台形、上幅48～74cm、全長6.15m、深さ7～12cm、走行方向はN－46°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。一部7世紀代の須恵器も混じるが主体は8世紀後半から9世紀前半の遺物である。須恵器杯（35）高台付杯（36）を掲載した。

溝SD06（図面15・20、図版12、表3・4）

調査区南東側のG－11区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅38～66cm、全長2.95＋αm、深さ7～8cm、走行方向はN－50°－Wである。覆土は黒褐色土の単層である。土師器甕、須恵器杯・甕・木製品が出土した。9世紀代の遺物が主体とする。須恵器杯（37・38）・甕（39・40）、土師器甕（41）、板材（42・43）を掲載した。位置的に掘立柱建物SB17に付設する可能性がある。

溝SD07（図面15）

調査区南東側のF－11に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅29～43cm、全長4.30m、深さ4～6cm、走行方向はN－12°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。僅少ながら土師器甕、須恵器杯が出土した。

溝SD08（図面15）

調査区南東側のF－9・10に位置し、東西方向に湾曲的に走行する。断面形は皿形、上幅38～73cm、全長9.95m、深さ5～10cm、走行方向はN－13°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。土師器甕、須恵器杯が出土した。9世紀代の遺物が主体である。

溝SD09（図面15・21、図版12、表4）

調査区東側のE－9・F－10区に位置し、掘立柱建物SB20の東側を「コ」の字形に走行する。断面形は皿形、上幅30～54cm、全長18.00＋αm、深さ5～15cm、走行方向はN－52°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。土師器甕、須恵器杯・瓶が出土した。9世紀代の遺物が主体である。須恵器双耳瓶（44）を掲載した。位置的に掘立柱建物SB20に付設する可能性がある。

溝SD10（図面15）

調査区東側のE－9・10区に位置し、東西方向に湾曲的に走行する。断面形は皿形、上幅32～88cm、全長9.54m、

深さ４～12㎝、走行方向はN－62°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器杯、須恵器甕・杯が出土した。

溝SD11（図面16・21・25、図版12・15、表4・5）

調査区東側のD－9・10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅31～82㎝、全長12.95＋αｍ、深さ４～10㎝、走行方向はN－68°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器杯・甕、須恵器甕・瓶、製塩土器が出土した。他に流れ込みと見られる古墳時代の土師器坩も出土した。須恵器瓶（45）、土師器杯（46）・坩（47）、土錘（113）を掲載した。

溝SD12（図面15）

調査区南東側のG－10区に位置し、南北方向にやや湾曲的に走行する。断面形は皿形、上幅32～48㎝、全長4.02＋αｍ、深さ４～11㎝、走行方向はN－50°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶が出土した。

溝SD14（図面15）

調査区北東側のＢ－9・10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅25～48㎝、全長3.82＋αｍ、深さ４～８㎝、走行方向はN－31°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り離し無調整で内面黒色処理の土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土した。位置的に掘立柱建物SB03に付設する可能性がある。

溝SD15（図面15）

調査区北東側のＢ－9区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅18～50㎝、全長5.38＋αｍ、深さ２～10㎝、走行方向はN－56°－Eである。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。11～12世紀前半に比定される土師器柱状高台杯、須恵器杯・甕が出土した。

溝SD16（図面16）

調査区北東側のB－9、C－9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅40～70㎝、全長11.74＋αｍ、深さ13～19㎝、走行方向はN－19°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り離し無調整の土師器杯が出土した。

溝SD17（図面16）

調査区北東側のB－9区に位置し、L字状に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅24～66㎝、全長8.60＋αｍ、深さ8～9㎝、走行方向はN－30°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。９世紀代の遺物が主体である。8・9世紀代に比定される須恵器甕が出土した。

溝SD18（図面15）

調査区北東側のB－8・9区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅14～46㎝、全長9.06ｍ、深さ３～10㎝、走行方向はN－60°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り離し無調整の土師器杯と甕が出土した。位置的に掘立柱建物SB03に付設する可能性がある。

溝SD19（図面15）

調査区北東側のB－9区に位置し、T字状に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅44～68㎝、全長（南北0.80＋αｍ、東西3.92ｍ）、深さ7～15㎝、走行方向はN－28°－WとN－64°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器甕・杯、須恵器杯・瓶が出土した。

溝SD20（図面16）

調査区北東側のB－9区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅26～40㎝、全長2.25ｍ、

深さ4～10cm、走行方向はN－65°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD21（図面16）

調査区北東側のC－8・9区に位置し、東西方向にやや湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅17～72cm、全長5.98m、深さ4～12cm、走行方向はN－80°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器甕・杯、須恵器杯が出土した。

溝SD22（図面16）

調査区北東側のC－8・9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅20～33cm、全長5.36m、深さ4～7cm、走行方向はNo－50°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD23（図面16）

調査区北東側のC－8・9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅14～28cm、全長6.40m、深さ3～6cm、走行方向はN－34°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り離し無調整の土師器杯と甕が出土した。

溝SD24（図面16）

調査区東側のD－9、E－9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅31～49cm、全長5.64m、深さ2～11cm、走行方向はN－34°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD25（図面16）

調査区東側のD－8・9区に位置し、南北方向にやや湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅24～58cm、全長4.10m、深さ2～5cm、走行方向はN－28°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。位置的に掘立柱建物SB11に付設する可能性がある。

溝SD26（図面16）

調査区東側のD－9・10区に位置し、東西方向に湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅37～46cm、全長5.17m、深さ5～9cm、走行方向はN－63°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD30（図面17）

調査区東側のB－8・9、C－6・7区に位置し、やや湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅408～674cm、全長28.95＋αm、深さ68～106cm、走行方向はN－18°－Eである。覆土は黒褐色粘質土と暗褐色砂質土を主体に11層に分層される。遺跡全体図に添付した縦断面から本溝が複数回掘り返されていることが確認できた。土師器甕・杯、須恵器甕が出土したが、本溝が古代から中世前期の小穴群を壊して掘り込まれていることから、時期的には新しくなると考える。

溝SD31（図面16）

調査区南東側のE－11、F－11区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅44～58cm、全長4.74m、深さ6～9cm、走行方向はN－5°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD32（図面17）

調査区東側のD－10・11、E－10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅116～190cm、全長13.36＋αm、深さ3～14cm、走行方向はN－57°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD33（図面17）

調査区南東側のF－11区に位置し、南北方向にほぼ直線的に走行する。断面形は皿形、上幅38～58cm、全長4.05m、深さ7～13cm、走行方向はN－20°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD34（図面17）

調査区北東側のC－8区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅16～34㎝、全長2.08m、深さ3～6㎝、走行方向はN－52°－Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。位置的に掘立柱建物SB05に付設する可能性がある。

溝SD35（図面17）

調査区北東側のB－8・9・10区に位置し、T字状に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅19～76㎝、全長（南北5.56＋αm、東西14.05m）、深さ2～17㎝、走行方向はN－30°－WとN－62°－Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

第3章　遺　　物

掘立柱建物出土遺物

掘立柱建物SB02（図面18、図版10、表3）

1はロクロ土師器皿で、肉厚な底部から直線的に開く。

掘立柱建物SB05（図面18、図版10、表3）

2は土師器甕である。口縁部は僅かに外反して受口状になる。3は木製皿で、柱穴P21掘方内から出土した。

掘立柱建物SB08（図面18、図版10、表3）

4は須恵器杯で、底部を回転篦切り離し後高台が貼り付けられた。5・6はロクロ土師器杯で、いずれも柱穴掘方内から出土した。5は肉厚な底部で回転糸切り離し無調整であり、6は回転糸切り離し後高台貼り付けられた。

掘立柱建物SB09（図面18、図版10、表3）

7は内面黒色処理のロクロ土師器杯である。

掘立柱建物SB13（図面18、図版10、表3）

8は手捏ね土器で、柱穴掘方への流入とみられる。9は製塩土器の口辺部で、内外面とも輪積痕、被熱痕とも明瞭である。

掘立柱建物SB14（図面18、図版10、表3）

10はロクロ土師器杯、11は土師器甕である。12は小型のロクロ土師器甕で口縁部は僅かに外反して受口状になる。

掘立柱建物SB15（図面18、図版10、表3）

13はロクロ土師器杯で回転糸切り離し無調整である。

小穴出土遺物

小穴P78（図面18、図版10、表3）

14は土師器甕で、内外面とも器面の摩耗著しく調整技法不明である。

小穴P114（図面18、図版10、表3）

15は流紋岩製の砥石で両端を欠損し、研面は4面である。

小穴P173（図面19、図版10、表3）

16は須恵器杯で、底部を回転篦切り離し後、高台が貼り付けられた。

小穴P195（図面19、図版10、表3）

17はロクロ土師器皿である。高台は足長で、皿部は水平気味に開く。

小穴P196（図面19、図版10、表3）

18は流紋岩製の砥石で、研面は4面である。

小穴P210（図面19、図版10、表3）

19はロクロ土師器杯で、底部を回転糸切り離し後、高台が貼り付けられた。高台部剥離している。

小穴P257（図面19、図版10、表3）

20はロクロ土師器杯で、底部は回転糸切り離し無調整である。

小穴P301（図面19、図版11、表3）

21は土師器甕で、胴部外面縦位篦削り後、横位の刷毛目調整をしている。内面は粗い刷毛目調整である。

小穴P369（図面19、図版11、表3）

22は柱状高台のロクロ土師器杯である。底部は回転糸切り離し無調整である。

土坑出土遺物

土坑SK17（図面19、図版11、表3）

23はロクロ成形の土師器甕で、口縁部は僅かに外反して受口状である。24は回転カキ目調整の土師器甕である。

土坑SK21（図面19、図版11、表3）

25は須恵器杯で、底部は回転篦切り離し無調整である。

土坑SK22（図面19、図版11、表3）

26は須恵器杯で、底部は回転篦切り離し無調整である。

土坑SK28（図面19、図版11、表3）

27・28は土師器甕である。いずれも器面の摩耗著しく、内外面の調整技法は不明である。古墳時代後期のものとみられる。

井戸出土遺物

井戸SE01（図面20、図版11、表3）

29は白磁碗である。削り高台で、太宰府分類の白磁碗Ⅶ類に該当するもので、12世紀代の製品とみられる。30～33はいずれも板目の板状木製品である。

溝出土遺物

溝SD02（図面20、図版11、表3）

34は柱状高台のロクロ土師器杯である。底部は回転糸切り離し無調整である。

溝SD05（図面20、図版11、表3）

35・36は須恵器杯である。いずれも底部は回転篦切り離しで、36はその後内端接地の高台を貼り付けた。

溝SD06（図面２０、図版12、表3・3）

37・38は須恵器杯である。いずれも底部は回転篦切り離し無調整である。39・40は須恵器甕である。39は外面縄目状の叩き、内面同心円状の当て具痕が見られる。40は頸部に波状文が施文されている。41は口辺部が外傾する土師器甕である。42・43は柾目の板状木製品である。

溝SD09（図面20、図版12、表3）

44は須恵器双耳瓶である。

溝SD11（図面20、図版12、表3）

45は須恵器瓶である。46はロクロ土師器杯である。回転糸切り離し後、足長な高台を貼り付けた。47は土師器坩である。６世紀代のもので流れ込みと考える。

遺物包含層出土遺物

古墳須恵器（図面21、図版12、表4）

古墳時代のものをまとめた。48は杯身で、丸底から稜をもち、口辺部は短く内傾して立ち上がる。49・50は甕で、頸部に２段の波状文を施文する。

古墳土師器（図面21、図版12、表4）

古墳時代のものをまとめた。51は高杯の脚柱部で、裾部が強く屈曲する。52は坩である。53から56は甕である。いずれも６世紀代に帰属するとみられる。

製塩土器（図面21・22、図版13・15、表4）

57～59である。厚手で、平底の鉢形である。内外面とも明瞭な輪積み痕と指頭圧痕がみられ、いずれも底部から体部下半にかけて明瞭な二次焼成痕が認められる。今回の調査で約15個体が出土し、掘立柱建物SB08・09付近の調査区東側中央部にやや集中がみられる。大半は、古代のものと思われる。

古代須恵器（図面22・23、図版13・14、表4）

古代のものをまとめた。60～66は蓋である。端部が短く屈曲するものや擬宝珠状の摘みが多くみられる。67～73は杯である。切り離し技法はいずれも回転篦切り離しである。67は器高が低く皿状である。杯は口径と底径の差が少ない。70は丸底気味、73は高台貼り付けで底部は出尻気味である。69の底部内面に「十」の刻書あり。74～79は壺で、74は短頸壷である。78・79は瓶で、78は双耳瓶の把手である。80～82は中世須恵器ないし珠州の可能性がある。細片であるため、一応この項目で記述する。80・81は甕である。82は鉢である。

古代土師器（図面23、図版14、表4・5）

古代のものをまとめた。83～85・87～90は杯、86は皿である。83は口径と底径の差が大きく、体部は内湾する。87・88は足長な高台を貼り付けた。90は内面黒色処理されている。いずれも底部は回転糸切り離しである。

灰釉陶器（図面24、図版14、表5）

91は碗である。釉薬は内面と口縁部外面に薄く刷毛塗りされ、やや崩れ気味の角高台を貼り付け、口縁部の反りも小さい。黒笹90号窯式に比定される。

緑釉陶器（図面24、図版14、表5）

92は碗である。釉薬は濃緑で胎土は緻密で、高台は貼り付けられた。黒笹90号窯式に比定される。

白磁（図面24、図版14、表5）

93・94は台形の削り出し高台で、体部下端より露胎。施釉は薄く、釉色は灰白色で胎土に黒い細か粒を僅かに含む。太宰府分類の白磁碗Ⅳ類に該当する。95は口縁端部が外反する。白磁碗Ⅷ類に該当するとみられる。

珠洲（図面24、図版14、表5）

96～98は甕である。いずれも外面に平行叩き目を残し、96は口縁部が短く強く屈曲する。96は珠洲Ⅱ期、97はⅢ期、98はⅢ期かⅣ期に該当するとみられる。99は擂鉢で、直線的な卸目が疎に施入する。底部は静止糸切り離し無調整である。珠洲Ⅲ期に該当するとみられる。

銭貨（図面24、図版14、表5）

100は銅銭である。判読は判然としない。「元通通宝」か。

石製品（図面24、図版14、表5）

101・102は砥石である。流紋岩製で、３側面が研ぎ面となる。

土製品（図面25、図版15、表5）

103～124は漁網錘とみられる土錘である。今回の調査で38個体が出土し、形態からA～Cの３種に分類した。A種は長さが短いずんぐりした樽形で、全量の約５％である。103･104が該当する。他種に分類した土錘外面に際立った調整痕が観られなかったが、A種のものは全面にわたって篦削り調整を行っている。いずれも掘立柱建物SB20の柱穴底部に栗石として再利用されていた。B種はA種より長い紡錘形で、全量の約70％である。105～118が該当する。小口両端を面取りする程度で、際立った調整痕がみられない。C種は長さが最も長く、管状に近い形で、全量の約25％である。119～124が該当する。

第4章　自然科学分析

1．放射性炭素年代測定

岩坪岡田島遺跡（グラスキューブ地区）の本発掘調査時に検出された遺物２点を用い、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。以下にその概要を述べる。

試　料

試料は柱材２点である。試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、グラファイトに調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

分析結果

表１に、試料の同位体分別効果の補正値、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。^{14}C年代値(yrBP)の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。表２には参考として確率95%も掲載しておく。

１）BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表す。

２）付記した誤差は、標準偏差（１σ）に相当する年代で、次のように算出する。

複数回（通常は4回）の測定値についてχ^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差とする。

３）δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考として掲載しておく。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

ただし、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記している。

また、Δ^{14}Cは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C濃度を、δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$ (‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC （ percent Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000$ (‰)

$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100$ (%)

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln (pMC / 100)$

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。

具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。ただし、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

表１．放射性炭素年代測定の結果

No.	試　　料		ＢＰ年代及び炭素の同位体比				
1	試料採取場所	： 岩坪岡田島遺跡	Libby Age (yrBP)	：	1,140	±	30
			δ ^{13}C (‰)、(加速器)	＝	-30.81	±	0.69
	試 料 形 態	： 柱材	Δ ^{14}C (‰)	＝	-132.1	±	3.6
	試料名(番号)	： ＳＢ08-Ｐ10	pMC (%)	＝	86.79	±	0.36
			δ ^{14}C (‰)	＝	-142.4	±	3.3
	(参考)	δ ^{13}C の補正無し	pMC (%)	＝	85.76	±	0.33
			Age (yrBP)	：	1,230	±	30
2	試料採取場所	： 岩坪岡田島遺跡	Libby Age (yrBP)	：	900	±	30
			δ ^{13}C (‰)、(加速器)	＝	-28.28	±	0.66
	試 料 形 態	： 柱材	Δ ^{14}C (‰)	＝	-106.2	±	3.6
	試料名(番号)	： ＳＢ06－Ｐ7	pMC (%)	＝	89.38	±	0.36
			δ ^{14}C (‰)	＝	-112.2	±	3.4
	(参考)	δ ^{13}C の補正無し	pMC (%)	＝	88.78	±	0.34
			Age (yrBP)	：	960	±	30

表２．^{14}C年代を暦年代に較正した年代（範囲）結果

試料名	１σ暦年代範囲（左68%・右95%）	
1	885AD—905AD (15.2%) 910AD—980AD (53.0%)	80AD－990AD (95.4%)
2	1110AD—1140AD (14.4%) 1150AD—1190AD (20.1%) 1040AD—1100AD (33.8%)	1030AD－1220AD (95.4%)

2．出土木製品の樹種調査

試料及び観察方法

試料は高岡市岩坪岡田島遺跡から出土した用途不明品６点である。観察方法としては、剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

分析結果

樹種同定結果（針葉樹１種、広葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

板材（図面20－30・31・32・33・43）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

２）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

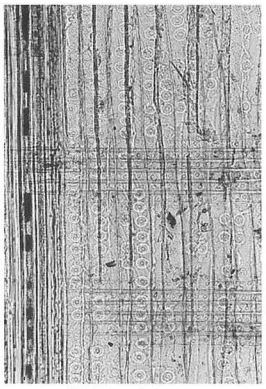
皿（図面18－3）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270μm）が１列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州・四国・九州に分布する。

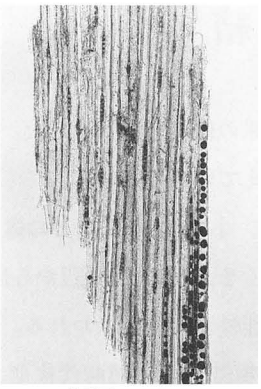
◆使用顕微鏡◆　Nikon　MICROFLEX UFX-DX Type 115

【参考文献】

島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）　深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊　木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊　木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

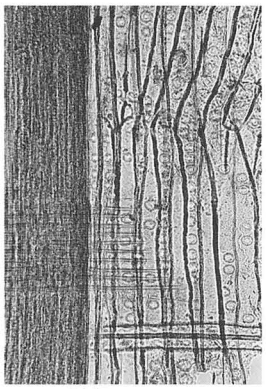


柾目　×100

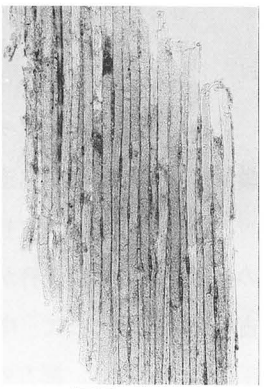


板目　×40

板材（図面20－30）スギ科スギ属スギ

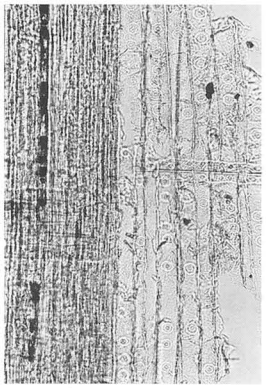


柾目　×100

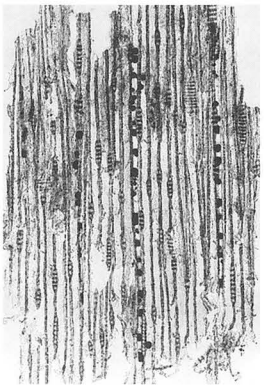


板目　×40

板材（図面20－32）スギ科スギ属スギ

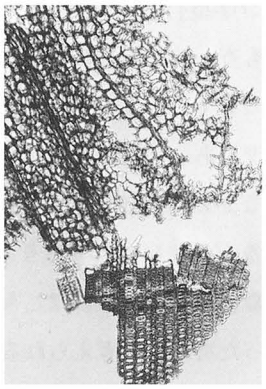


柾目　×100

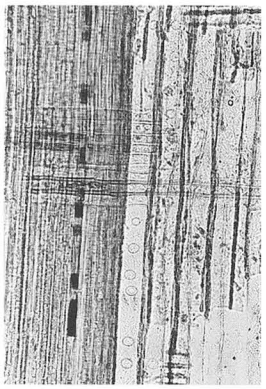


板目　×40

板材（図面20－33）スギ科スギ属スギ

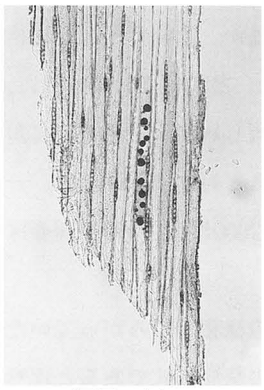


木口　×40

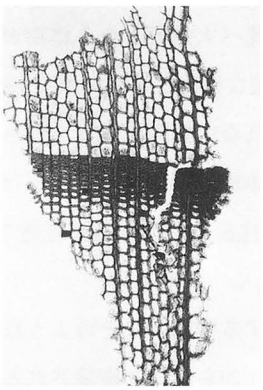


柾目　×100

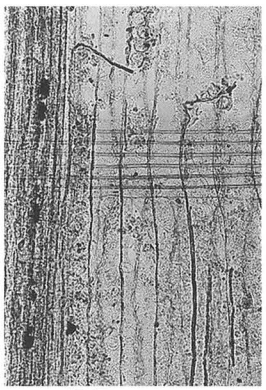
板材（図面20－31）スギ科スギ属スギ



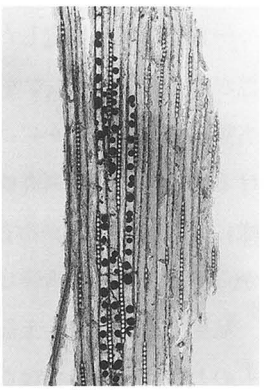
板目　×40



木口　×40

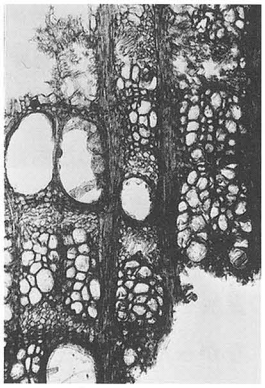


柾目　×100

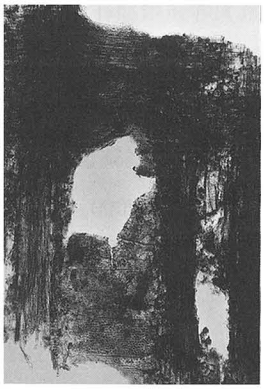


板目　×40

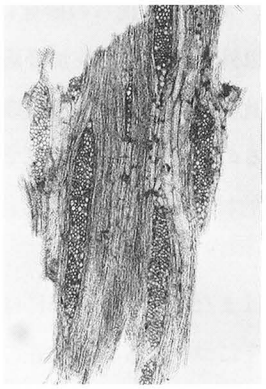
板材（図面20－43）スギ科スギ属スギ



木口　×40



柾目　×100



板目　×40

皿（図面18－３）ニレ科ケヤキ属ケヤキ

第5章　結　語

岩坪岡田島遺跡（グラスキューブ地区）における調査成果の概要を述べてきた。本章ではこれらを総括し、当該地区及び岩坪岡田島遺跡の歴史的様相について考察を加えていきたい。

当該地区では、掘立柱建物が推定20棟のほか、井戸１基、小穴300余基などの遺構が検出されている。これらの推移については資料が希少であることから不明と言わざるをえないが、周辺から出土した遺物の年代幅により、古墳時代後期・古代・中世前半の計３時期に大別される可能性が高いと思われる。試論の域をでないが、建物の年代については、掘方の出土遺物を勘案するに、掘立柱建物SB19は古墳時代後期、掘立柱建物SB01・08・09など12棟は古代、掘立柱建物SB03・06など６棟は中世前半に帰属すると思われる。上記のうち古代に比定した建物群については、現状では「コ字型」や「品字型」の建物配置を呈していない。また、「院」を構成する部分が検出されていないほか、方位も斉一性がみられない。さらに、規模についても官衙的な遺跡にみられる中枢施設とおぼしき比較的大規模なものも今のところ見受けられない。加えて、その配列などからも倉庫群とする位置づけも類例的に検討を要する状況にあると思われる。

ちなみに、当該期の遺物のなかには計15個体の製塩土器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器が数点含まれる。また、試掘調査時においては帯金具なども検出されており〔高岡市教委2005〕、概して官衙的な色彩をおびていると言える。しかし、近年では在地豪族層の拠点とおぼしき遺跡などからも上記の検出例があるほか、そのような様相をもつ遺跡からの流入物であった可能性も考えられる。また、上記の帯金具についても、表金具と裏金具とが接合したままの状態であったことから、明らかな譲渡品であったと考えられるため、本遺跡についてはこれを譲渡されるような人物が常駐する施設であった可能性が高い。

一方の中世に比定した建物群については、古代のそれに比べ大規模となる建物があるほか、方位などにも規格性が窺える。しかしながら、中世においては類例的に大規模な建物とは言いがたい。また、古代のそれと同様に、当該期の遺物のなかには必ずしも官衙的なものなどが含まれない傾向にある。さらに、同じ岩坪岡田島遺跡における他地区の発掘調査成果や、周辺地域に点在する手洗野赤浦遺跡や間尽遺跡などのそれと対比するならば、一様に同時期の様相が所在しているため〔財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所2000他〕、今回の調査区から検出された遺構群は必ずしも特異なものとは思われない。

私見ではあるが、上記を鑑みるならば、複数遺跡を包括する空間内にそのような中世の様相がひろがっていたものと考えるべきではないかと思われる。そしてそれを古代から連綿と継続される様相の発展形式であると理解しようにも、両様相の時間的断絶など、様々な検討が必要な現状にあると考える。

なお、当該遺跡の南方では、弥永貞三氏らの研究により東大寺領須加荘が比定されている〔弥永1958〕。須加荘の所在をめぐっては、上記以外にも高岡市佐加野周辺とする和田一郎氏の説〔和田1959〕や、同市五十里とする木倉豊信氏や金田章裕氏の比定案がある〔木倉1936他・金田1998他〕。現状においては、上記３大別の比定案のうちで最有力と評されているのは金田章裕氏の説である。そして、高岡市教育委員会による平成11年の須田藤の木遺跡でも金田説への肯定的材料を抽出しているほか〔高岡市教委2000〕、これを基軸とした考古学的見解も提起されている〔根津2004〕。

しかしながら、上記の論争はまだ決定的な決着にはいたっていないため、今後の研究の進展を待つところも大きいかと思われる。今回の調査についても、須加荘の所在を決定づける成果までは得られなかったが、同荘の活動時期と重複する歴史的様相を抽出したことは大きな成果と考える。また、施釉陶器や帯金具などの出土なども、今後の研究に一石を投ずる資料になるものと思われる。一方の中世においても、さらに広域にわたり様相が所在していたことが確認されたことは当該期への今後の研究に大きな課題を提起したものと考える次第である。

【引用・参考文献】

木倉豊信　1936「東大寺墾田地を主としたる呉西地区の古代地理（上）」『富山教育』280

木倉豊信　1937「東大寺墾田地を主としたる呉西地区の古代地理（中）」『富山教育』287

弥永貞三・亀田隆之・新井喜久夫　1958「越中国東大寺領荘園絵図について」『続日本紀研究』５巻２号（通巻50号）別冊大阪歴史学会古代史部会内続日本紀研究会

和田一郎編　1959『高岡市史』上巻　青林書院新社

吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

金田章裕　1998『古代荘園図と景観』東京大学出版会

金田章裕　1999『古地図から見た古代日本』中公新書

横田賢次郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館普及会

越前慎子　1996「梅原胡麻堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

宮田進一　1997「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』　桂書房

根津明義　2004「越中国西部地域における東大寺領諸荘の所在について－考古学的成果を中心として－」『日本荘園絵図聚景釈文編』古代ワークショップ資料　東京大学史料編纂所

高岡市教育委員会　2004『市内遺跡調査概報ＸⅣ』－平成15年度．石塚遺跡の調査他－高岡市埋蔵文化財調査概報第56冊

高岡市教育委員会　2000『須田藤の木遺跡調査報告書』

高岡市教育委員会　2004『間尽遺跡調査報告書』　高岡市埋蔵文化財調査報告第11冊

高岡市教育委員会　2005『市内遺跡調査概報ＸＶ』－平成16年度、個人住宅等の建設にともなう発掘調査－高岡市埋蔵文化財調査概報第62冊

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化調査事務所　2000『埋蔵文化財調査概要』－平成11年度－

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化調査事務所　2001『埋蔵文化財調査概要』－平成12年度－

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化調査事務所　2002『埋蔵文化財調査概要』－平成13年度－

表３　岩坪岡田島遺跡遺物観察表（１）

図版番号	遺構番号	器形	法量（cm）			①胎土　②焼成　③色調　④遺存度	特徴
			口径	器高	底径		
1	SB02　P24	皿	(13.0)	2.1	(5.4)	①e②酸化③浅黄橙色④口辺部 1/6	肉厚な底部から直線的に体部立上る。
2	SB05　P26 (P311)	甕	(36.0)	–	–	①f、c②酸化③浅黄橙色④口辺部小片	口唇部つまみ上げ。
3	SB05　P21 (P355)	皿(木製品)	–	–	(8.4)	④底部	漆・下地とも剥離。ニレ科ケヤキ属ケヤキ。
4	SB08　P6 (P 200)	杯	(12.4)	4.8	(7.8)	①a、f②還元③灰白色④ 1/3	底部回転篦切り離し後、高台貼り付け。
5	SB08　P9 (P 271)	杯	(10.5)	3.4	(3.6)	①c②酸化③灰白色④ 1/2	底部回転糸切り無調整。
6	SB08　P4 (P 174)	杯	–	–	7.4	①c②酸化③灰白色④ 1/3	回転糸切り離し後、高台貼付け。
7	SB09　P9 (P 270)	杯	–	–	7.0	①e、c②酸化③浅黄橙色④底部 1/2	内面黒色処理。
8	SB13　P6 (P 179)	手捏ね土器	(6.6)	3.3	(5.8)	①a、c②酸化③灰白色④ 1/4	器面の磨耗あり、古墳時代のものか。
9	SB13　P3 (P192)	鉢（製塩土器）	(29.7)	(29.7)	–	①c②酸化③灰白色④口辺部小片	内外面ともに明瞭な輪積痕と被熱痕を残す。体部は直線的に立上る。
10	SB14　P10 (P275)	杯	–	–	7.2	①c、a②酸化③灰白色④ 1/2	回転糸切り離し後、やや足長の高台貼付け。
11	SB14　P11 (P131)	甕	(16.2)	–	–	①e②酸化③淡橙色④口辺部 1/6	口縁部を受け口状につまみ上げ。
12	SB14　P10 (P275)	甕	(21.4)	–	–	①c，e②酸化③にぶい黄橙色④口辺部小片	口縁端部つまみ上げ。
13	SB15　P6 (P370)	杯	12.2	4.2	4.0	①e②酸化③浅黄橙色④ 3/5	底部回転糸切り無調整。
14	P78	甕	(25.2)	–	–	①a、e②酸化③灰白色④口辺部小片	内外面とも器面の磨耗著しく、調整技法不明。
15	P114	砥石	長さ 7.9	幅 4.8	厚さ 3.0	石材　流紋岩	両端欠損。4 側面が砥面。重さ 155.23 g
16	P173	杯	(14.6)	3.6	(9.7)	①a、f②還元③灰白色④ 1/4	内端接地高台。
17	P195	皿	(11.4)	3.1	6.4	①a②酸化③浅黄橙色④ 2/3	足長高台。
18	P196	砥石	長さ 13.7	幅 3.7	厚さ　4.2	石材　流紋岩	4 側面が砥面。重さ 207.61 g
19	P210	杯	14.8	4.0	6.0	①e、c②酸化③灰白色④ 3/4	回転糸切り離し後、高台貼り付け。高台部剥離。
20	P257	杯	(12.7)	4.1	5.0	①c、f②酸化③橙色④ 1/4	底部回転糸切り無調整。
21	P301	甕	(27.4)	–	–	①a、b、e、c②酸化③にぶい黄橙色④口辺部 1/4	胴部外面縦位篦削り後、横位の刷毛目調整。内面粗い刷毛目。
22	P369	杯	9.0	4.3	4.4	①c、e②酸化③灰白色④ 4/5	柱状高台。
23	SK17	甕	(12.9)	–	–	①a②酸化③浅黄橙色④ 1/8	ロクロ形成の小型甕。
24	SK17	甕	(21.8)	–	–	①粗h②酸化③灰白色④ 1/8	回転カキ目調整。
25	SK21	杯	(12.8)	4.0	(9.4)	①a②還元③灰白色④ 1/3	底部回転篦切り離し。
26	SK22	杯	(13.0)	3.9	(8.2)	①a②還元③灰白色④ 2/5	やや肉厚な底部。
27	SK28	甕	(13.4)	–	–	①a、d、c②酸化③橙色④ 1/10	器面の磨耗著しく、調整痕不明。
28	SK28	甕	(18.0)	–	–	①a、d、c②酸化③橙色④ 1/10	内外面とも器面の磨耗著しく、調整技法不明。
29	SE01	碗	–	–	(5.6)	①緻密②還元③灰白色④底部 1/2	白磁碗Ⅶ類。底部にわずかに高台状を削出し。施釉は体部下端までで釉色は透明感のある灰白色。
30	SE01	木製品	長さ 17.4	幅 2.9	厚さ 0.4		板状製品。板目。スギ科スギ属スギ
31	SE01	木製品	長さ 18.1	幅 2.2	厚さ 0.7		板状製品。板目。スギ科スギ属スギ
32	SE01	木製品	長さ 23.8	幅 3.3	厚さ 0.4		板状製品。板目。スギ科スギ属スギ
33	SE01	木製品	長さ 24.5	幅 2.7	厚さ 0.5		板状製品。板目。スギ科スギ属スギ
34	SD02	杯	–	–	5.2	①a②酸化③灰白色④体～底部	柱状高台、回転糸切り離し無調整。
35	SD05	杯	(13.4)	2.8	(9.8)	①a②還元③灰白色④ 1/4	底部回転篦切り離し無調整。
36	SD05	杯	–	–	(12.4)	①c②還元③灰白色④ 1/4	高台内端接地、底部で出尻気味。
37	SD06	杯	–	–	(9.6)	①a②還元③灰白色④ 1/3	底部回転篦切り離し無調整。
38	SD06	杯	(10.9)	3.0	(7.4)	①a②還元③灰白色④ 1/10	底部回転篦切り離し。
39	SD06	甕	(27.4)	–	–	①a②還元③明オリーブ灰色④口辺部 1/6	肩部外面縄目状叩き目、内面は同心円状の叩き目。
40	SD06	甕	(37.2)	–	–	①a　②還元③灰色④口辺部小片	頸部に波状文。
41	SD06	甕	(26.4)	–	–	①c②酸化③浅黄橙色④口辺部小片	口辺部大きく外傾。
42	SD06	木製品	長さ 7.9	幅 7.0	厚さ 2.0		柾目。

表４　岩坪岡田島遺跡遺物観察表（２）

図版番号	遺構番号	器形	法量（cm）			①胎土　②焼成　③色調　④遺存度	特徴
			口径	器高	底径		
43	SD06	木製品	長さ27.3	幅3.9	厚さ1.3		板状製品。柾目。 スギ科スギ属スギ
44	SD09	双耳瓶	－	－	－	①密②還元③灰白色④1/8	
45	SD11	瓶	－	－	－	①f②還元③灰色④口辺部1/2	
46	SD11	杯	－	－	(8.4)	①e、c②酸化③橙色④底部4/5	回転糸切り離し後、足長な高台貼付け。
47	SD11	坩	8.5	(10.5)	－	①a、c②酸化③浅黄橙色④ほぼ完形	内面輪積痕明瞭。
48	G－11	杯身	(12.0)	－	－	①a、f②還元③灰白色④1/8	口辺部知く内傾。
49	H－6	甕	(30.0)	－	－	①a②還元③灰色④口辺部小片	頸部に二段の波状文施文。6世紀。
50	E－4	甕	－	－	－	①a②還元③灰色④口辺部1/5	頸部に二段の波状文施文。6世紀後半か。
51	D－10	高杯	－	－	－	①e、h②酸化③橙色④2/3	外面磨耗著しく調整痕不明。脚部やや膨らみ、裾で強く屈折。
52	D－11	坩	－	－	－	①a、h②酸化③橙色④ほぼ完形	外面磨耗著しく、調整痕不明。内面輪積痕明瞭。
53	D－11	甕	(13.2)	－	－	①a、d、b②酸化③にぶい黄橙色④口辺部1/4	口唇部外が反る。
54	F－11	甕	(13.6)	－	－	①c、e②酸化③浅黄橙色④口辺部1/8	胴部外面に縦位の細かい刷毛目調整。
55	表採	甕	(18.6)	－	－	①粗h、a②酸化③橙色④口辺部1/6	内外面とも刷毛目調整。内面がやや粗い刷毛目。
56	遺構外	甕	(17.2)	－	－	①a、e、H②酸化③浅黄橙色④口辺部1/4	くの字に外反する口辺部。
57	C－10	鉢（製塩土器）	(31.7)	－	－	①c　②酸化③にぶい黄橙色④口辺部小片	外面に明瞭な輪積痕。口唇部まで直線的に立上る。
58	D－10・D－11	鉢（製塩土器）	－	－	(17.0)	①c　②酸化③淡赤橙色④底部1/12	内外とも明瞭な被熱痕。
59	F－9	鉢（製塩土器）	－	－	(11.6)	①c　②酸化③橙色④底部1/10	内外面とも明瞭な輪積痕と被熱痕底部から体部かけて直線的に立上る。
60	E－7	蓋	(16.0)	－	－	①a、b、c②還元③灰白色④1/3	天井部外面回転篦削り調整。
61	F－11	蓋	(16.0)	－	－	①a②還元③灰色④1/5	天井部内面篦撫で調整。
62	D－10	蓋	－	－	つまみ径2.6	①c②還元③灰色④1/8	扁平なつまみ貼付け。
63	F－11	蓋	(13.4)	－	－	①密h微量②還元③明青灰色④1/5	天井部外面回転篦削り調整。
64	C－10	蓋	(15.2)	－	つまみ径2.8	①a②還元③青灰色④1/4	ロクロ切り離し天井部外面回転篦削り後つまみ貼り付け。
65	E－4	蓋	－	－	つまみ径3.1	①a②還元③明青灰色④1/3	天井部の盛り上がりは無い。
66	表土	蓋	15.2	2.4	つまみ径2.5	①a、密h②還元③灰白色④1/3	天井部回転篦削り後、つまみ貼り付け。
67	G－12	杯	5	2	10.0	①a②還元③灰色④1/3	底部回転篦切り離し。
68	D－10	杯	13.6	5.0	9.8	①a②還元③浅黄橙色④1/2	底部回転篦削り離し無調整。
69	F－10	杯	－	－	(10.0)	①b、a②還元③灰白色④底部1/4	底部回転篦切り離し無調整。底部内面十字の刻みあり。
70	D－10	杯	(12.8)	4.0	－	①a②還元③灰色④底部	底部回転篦切り離し。7世紀中頃。
71	F－12	杯	(11.5)	3.4	(8.0)	①a、b②還元③灰白色④1/8	底部回転篦切り離し無調整。
72	D－10	杯	(13.3)	3.7	(9.0)	①密h②還元③灰白色④1/5	回転篦切り離し。
73	F－11	杯	(11.6)	3.8	(8.2)	①a②還元③灰色④1/5	高台貼付け、出尻気味。
74	D－10	壺	(8.4)	－	－	①c②還元③灰白色④口辺部1/4	短頸。
75	D－9	壺	(16.4)	－	－	①c②還元③灰色④口辺部1/4	口辺部短く立上る。
76	B－9	壺	－	－	(13.2)	①c②還元③灰色④1/8	体部下半外面手持ち篦削り調整。
77	D－6・F－6	壺	－	－	(12.2)	①f、a②還元③灰白色④1/6	下半回転篦削り調整。
78	G－11	双耳瓶	－	－	－	①f②還元③灰色④胴部小片	肩部に自然釉
79	C－10	瓶	－	－	－	①a②還元③黄灰色④胴部小片	胴部に二条の突帯。
80	B－9	甕	(12.4)	－	－	①a②還元③灰白色④口辺部1/6	胴部内面カキ目。
81	D－11	甕	(22.8)	－	－	①e②還元③灰白色④口辺部1/8	肉厚な口辺部。
82	C－7	鉢	(33.2)	－	－	①c②還元③灰白色④口辺部小片	体部はやや内湾気味に立上る。
83	F－11	杯	9.8	2.8	4.1	①e②酸化③橙色④1/2	底部回転糸切り離し無調整。
84	遺構外	杯	－	－	5.9	①c、a、e②酸化③橙色④2/3	内外面とも表面の磨耗あり、底部外面は静止篦切りか。
85	C－7	杯	(11.6)	2.9	(6.4)	①e、c②酸化③にぶい橙色④1/3	底部回転糸切り無調整。
86	D－11	皿	(11.4)	1.8	5.2	①c、e②酸化③にぶい黄橙色④2/3	底部回転糸切り無調整。
87	遺構外	杯	－	－	(8.4)	①a②酸化③灰白色④底部3/4	回転糸切り離し後、足長高台貼付け。
88	G－11	杯	－	－	(8.0)	①a、e、c②酸化③浅黄橙色④底部1/2	足長高台貼付け。

表５　岩坪岡田島遺跡遺物観察表（３）

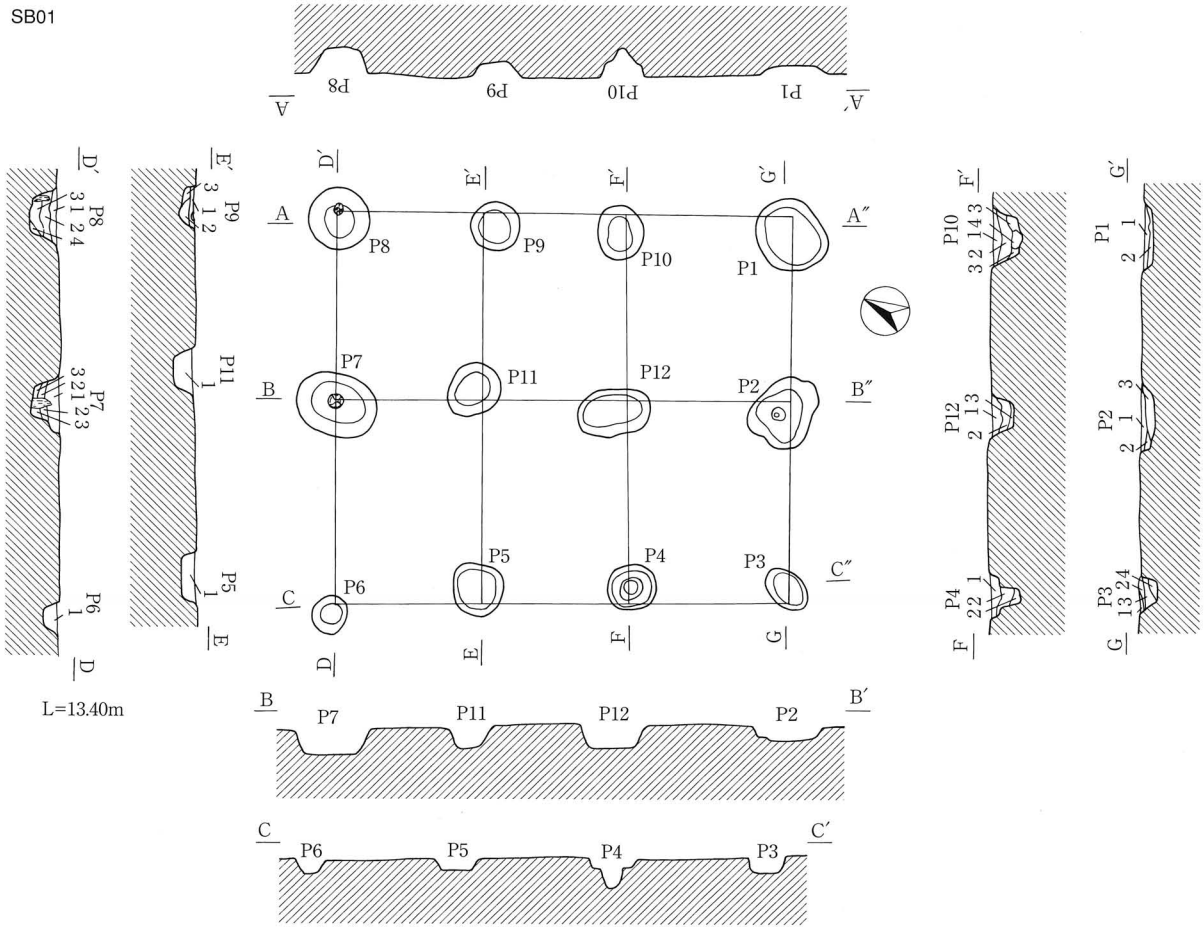
図版番号	遺構番号	器形	法量（cm）			①胎土　②焼成　③色調　④遺存度	特徴
			口径	器高	底径		
89	E－11	杯	－	－	(6.2)	①h、d②酸化③橙色④1/2	底部回転糸切り離し後、高台部貼付け。
90	G－11	杯	－	－	(8.0)	①a、c②酸化③黄橙色④底部	内面黒色処理。
91	F－9	碗	12.6	4.1	6.6	①緻密②還元③灰白色④ほぼ完形	灰釉陶器。黒笹90号窯期。釉薬は内面と外面口縁部に薄く刷毛塗り。やや崩れ気味の角高台貼付け。口縁部の反りは小さい。
92	F－12	碗	－	－	(6.0)	①緻密②還元③オリーブ灰色④1/10	緑釉碗。貼付け高台。釉は濃緑で胎土は緻密。黒笹90号窯期の所産とみられる。9世紀後半。
93	遺構外	碗	－	－	(6.6)	①緻密②還元③灰白色④底部1/5	白磁碗Ⅳ類。台形の削出し高台。体部下端露胎釉色は灰白色。胎土に黒い細粒。
94	E－9	碗	－	－	(6.7)	①緻密②還元③灰白色④底部1/8	白磁碗Ⅳ類。台形の削り出し高台。体部下端より露胎、施釉は薄く、釉色は灰白色。
95	H－6	碗	(13.0)	－	－	①緻密②還元③灰白色④口辺部小片	白磁碗Ⅷ類か。口縁端部外反。釉色は灰白色。胎土に黒い細粒。
96	B－9	甕	(38.8)	－	－	①h　②還元③灰色④口辺部小片	珠洲Ⅱ期。外面平叩き。
97	表土	甕	(42.0)	－	－	①g②還元③灰色④口辺部小片	珠洲Ⅲ期。胴部平叩き。
98	E－10	甕	(52.0)	－	－	①h②還元③灰白色④口辺部小片	珠洲Ⅲ期かⅣ期。外面平叩き。
99	F－11	擂鉢	－	－	(12.8)	①g②還元③灰白色④底部1/6	珠洲Ⅲ期。卸目は直線で施入は疎。1単位は7目、底部静止糸切り痕。
100	B－8	古銭	径2.4	－	孔径0.6		元通通寶か。重さ3.17g
101	表土	砥石	長さ4.2	幅3.9	厚　2.0	石材　流紋岩	両端欠損。3側面砥面 重さ32.15g
102	表土	砥石	長さ6.5	幅4.7	厚さ2.8	石材　流紋岩	両端欠損。3側面研面。 重さ112.92g
103	P346	土錘	長さ4.5	幅5.8	孔径1.4	①e、a②酸化③褐色④4/5	全面篦削り調整。*柱穴底部に栗石として再利用したもの。
104	SB20－P7 (P358)	土錘	長さ5.2	幅5.1	孔径1.2	①c、a、e②酸化③褐色④1/2	全面篦削り調整。*中世建物SB20の柱穴底部に栗石として再利用したもの。重さ63.30g
105	SD11	土錘	長さ7.1	幅6.0	孔径1.5～1.7	①c、a②酸化③褐灰色④ほぼ完形	*中世建物SB02に伴うとみられる溝SD11から出土。重さ81.72g
106	SB10－P10 (P272)	土錘	長さ5.9	幅4.6	孔径1.5～1.7	①c、a②酸化③灰褐色④ほぼ完形	表面に指頭圧痕。小口両端を面取り。＊中世建物ＳＢ10の柱穴底部に栗石として再利用したもの。重さ91.53g
107	SB10－P10 (P272)	土錘	長さ5.5	幅4.7	孔径1.5～1.6	①c、e②酸化③灰褐色④ほぼ完形	小口両端を面取り。*中世建物ＳＢ10の柱穴底部に栗石として再利用したもの。重さ84.18g
108	P253	土錘	長さ5.1	幅4.3	孔径1.6	①c、a②酸化③黒褐色④完形	棒状工具への粘土巻付け痕が表面に残る。*柱穴底部に栗石として再利用したもの。重さ70.83g
109	SD02	土錘	長さ5.5	幅4.5	孔径1.8	①c、e②酸化③橙色④完形	小口両端を面取り。重さ83.13g
110	D－9	土錘	長さ6.1	幅4.5	孔径1.6～1.7	①e②酸化③赤褐色④完形	重さ90.70g
111	F－9	土錘	長さ5.4	幅4.1	孔径1.1	①c、a、b②酸化③褐色④完形	重さ76.31g
112	C－9	土錘	長さ5.7	幅4.4	孔径1.9～2.1	①a、e②酸化③橙色④完形	小口両端を面取り。重さ89.54g
113	SD11	土錘	長さ4.1	幅2.9	孔径1.0	①h②酸化③灰褐色④3/4	*中世建物SB02に伴うとみられる溝SD11から出土。重さ25.08g
114	D－9	土錘	長さ4.1	幅4.0	孔径1.7	①c、e②酸化③赤褐色④完形	粘土板を軸に巻付けて形成。 重さ43.35g
115	E－7	土錘	長さ4.3	幅3.7	孔径1.3	①f②酸化③赤褐色④完形	重さ41.01g
116	D－9	土錘	長さ3.9	幅3.7	孔径1.3	①c、a②酸化③褐色④完形	重さ39.13g
117	D－10	土錘	長さ4.0	幅3.8	孔径1.4～1.5	①a②酸化③褐色④ほぼ完形	重さ36.83g
118	D－10	土錘	長さ3.3	幅2.3	孔径1.2	①e②酸化③褐色④4/5	重さ13.13g
119	SK22	土錘	長さ8.3	幅3.8	孔径1.3～1.5	①c、a②酸化③褐灰色④完形	重さ103.86g
120	D10	土錘	長さ7.5	幅3.7	孔径1.3～1.6	①c、e、a②酸化③赤褐色④ほぼ完形	粘土板を軸に巻付けて形成し、器面及び小口両端の調整痕はない。 重さ77.91g
121	表土	土錘	長さ7.3	幅3.7	孔径1.2～1.5	①c、e②酸化③褐色④完形	重さ78.91g
122	表土	土錘	長さ7.6	幅3.5	孔径1.2～1.4	①c、a、e②酸化③赤褐色④ほぼ完形	重さ91.69g
123	G－5	土錘	長さ9.4	幅4.4	孔径1.7～1.9	①c②酸化③赤褐色④完形	器面に雑でまばらな縦位の篦削り。 重さ160.84g
124	E－4	土錘	長さ7.8	幅3.8	孔径1.4	①c、a、b②酸化③灰褐色④完形	重さ93.18g

図　　面

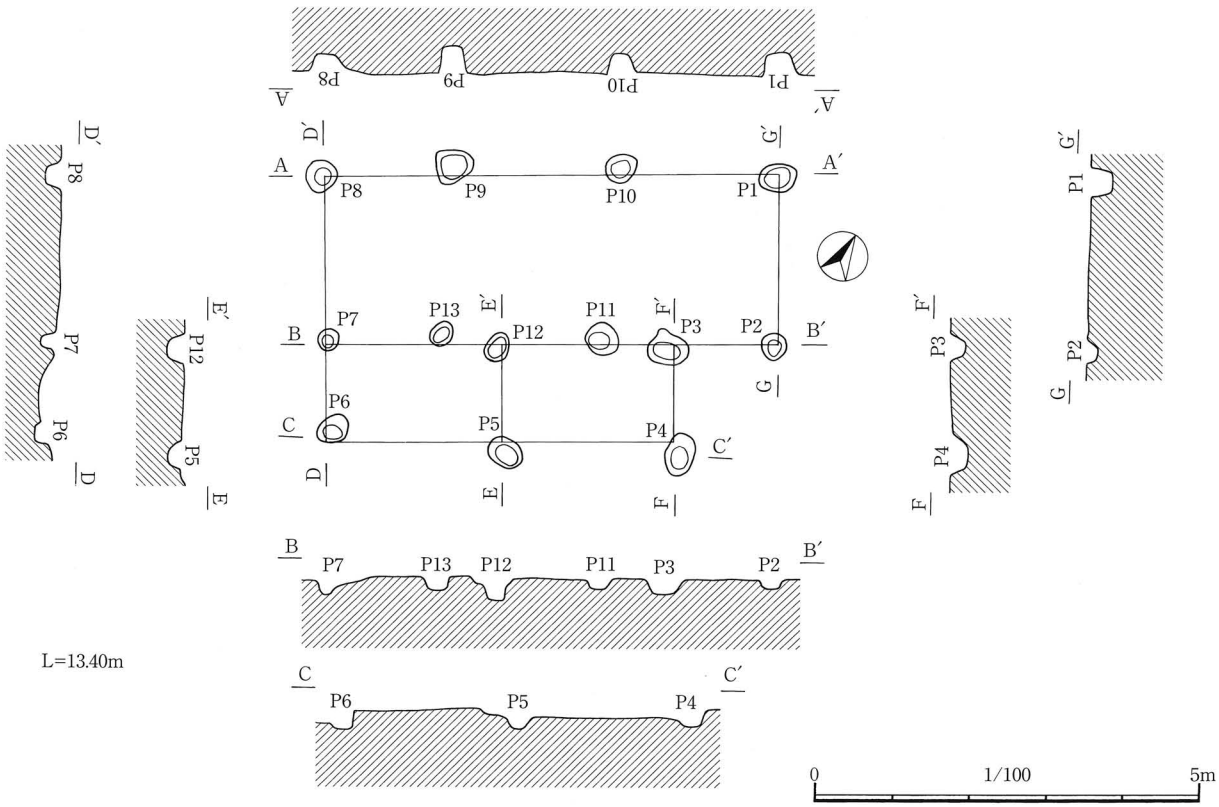
岩坪岡田島遺跡　平成16年度調査区全体図

図面〇二　遺構実測図

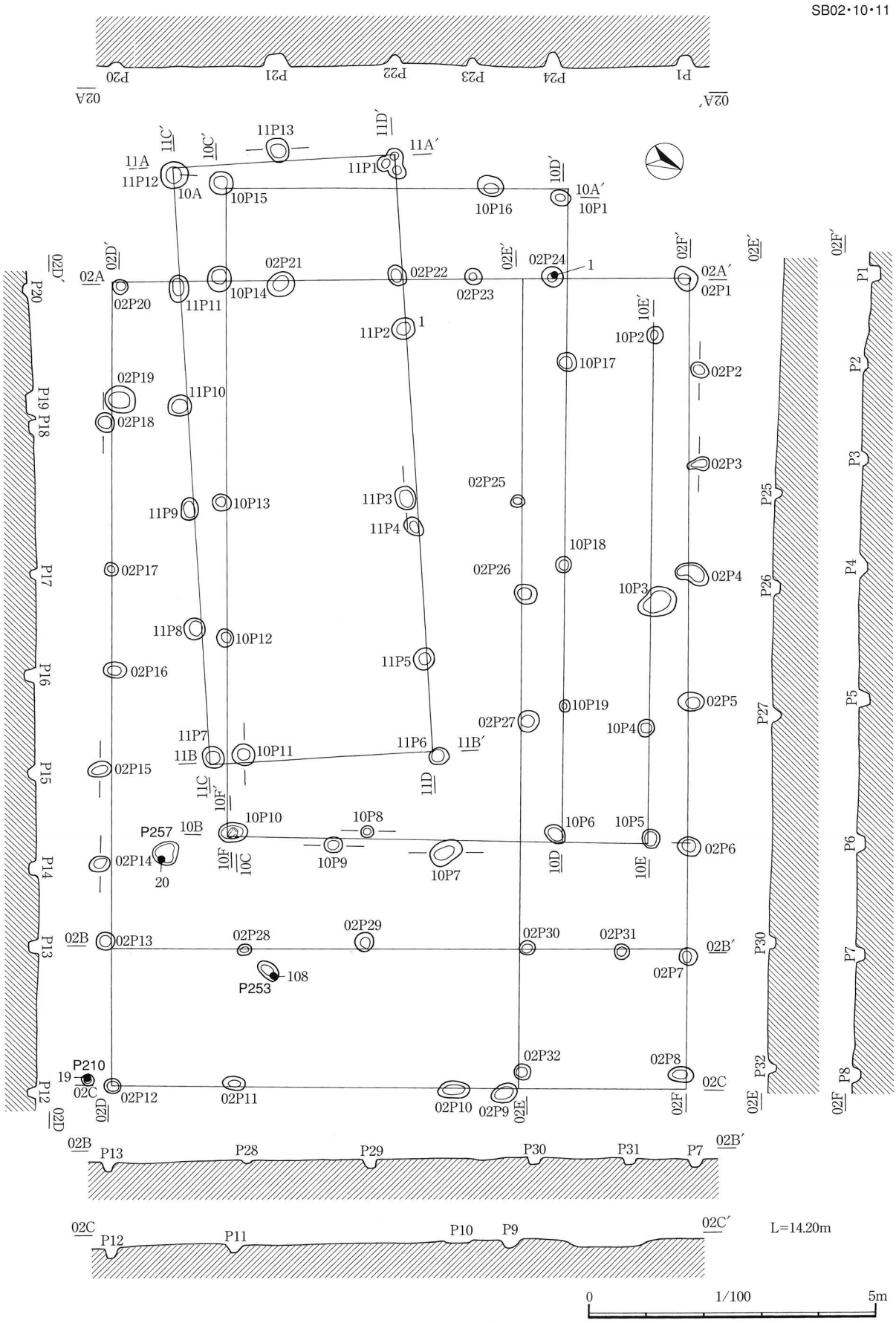
SB01



SB03

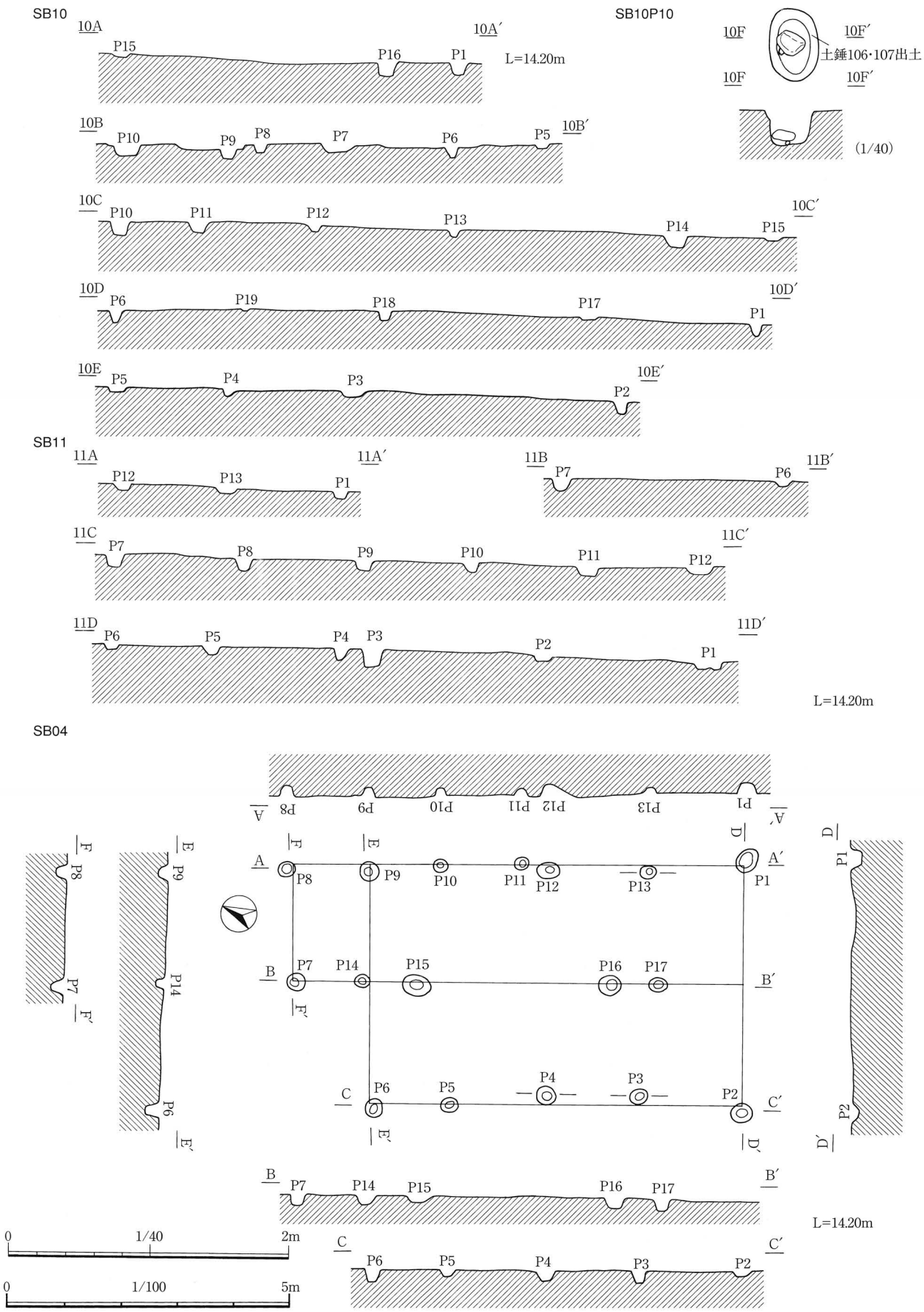


掘立柱建物SB01・03実測図

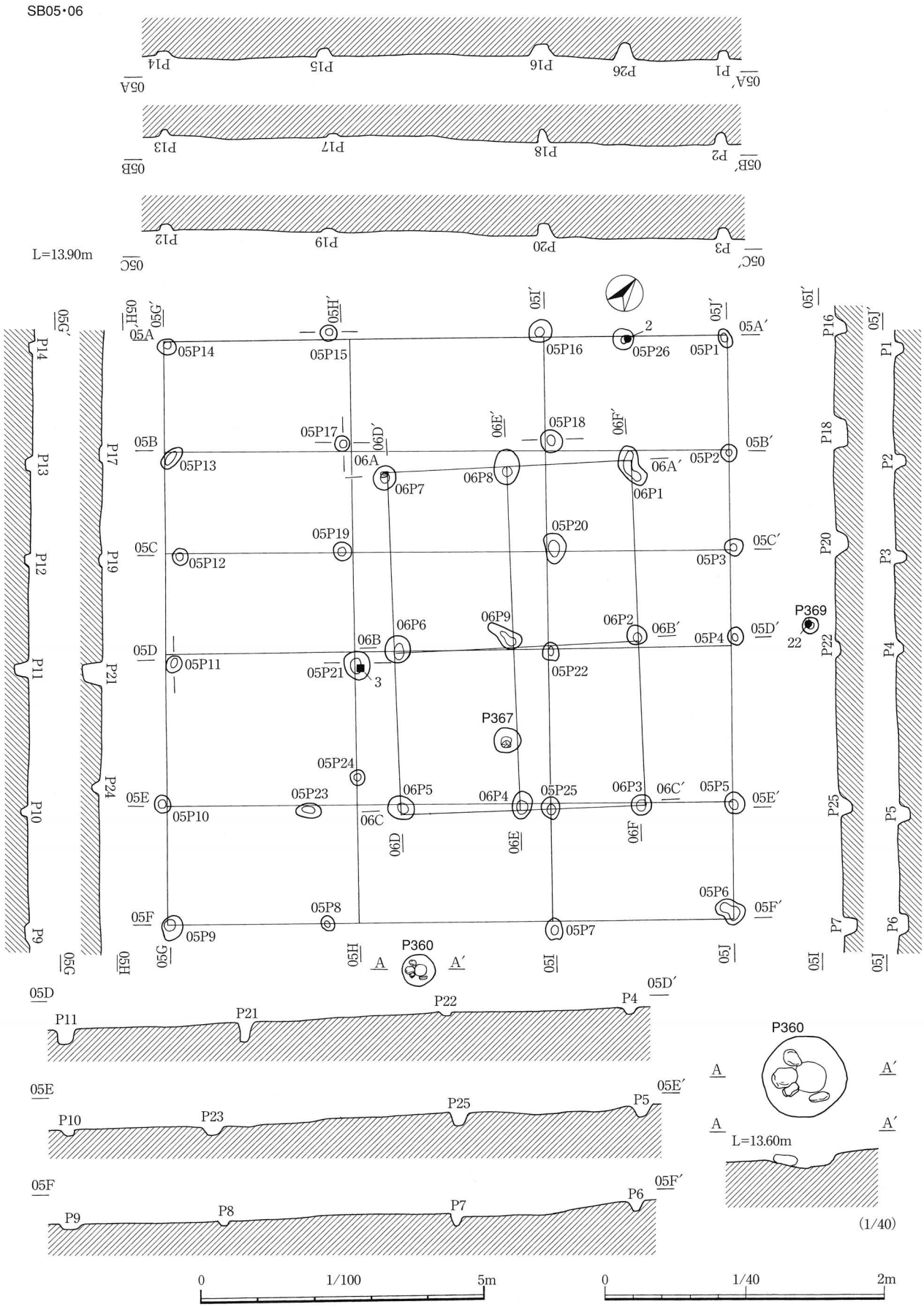


掘立柱建物SB02・10・11、小穴P210・253・257実測図

図面〇四　遺構実測図

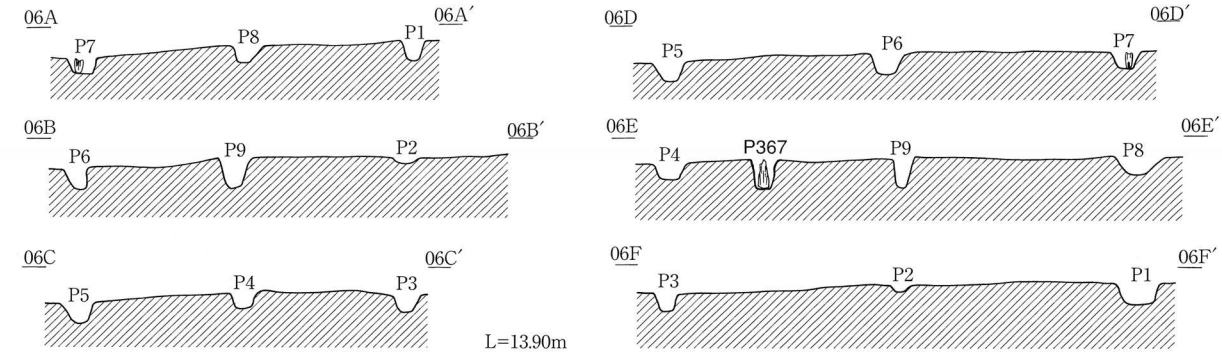


掘立柱建物SB04・10・11実測図

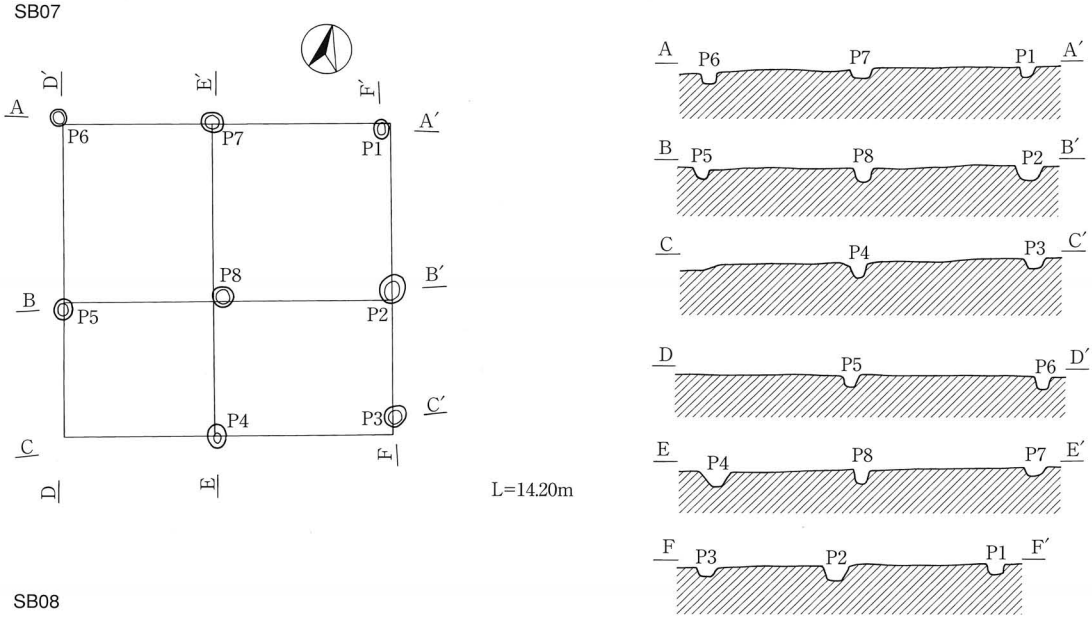


掘立柱建物SB05・06、小穴P360・367・369実測図

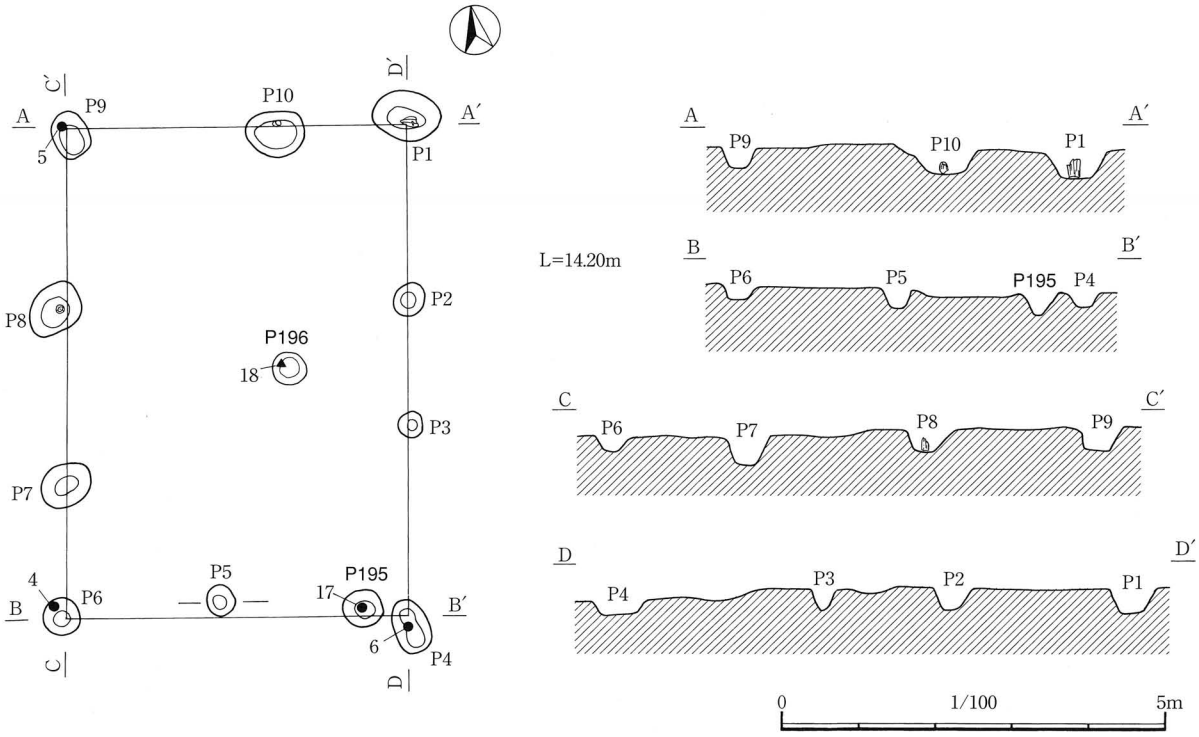
SB06



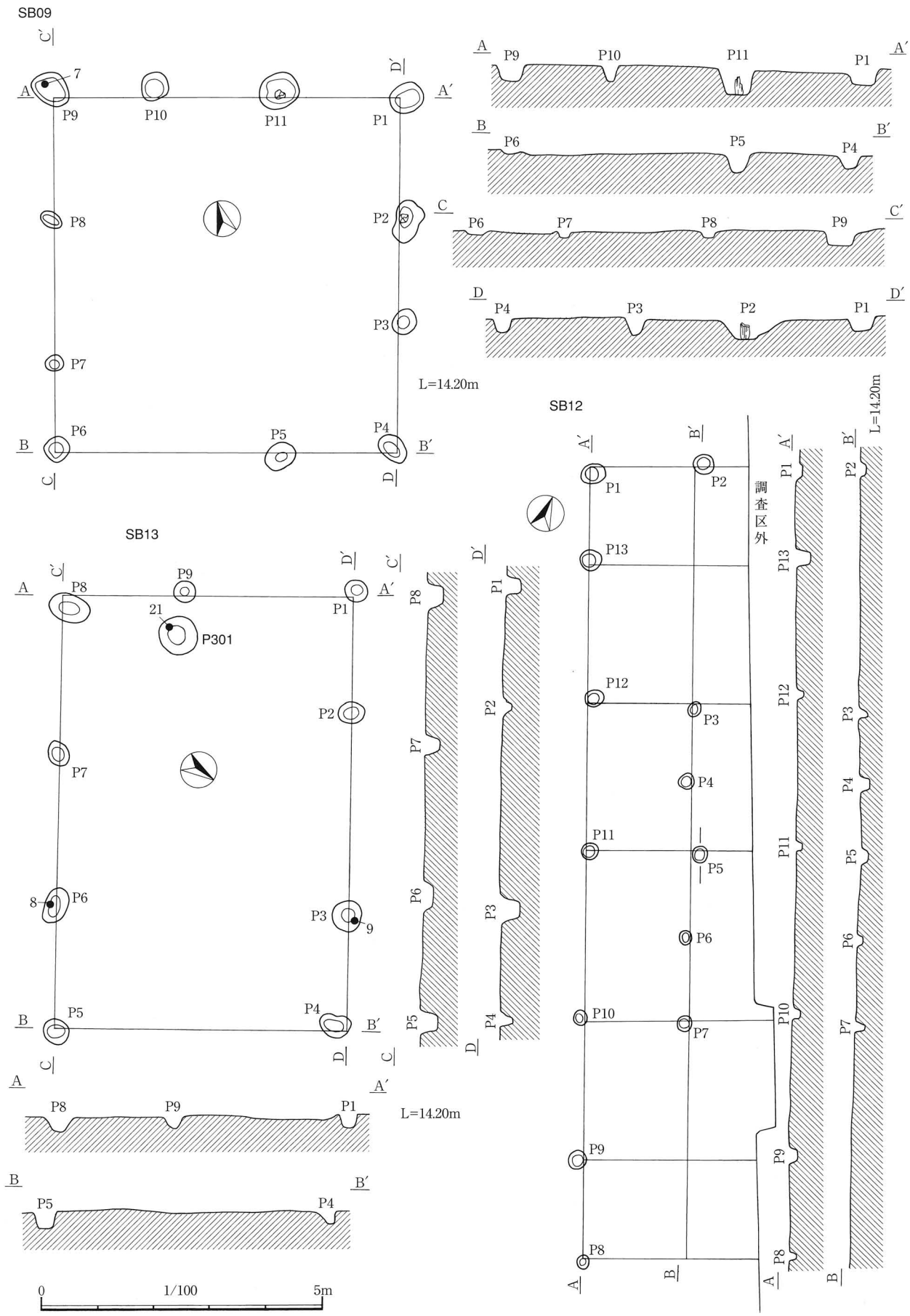
SB07



SB08

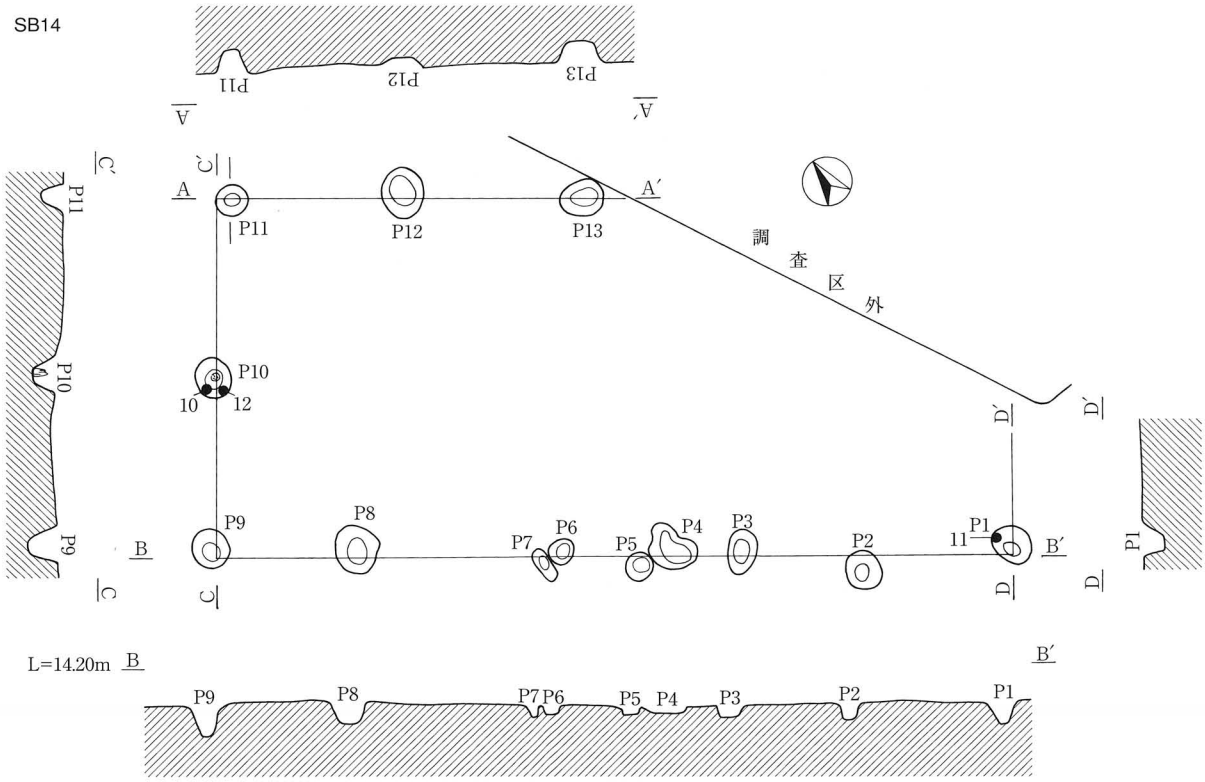


掘立柱建物SB06・07・08、小穴P195・196実測図

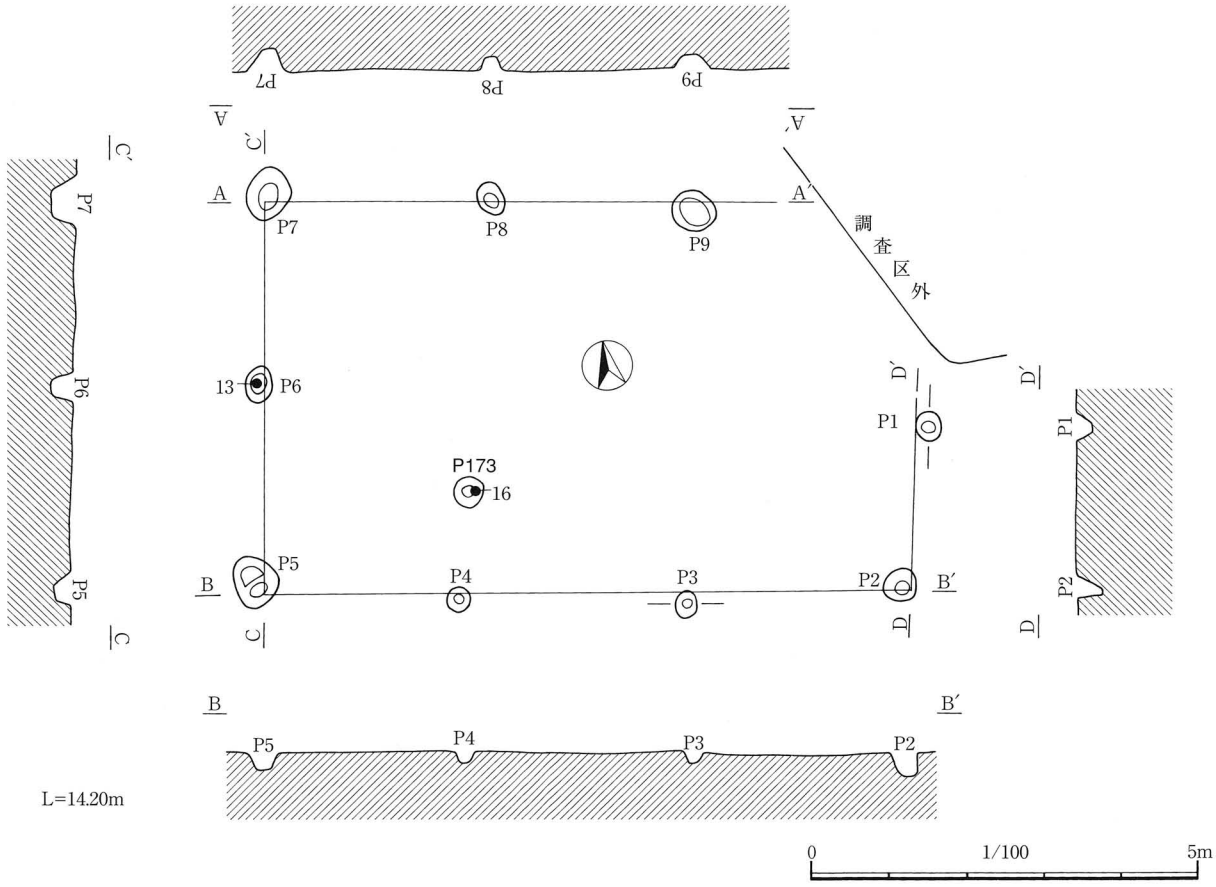


掘立柱建物SB09・12・13、小穴P301実測図

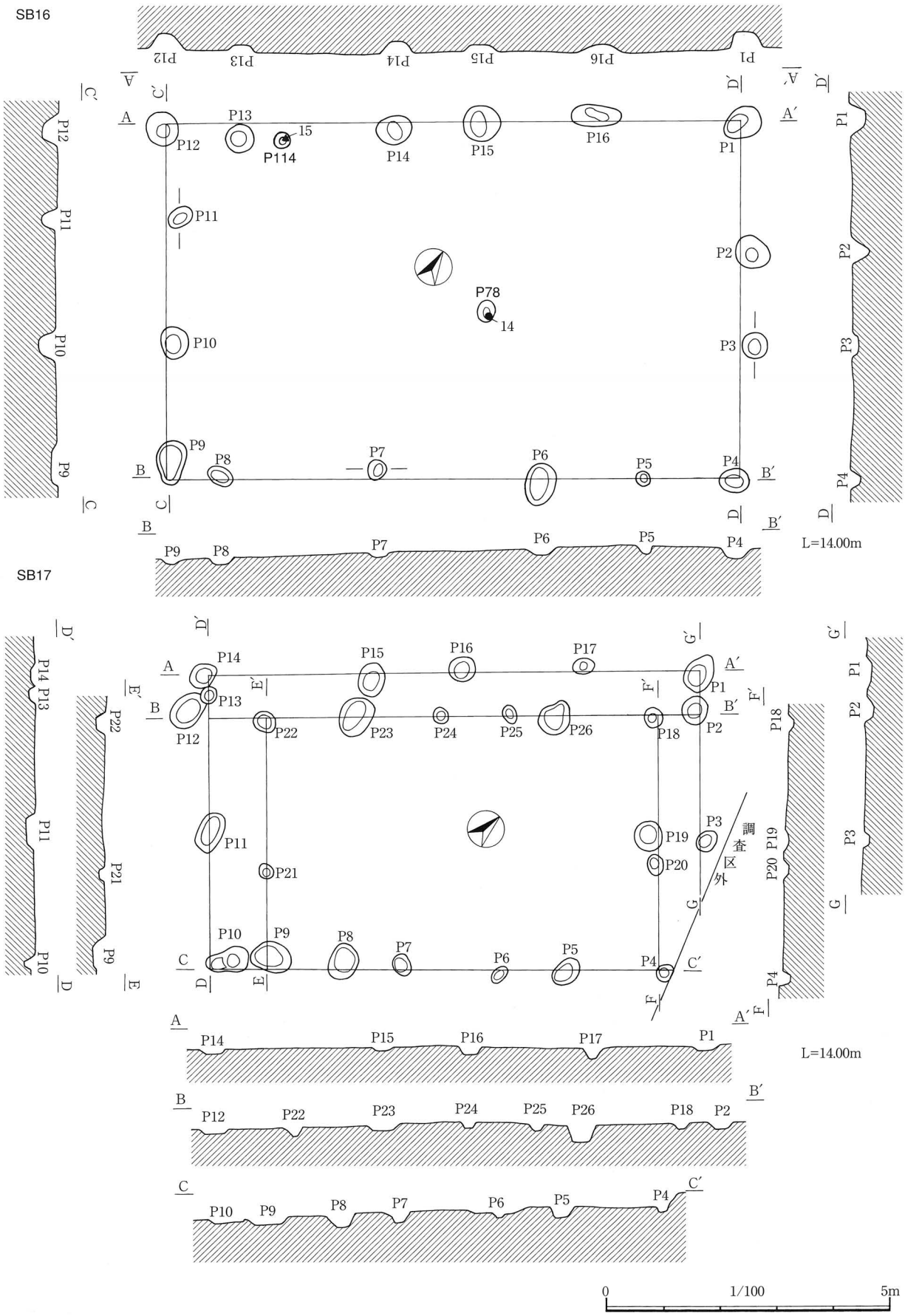
SB14



SB15

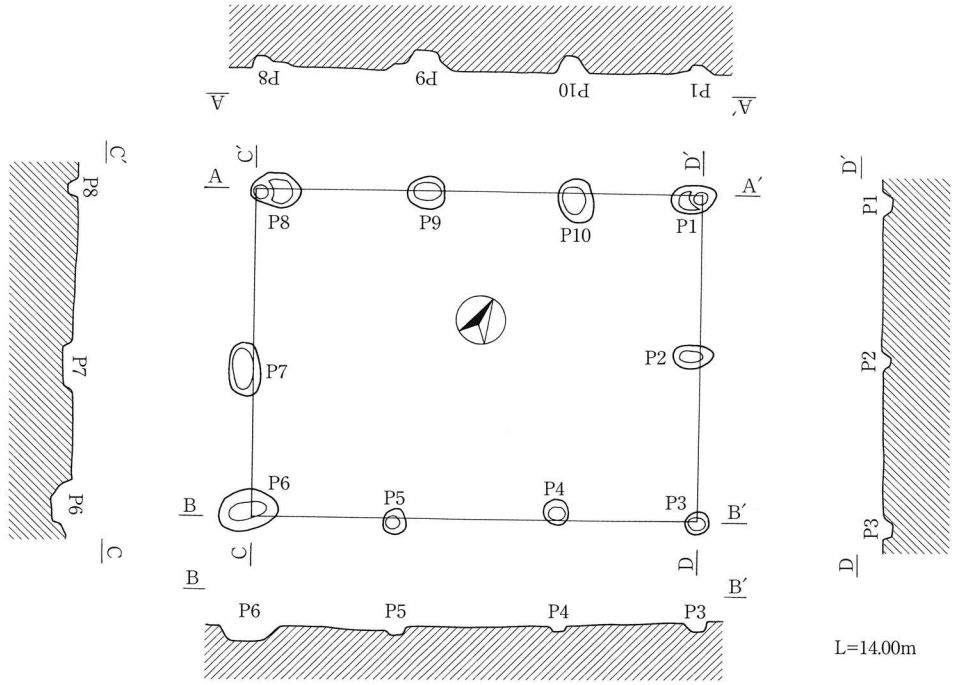


掘立柱建物SB14・15、小穴P173実測図

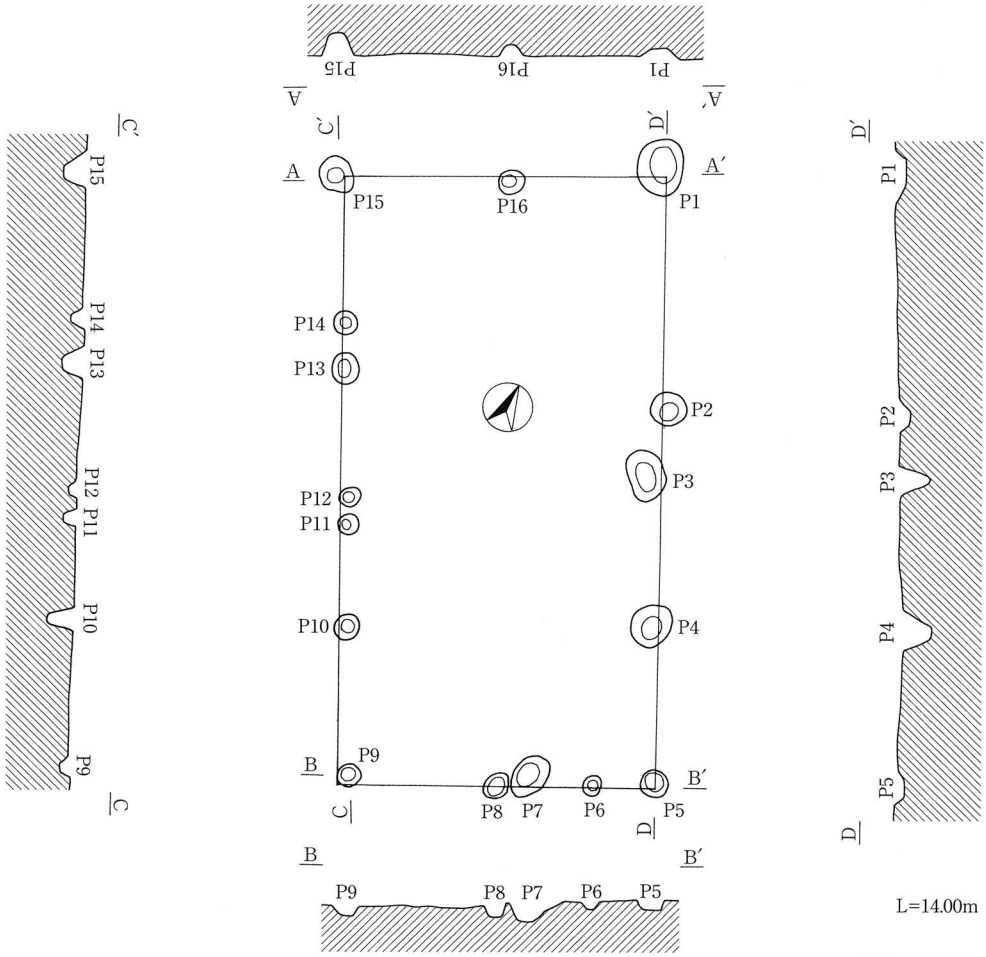


掘立柱建物SB16・17、小穴P78・114実測図

SB18



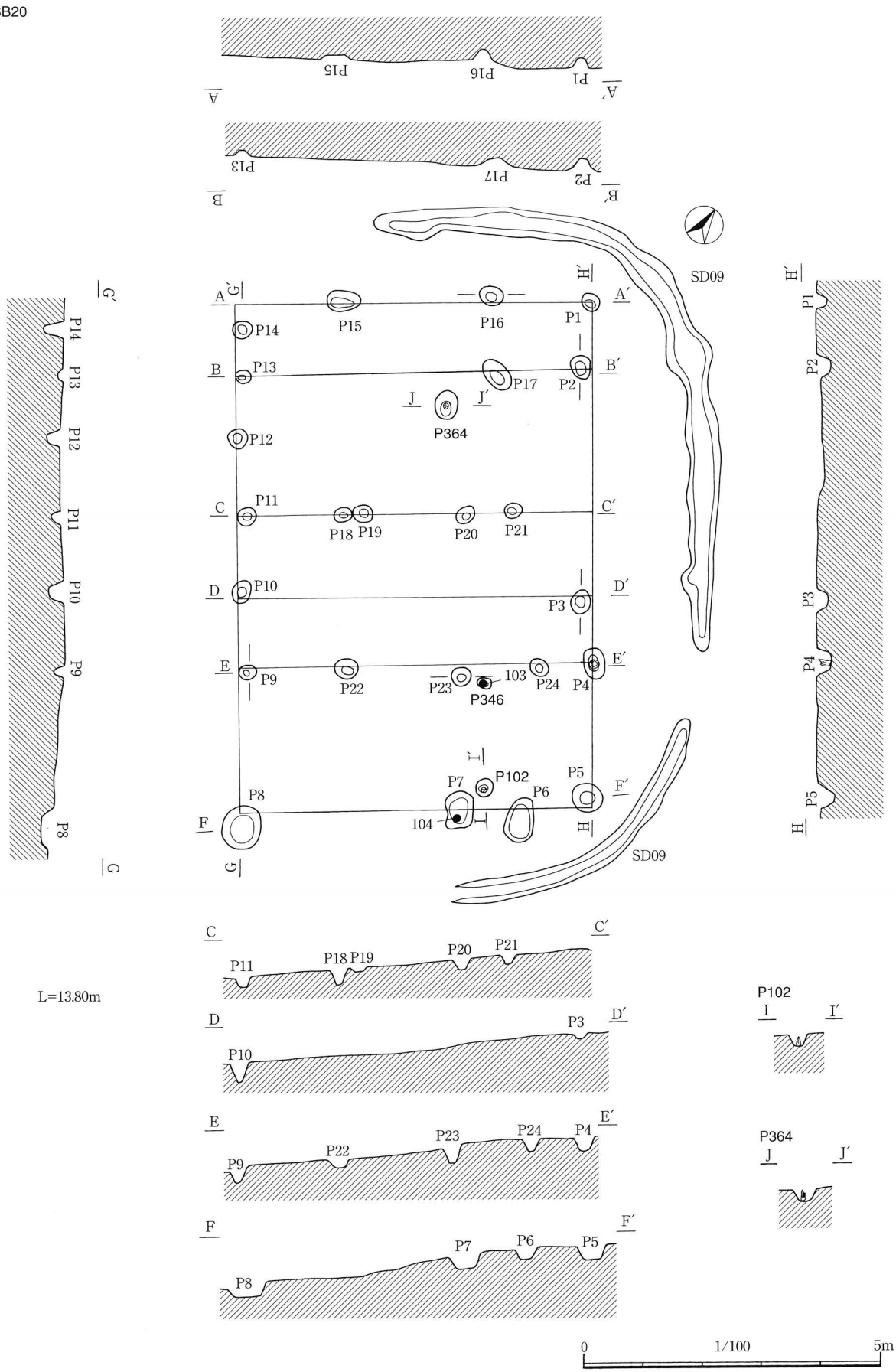
SB19



0　1/100　5m

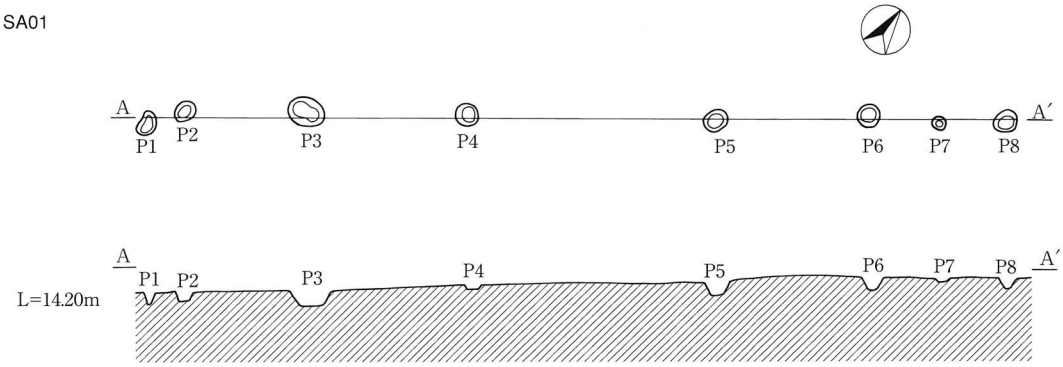
掘立柱建物SB18・19実測図

SB20

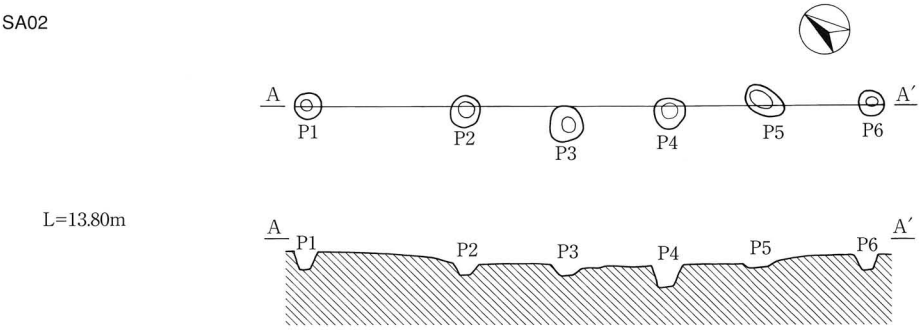


掘立柱建物SB20、小穴P102・346・364実測図

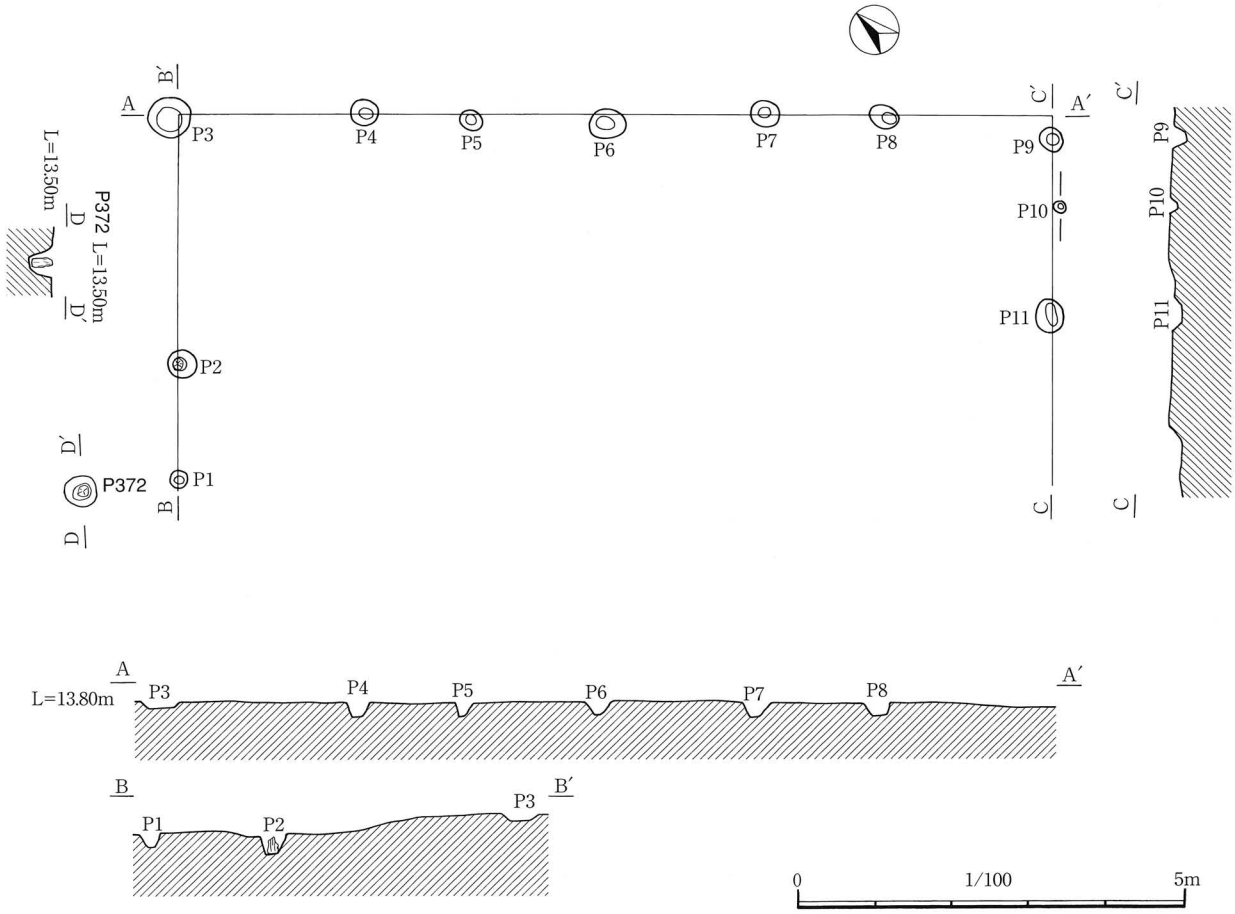
SA01



SA02

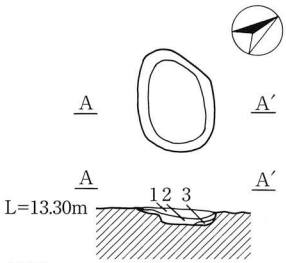


SA03



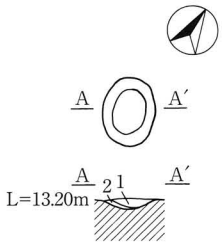
柵列SA01・02・03、小穴P372実測図

SK01



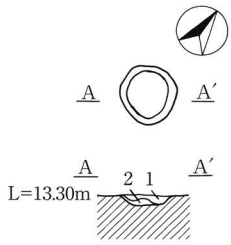
SK01
1．暗褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
2．黒褐色粘質土　他層より粘性強く、径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
3．暗灰色粘質土　径５～10mm大の灰黄褐色砂質土塊を５～10％含む。

SK02



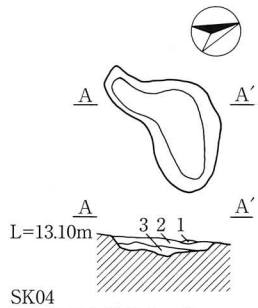
SK02
1．黒褐色粘質土　他層より粘性強く、径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
2．暗褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を１％程含む。

SK03



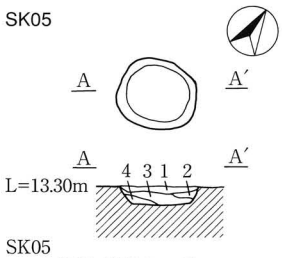
SK03
1．灰黒色粘質土　他層より粘性強く、径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
2．暗褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を１％程含む。

SK04



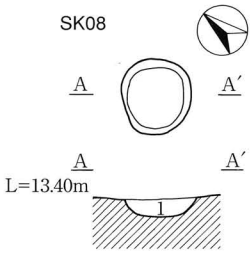
SK04
1．黒褐色粘質土　径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を２～３％含む。
2．褐灰色粘質土　径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
3．灰褐色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK05



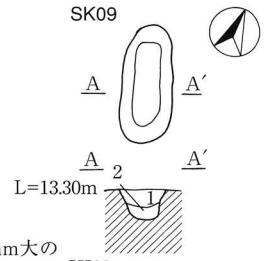
SK05
1．灰黒色粘質土　径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を２～３％含む。
2．黒褐色粘質土　径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
3．暗褐色粘質土　他層より粘性強く、径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
4．褐灰色砂質土　径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を５～10％含む。

SK08



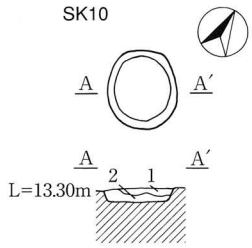
SK08
1．暗褐色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK09



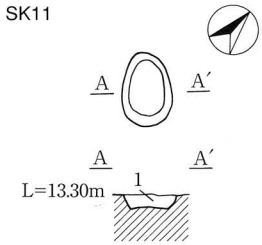
SK09
1．黒褐色粘質土　径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
2．褐灰色砂質土　径10～30mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK10



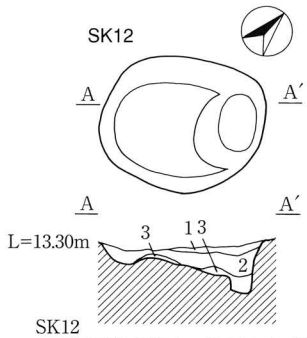
SK10
1．灰黒色粘質土　他層より粘性強く、径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
2．黒褐色粘質土　径１０～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を５～10％含む。

SK11



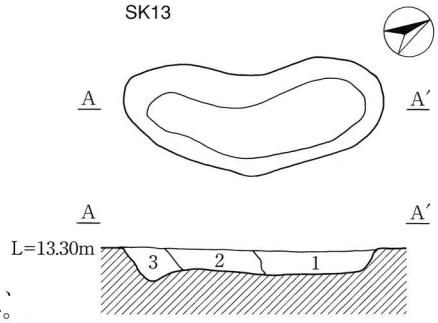
SK11
1．灰褐色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を２～３％含む。

SK12



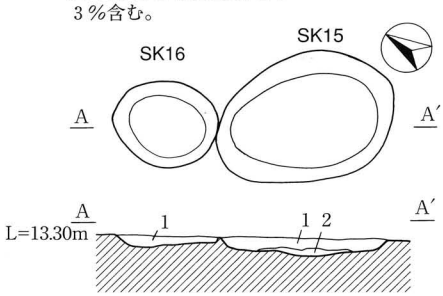
SK12
1．灰黒色粘質土　他層より粘性強く、径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
2．黒褐色粘質土　径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を５～10％含む。
3．暗褐色土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を２～３％含む。

SK13



SK13
1．灰黒色粘質土　径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を２～３％含む。
2．黒褐色粘質土　径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
3．暗褐色粘質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

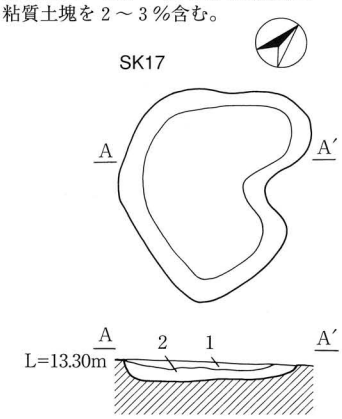
SK16　SK15



SK15
1．暗褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
2．暗褐色土　明黄褐色砂質土を２～３％含む。

SK16
1．灰褐色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK17

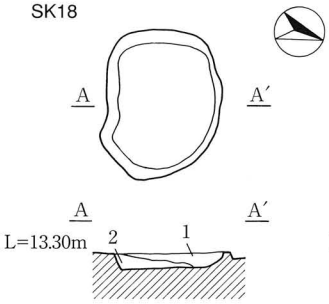


SK17
1．黒褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を２～３％含む。
2．暗褐色土　明黄褐色砂質土を２～３％含む。

0　1/60　2m

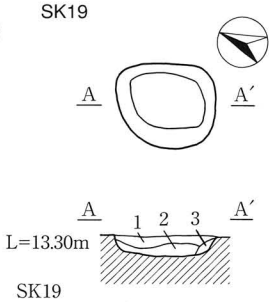
土坑SK01～05・08～13・15～17実測図

SK18



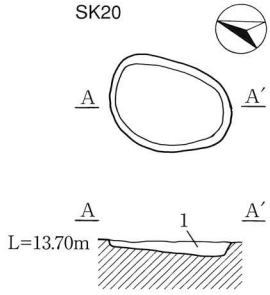
SK18
1．黒褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
2．暗褐色土　明黄褐色砂質土を２～３％含む。

SK19



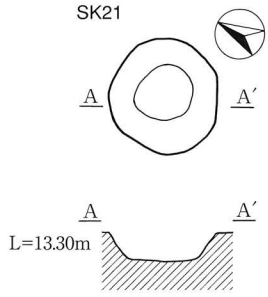
SK19
1．黒褐色粘質土　灰黄褐色砂質土をラミナ状に５～10％含む。
2．暗褐色土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。
3．灰黄褐色砂質土　黒褐色粘質土塊を２～３％含む。

SK20

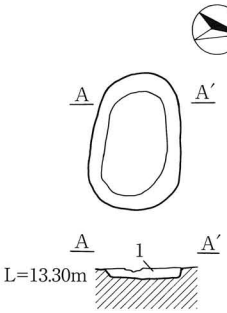


SK20
1．暗褐色土　明黄褐色砂質土を２～３％含む。

SK21

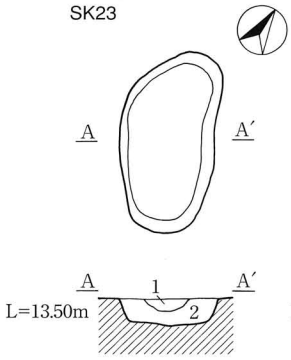


SK22



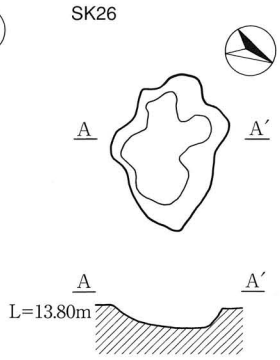
SK22（図面14）
1．褐灰色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK23

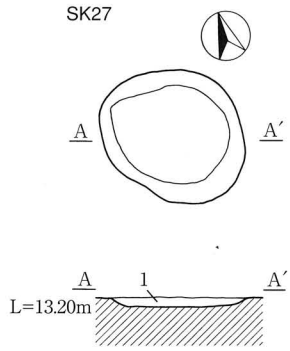


SK23
1．暗褐色土　明黄褐色砂質土を２～３％含む。
2．にぶい黄橙色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK26

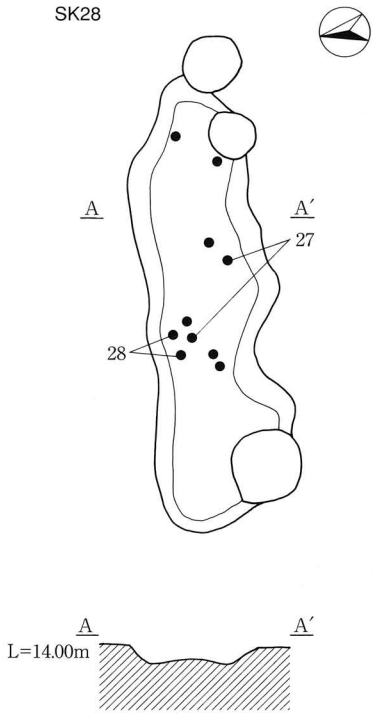


SK27

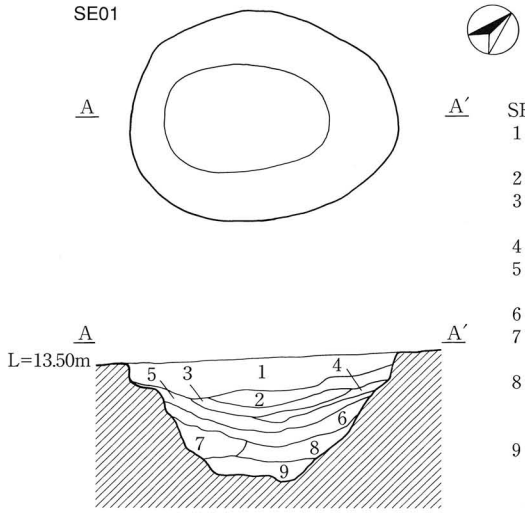


SK27
1．灰褐色砂質土　径５～10mm大の黒褐色粘質土塊を５～10％含む。

SK28



SE01

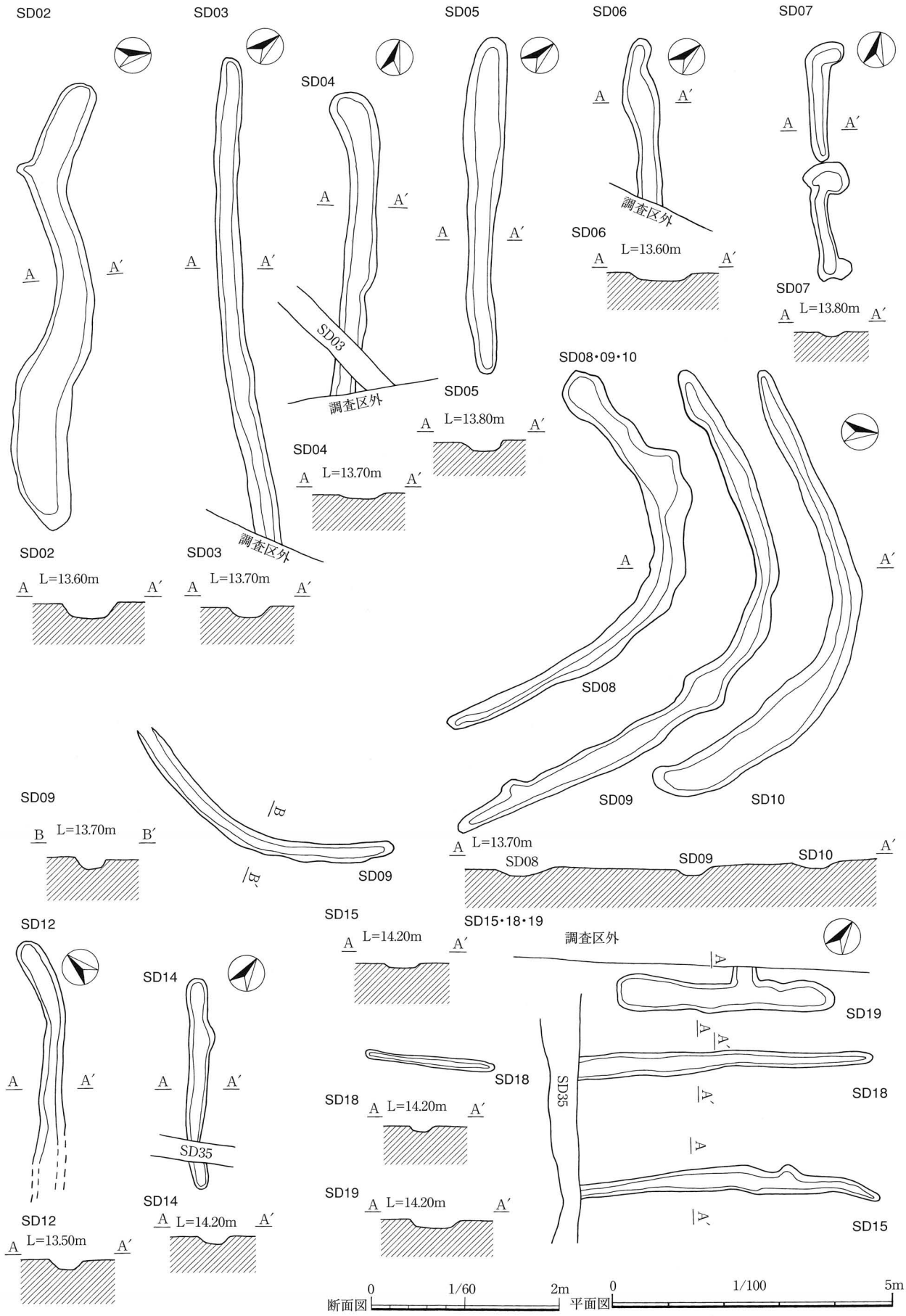


SE01
1．暗褐色砂質土　径５～10mm大の炭塊を２～３％含む。
2．極暗褐色粘質土
3．黒褐色粘質土　明黄褐色砂質土を２～３％含む。
4．暗褐色砂質土
5．黒褐色粘質土　径２～５mm大の炭塊を１％程含む。
6．灰黒色砂質土
7．暗褐色粘質土　灰色砂質土をラミナ状に５～10％含む。
8．黒褐色粘質土　径５～10mm大の炭塊を２～３％程含む。トチの実、板材出土。
9．暗褐色砂質土

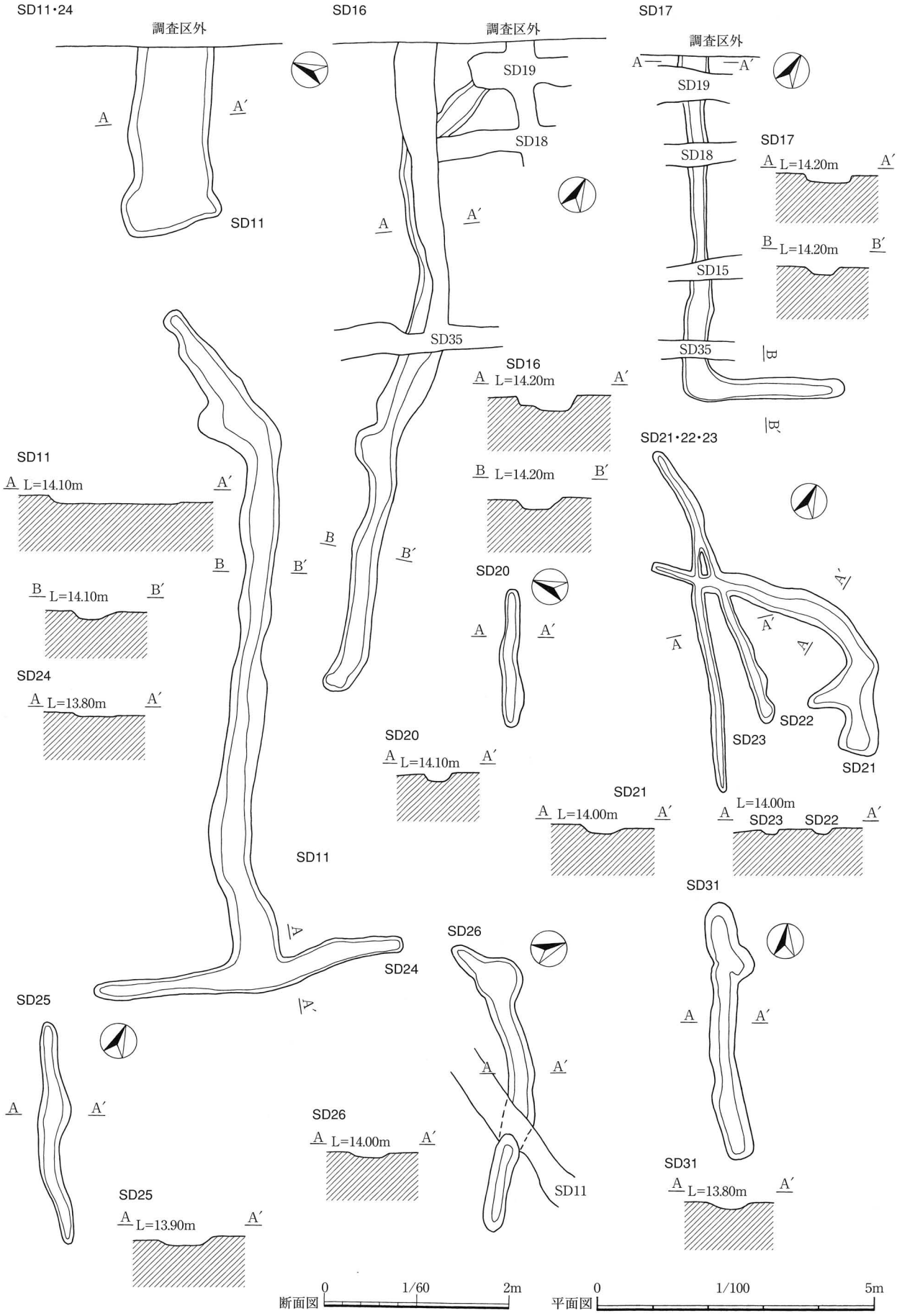
0　1/60　2m

土坑SK18～23・26～28、井戸SE01実測図

図面一五　遺構実測図

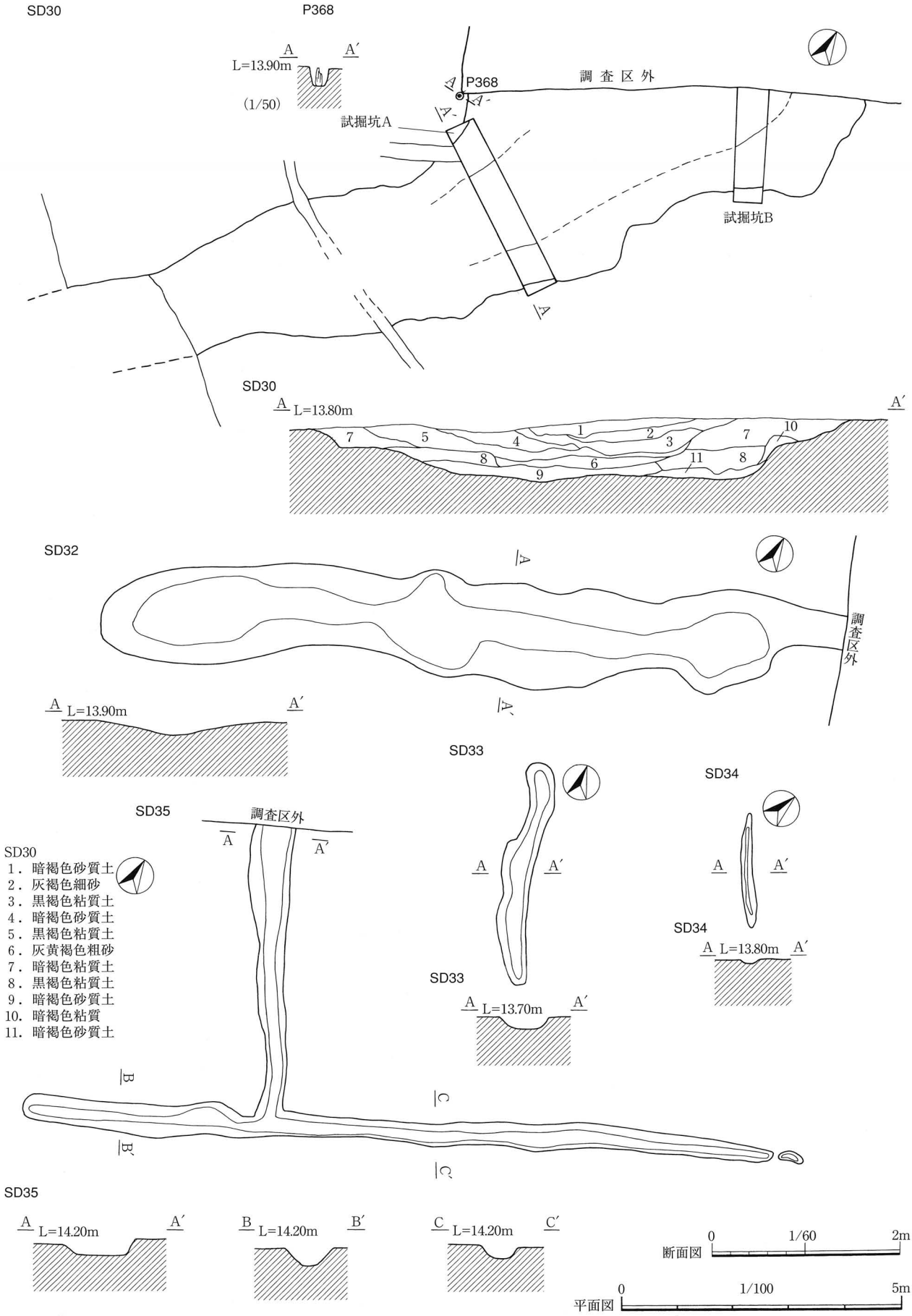


溝SD02～10・12・14・15・18・19実測図

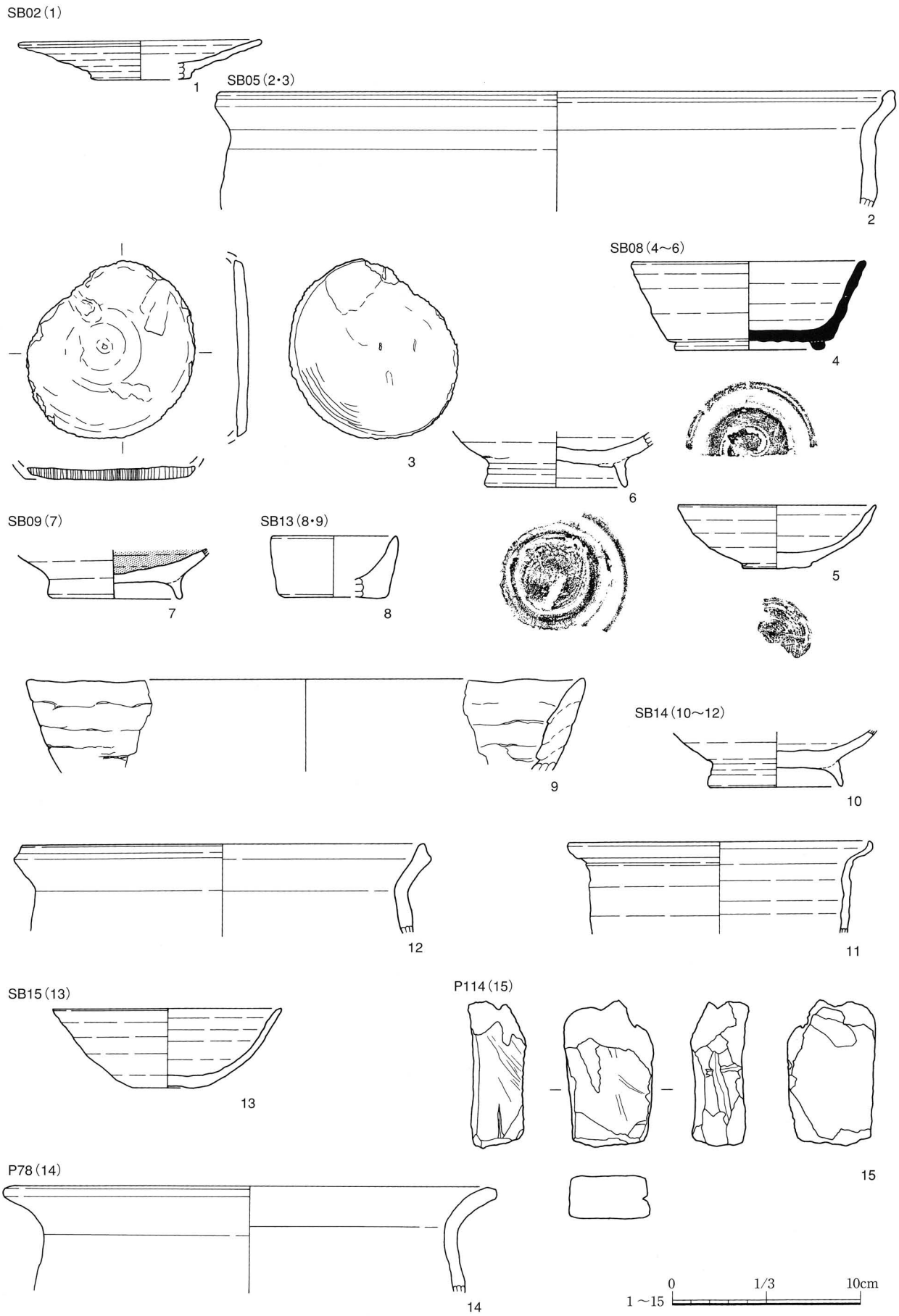


溝SD11・16・17・20～26・31実測図

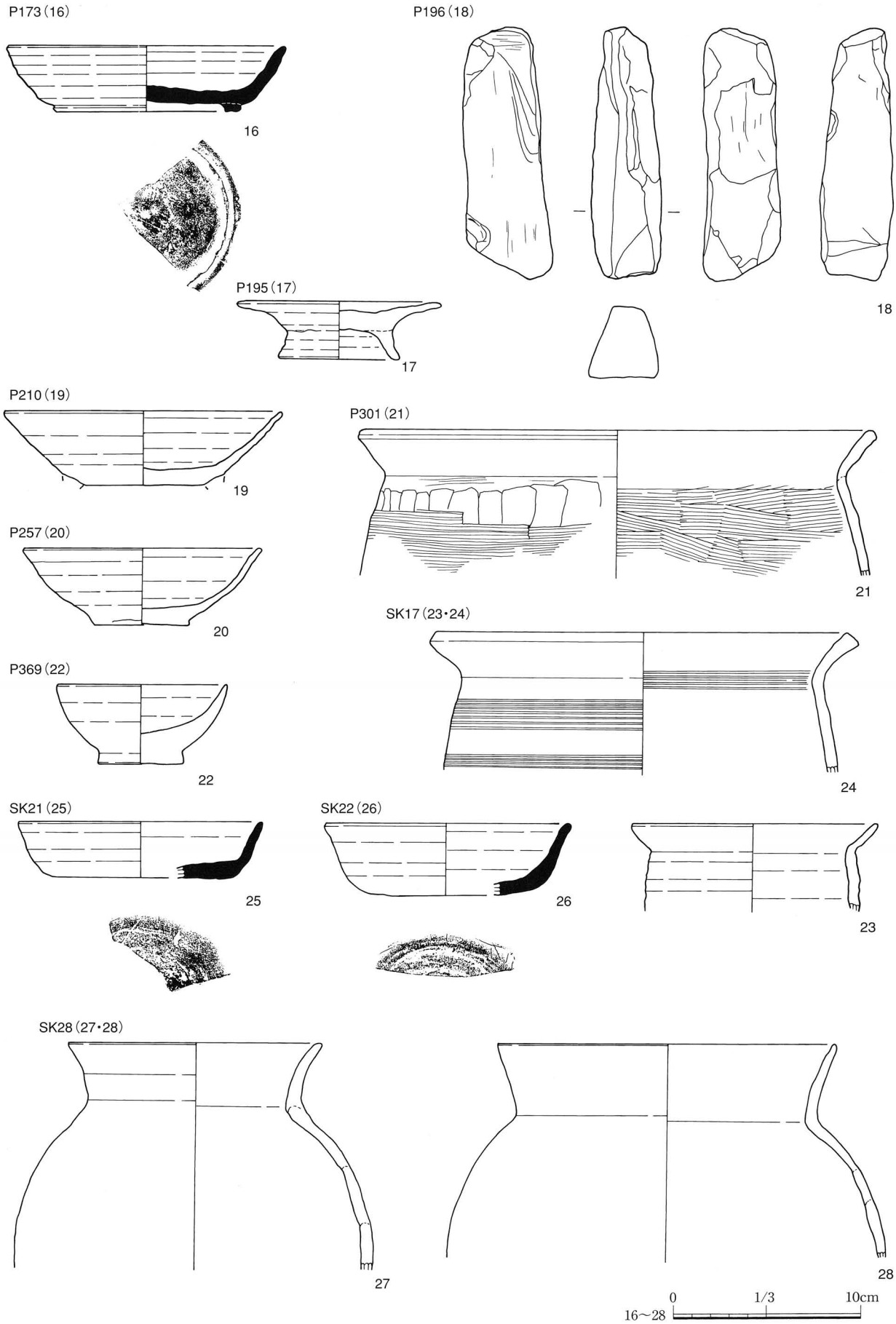
図面一七　遺構実測図



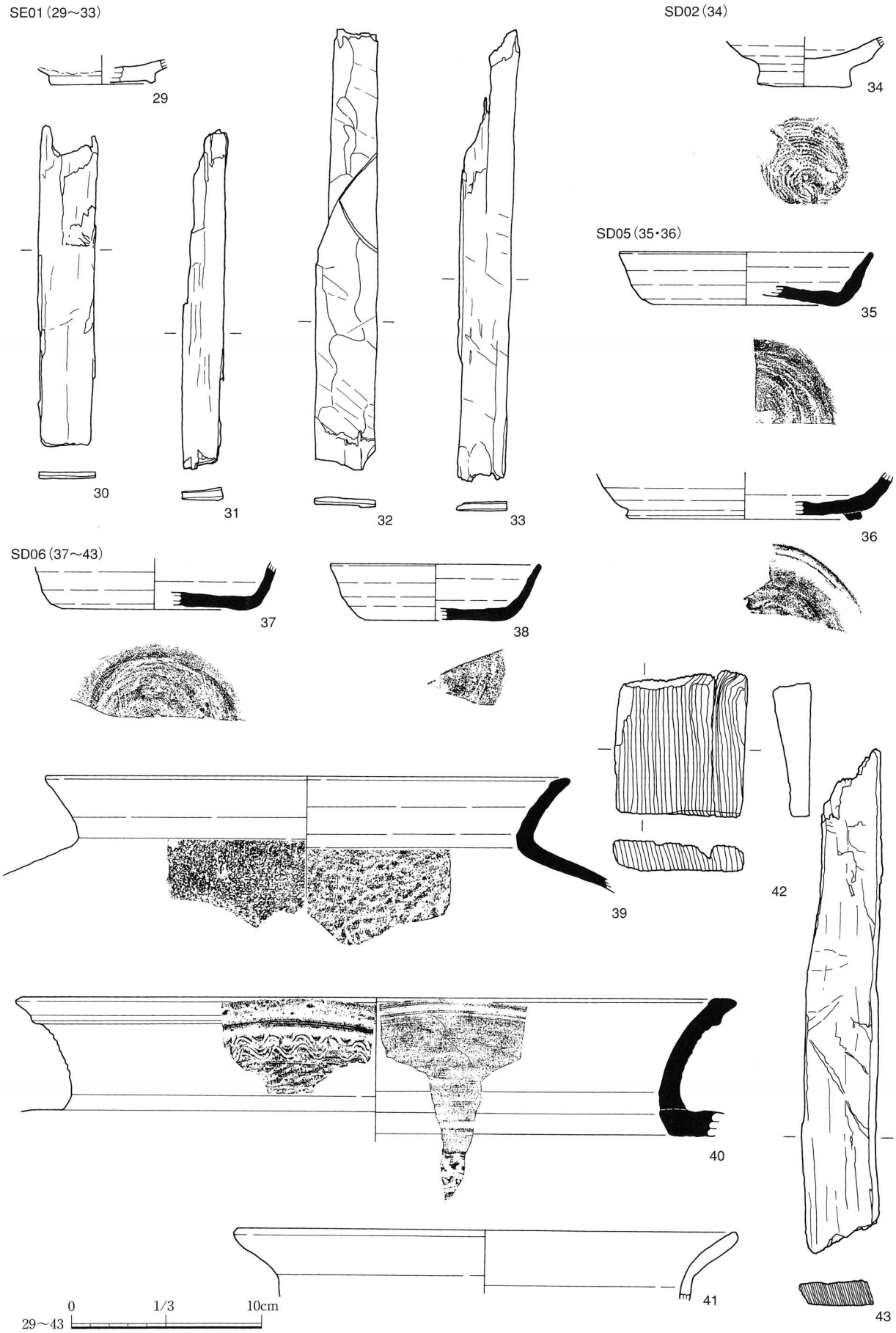
溝SD30・32～35、小穴P368実測図



掘立柱建物SB02・05・08・09・13・14・15、小穴P78・114出土遺物

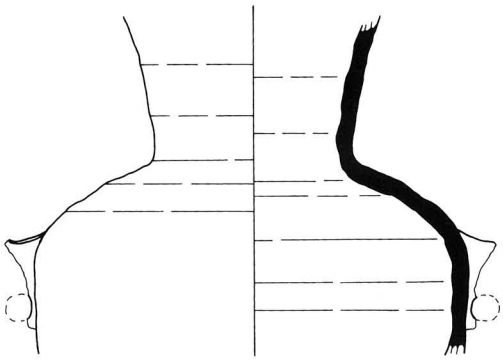


小穴P173・195・196・210・257・301・369、土坑SK17・21・22・28出土遺物

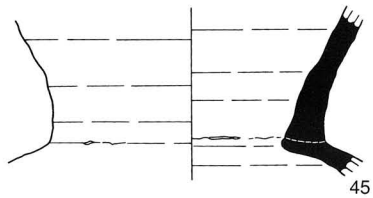


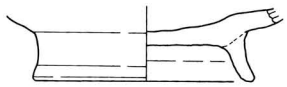
井戸SE01、溝SD02・05・06出土遺物

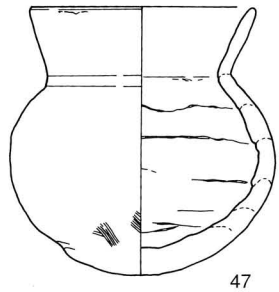
SD09（44）



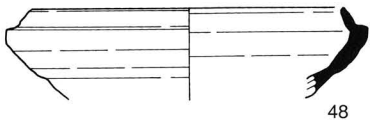
SD11（45～47）

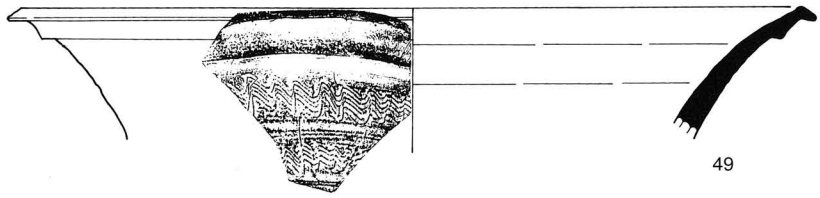


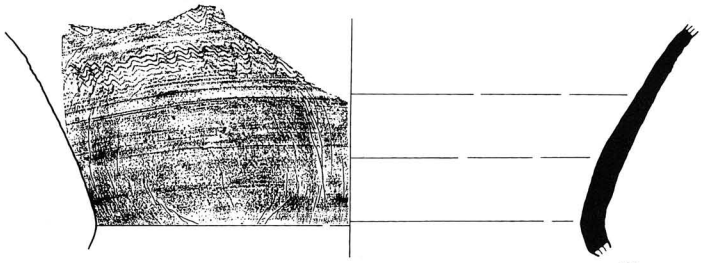


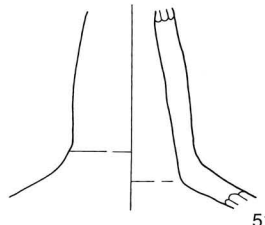


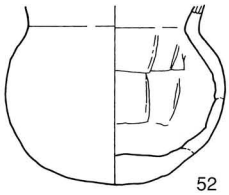
遺物包含層、表土層（48～57）

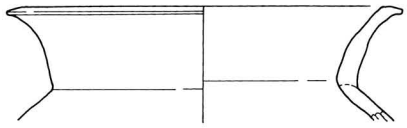


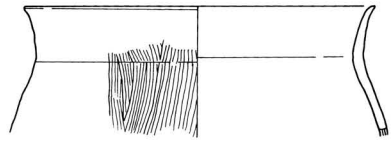


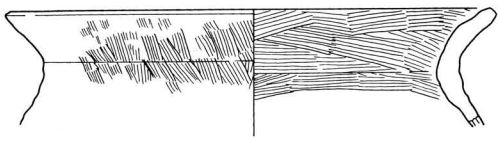


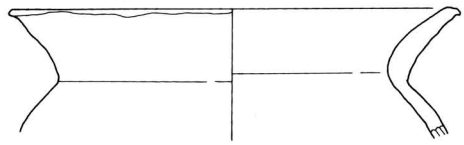


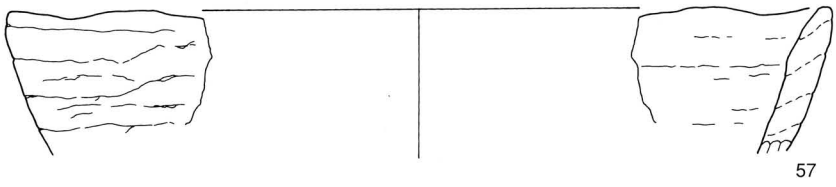








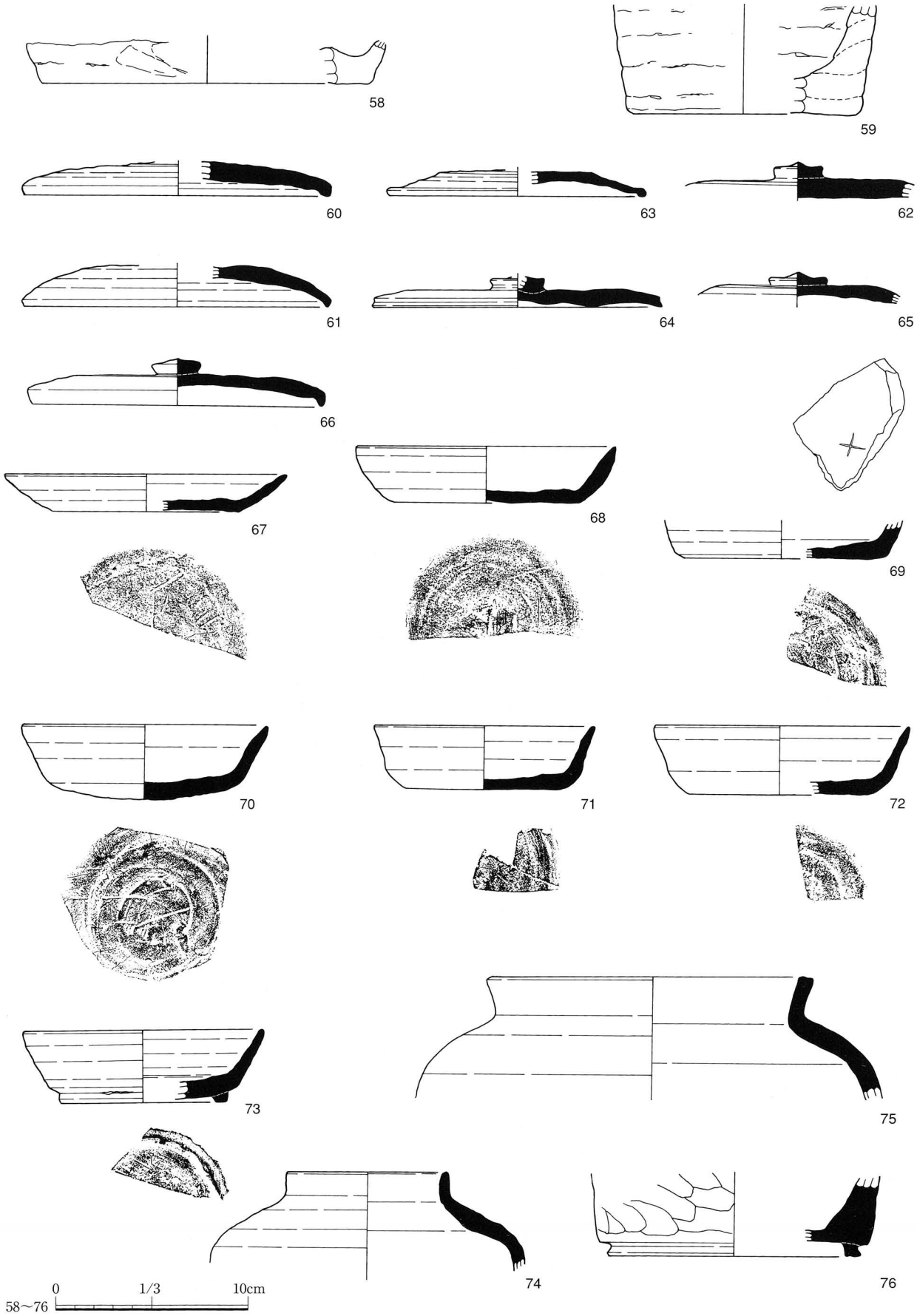




44～57　0　1/3　10cm

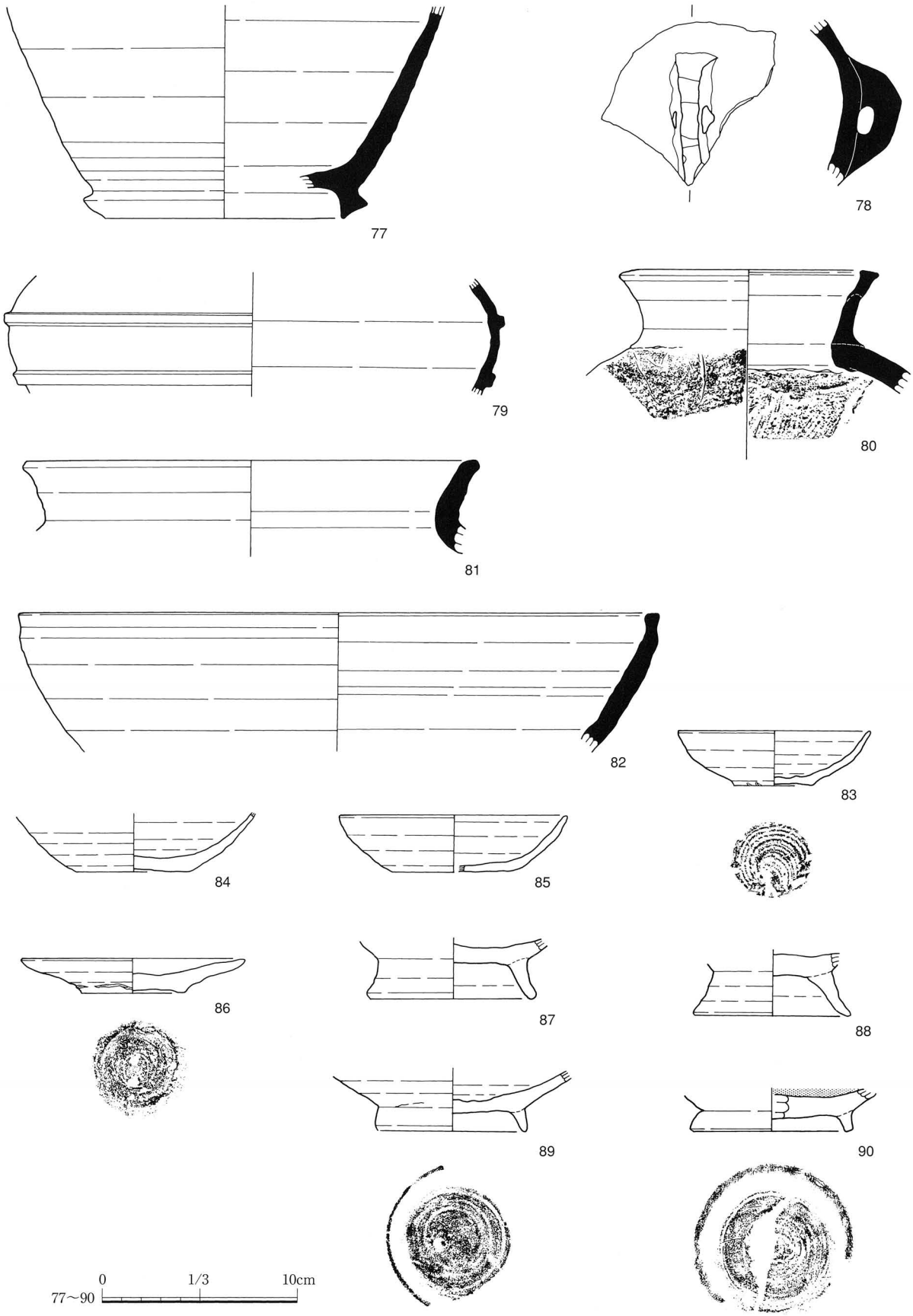
溝SD09・11、遺物包含層、表土層出土遺物

遺物包含層、表土層（58～76）



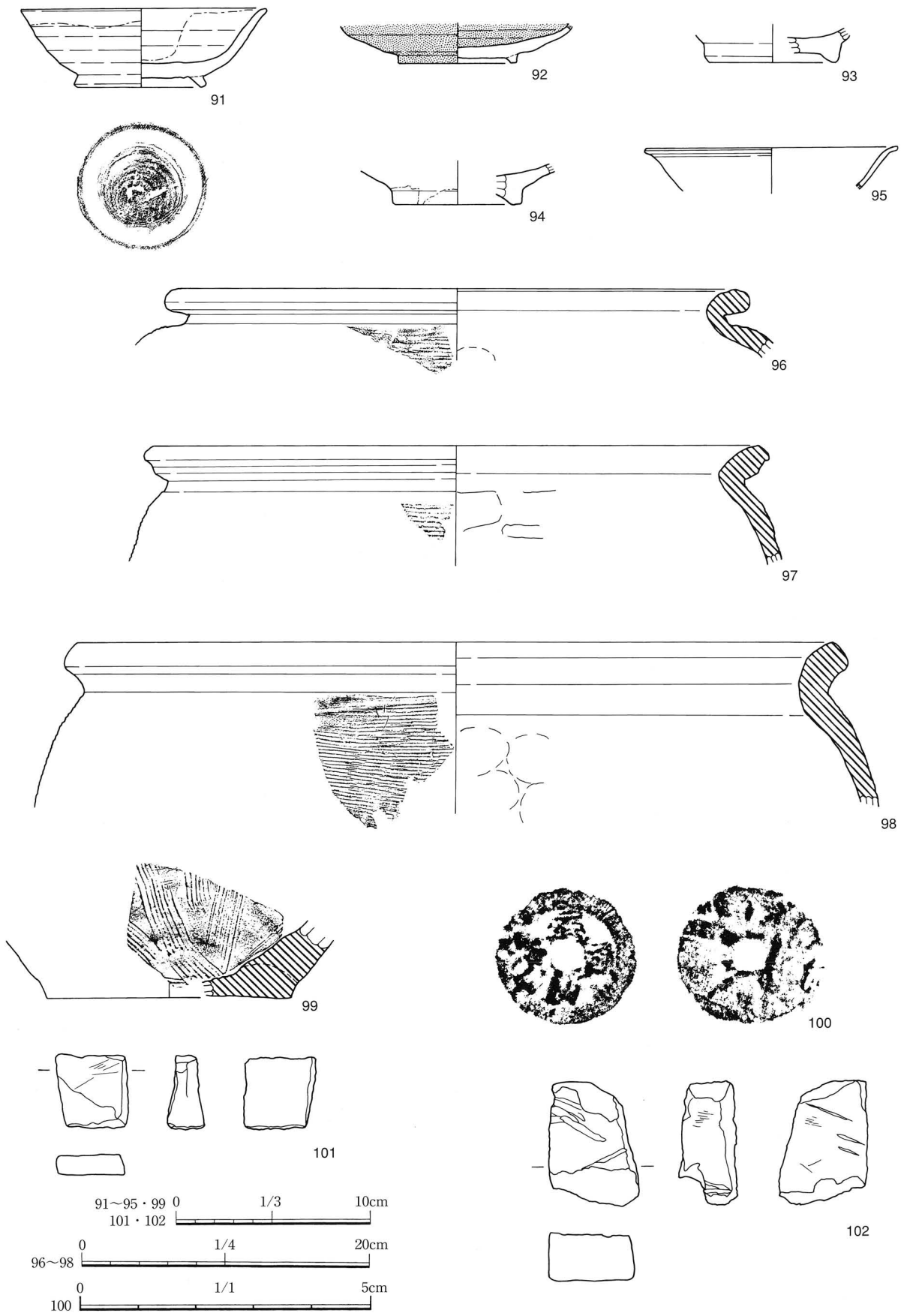
遺物包含層、表土層出土遺物

遺物包含層、表土層（77～90）



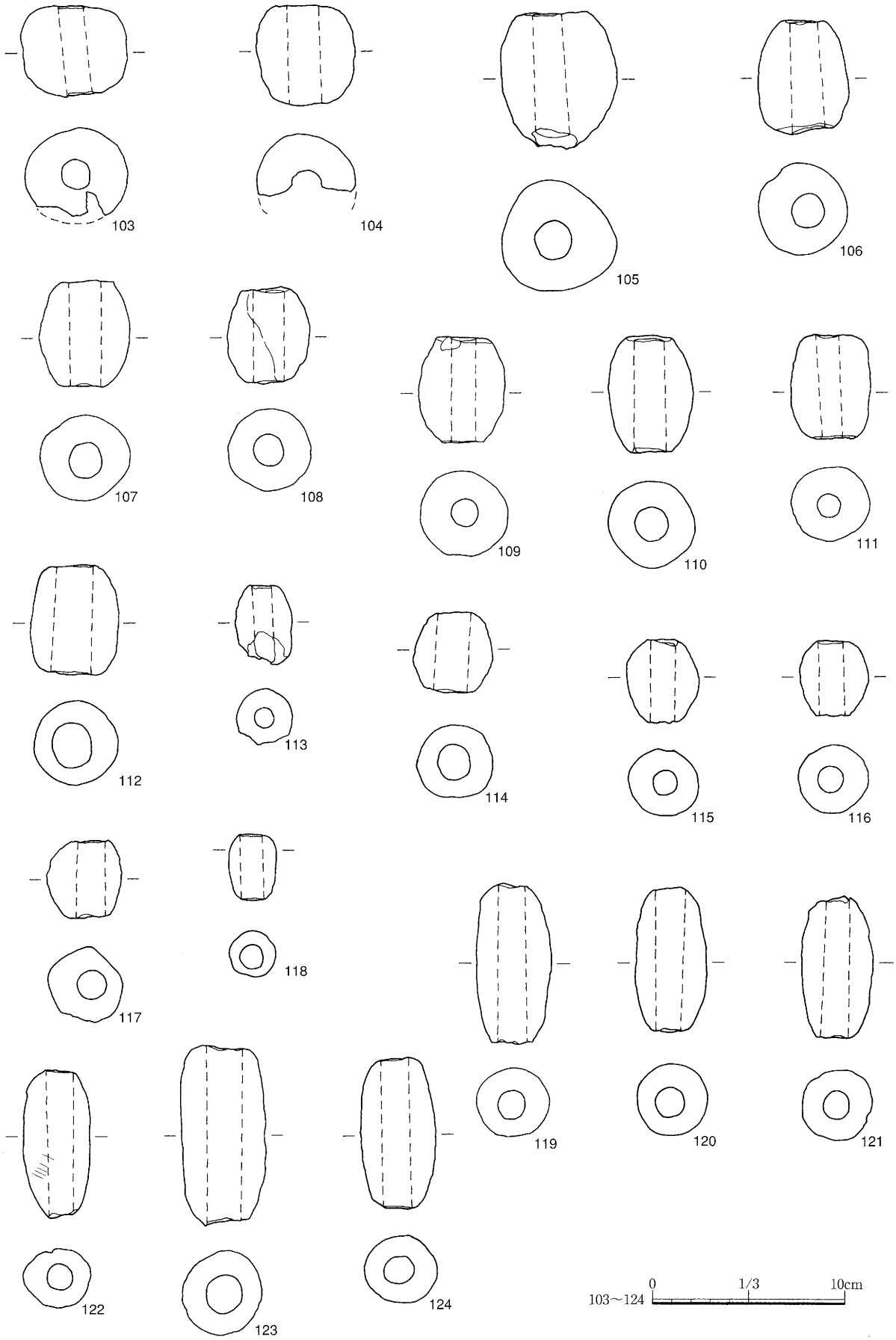
遺物包含層、表土層出土遺物

遺物包含層、表土層（91～102）



遺物包含層、表土層出土遺物

遺跡内出土　土錘（103～124）



遺跡内出土土錘（掘立柱建物SB10P10、SB20P7、小穴P253・346、土坑SK22、溝SD02・11、遺物包含層、表土層）

図　　版

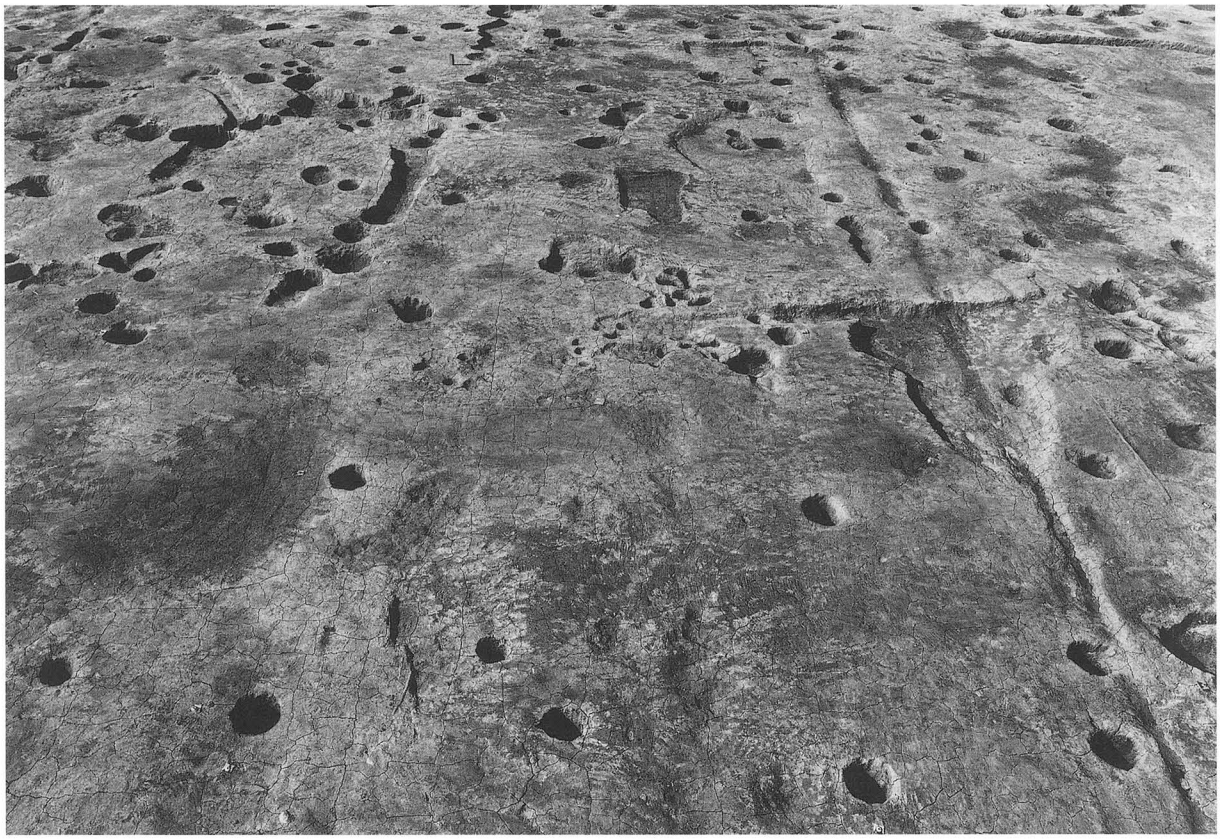
図版〇一　遺跡写真

遺跡全景（上空から）

※当写真は３回に分けて撮影したものを合成したものである。

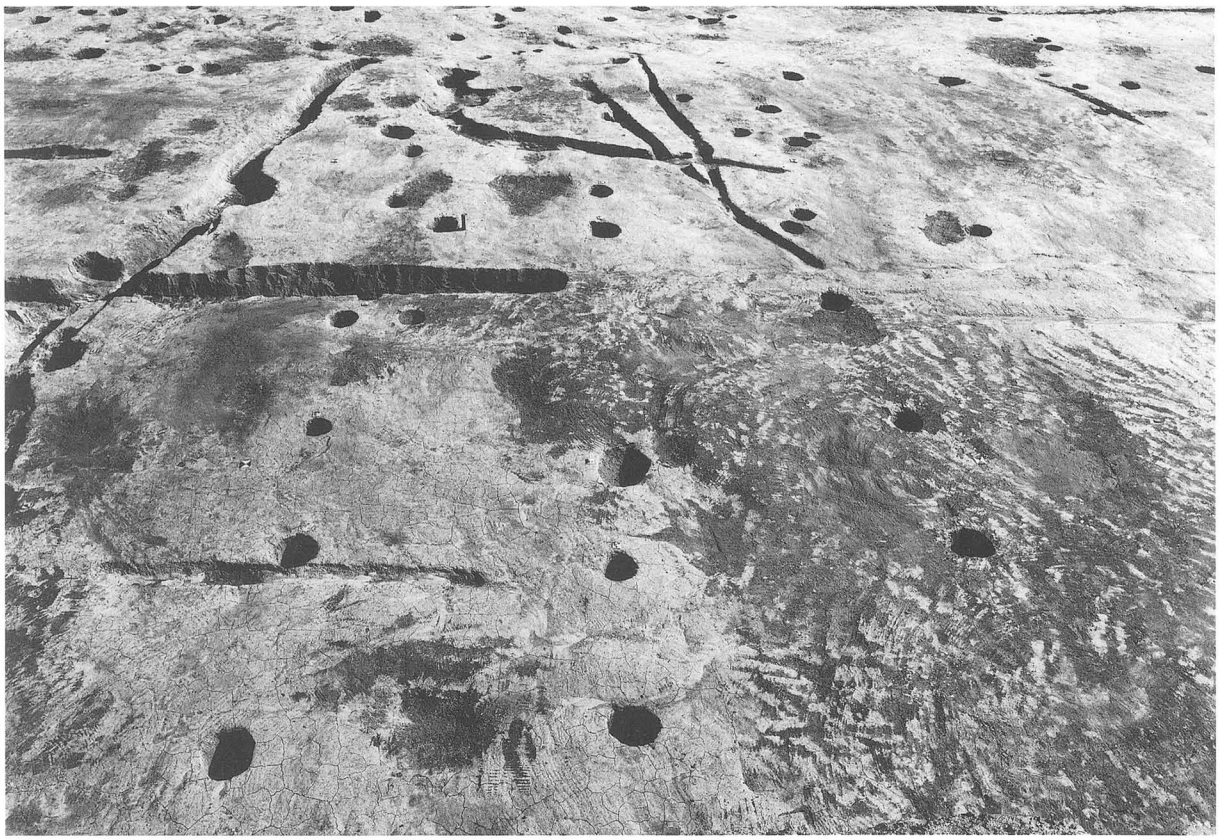
1．遺跡遠景（南東上空から）

2．掘立柱建物 SB01 完掘状況（北から）

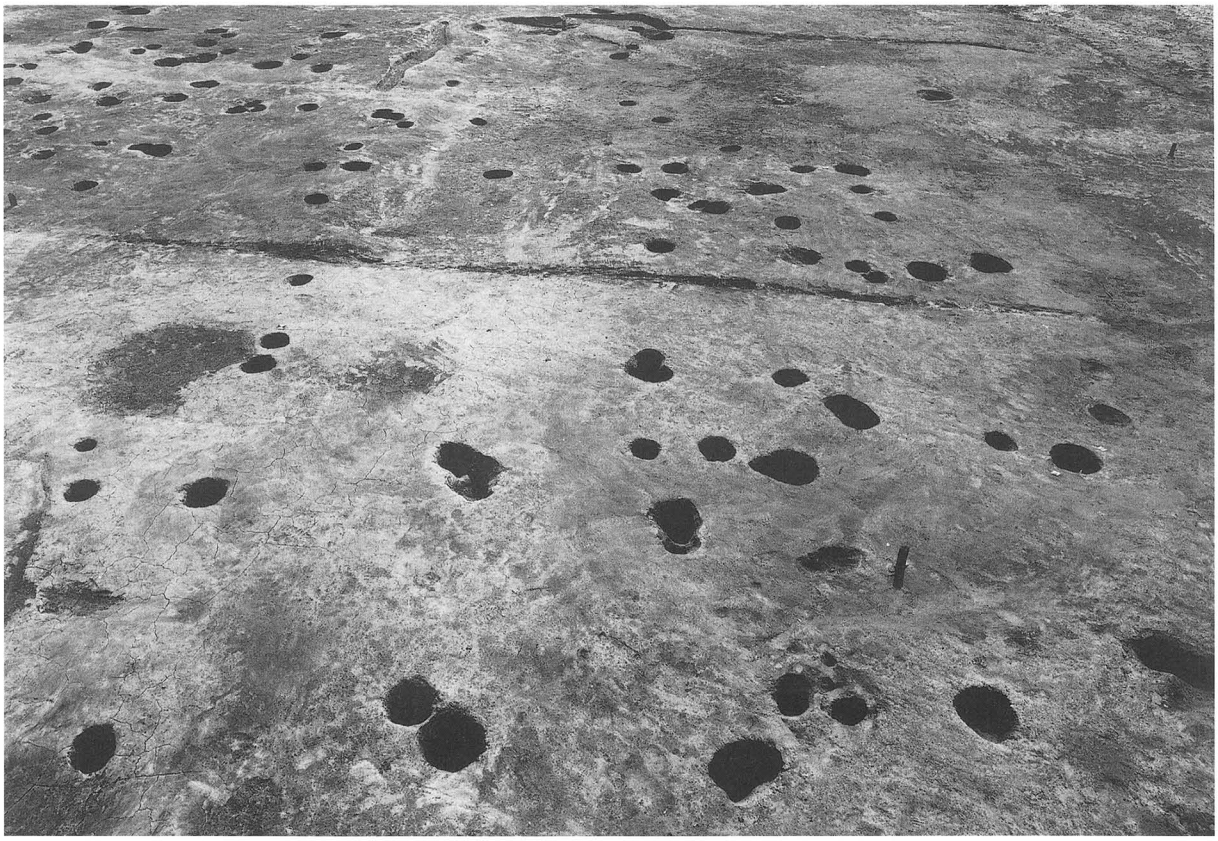


1．掘立柱建物 SB02 完掘状況（東から）

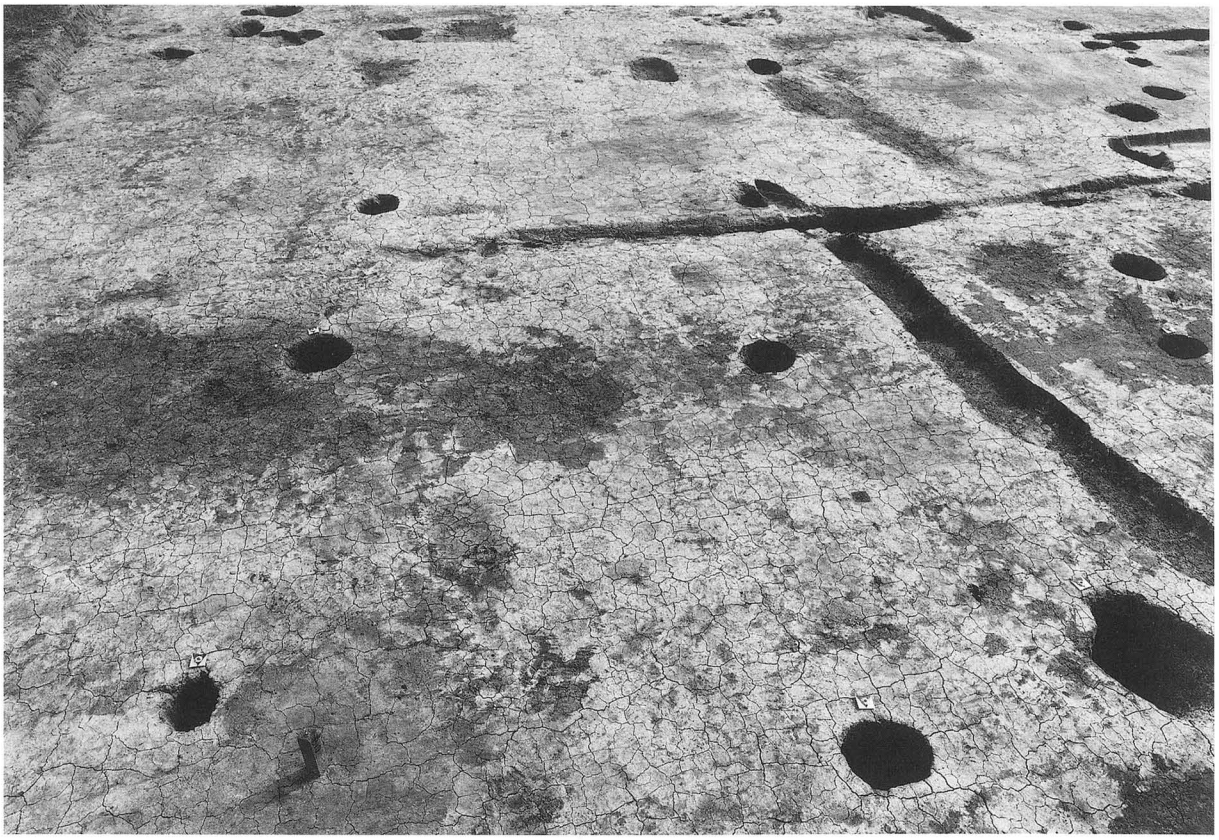
2．掘立柱建物 SB03 完掘状況（東から）



1．掘立柱建物 SB04 完掘状況（北から）

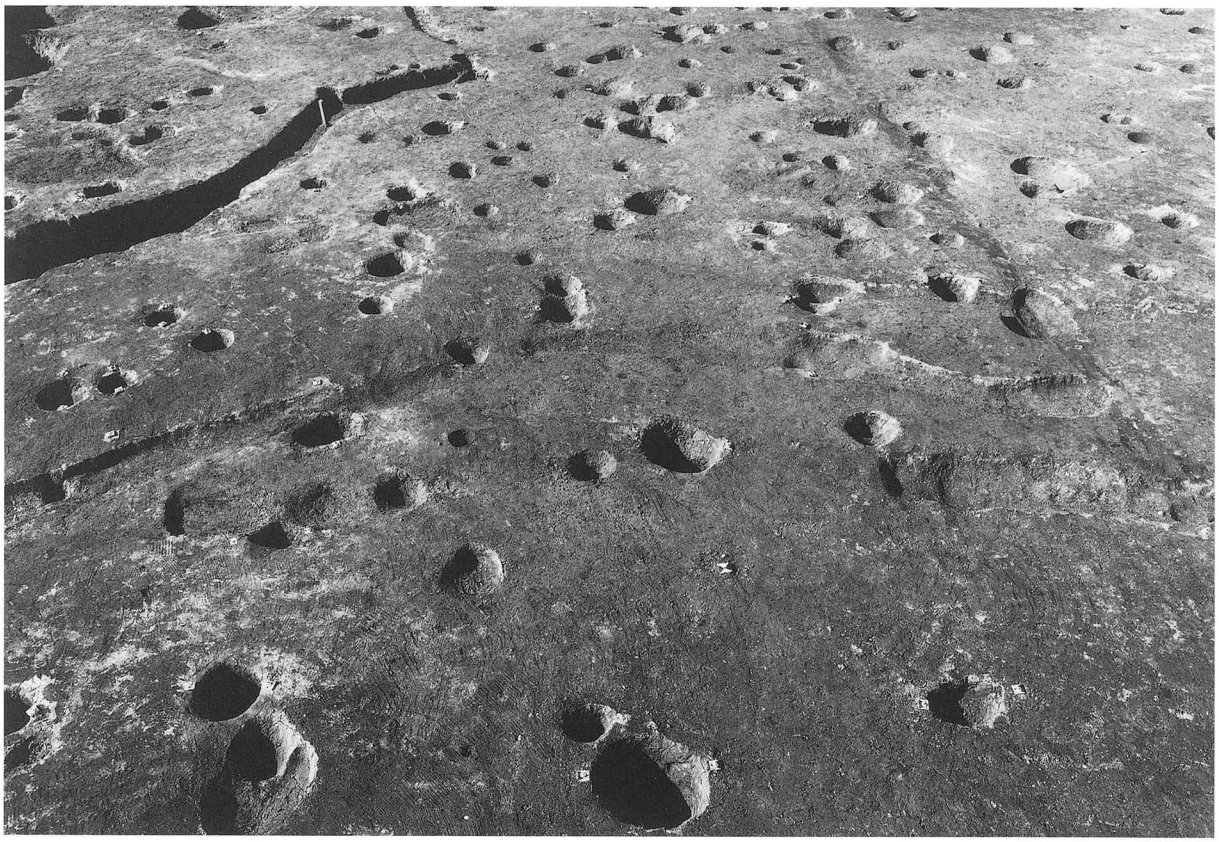


2．掘立柱建物 SB05・06 完掘状況（北から）



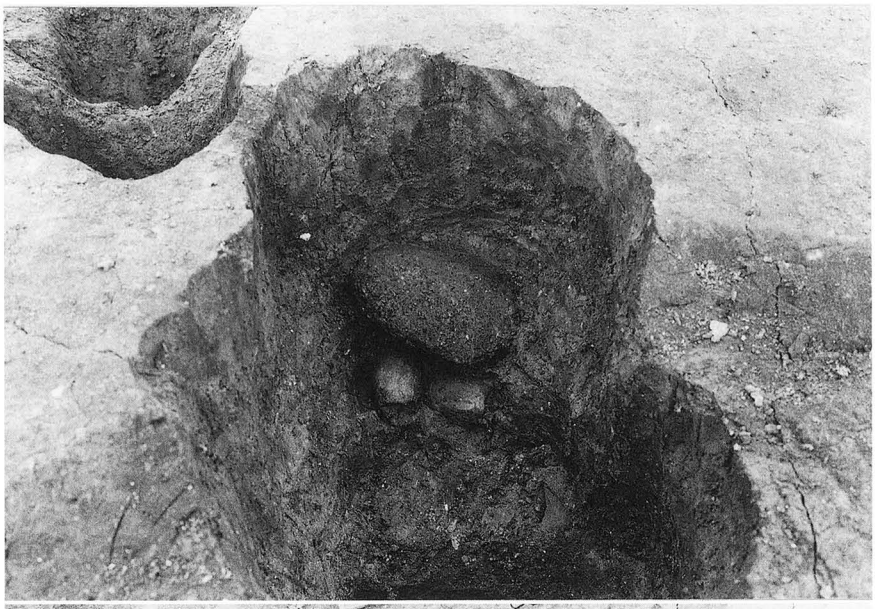
1．掘立柱建物 SB07 完掘状況（北から）

2．掘立柱建物 SB10・11 完掘状況（東から）



1．掘立柱建物 SB16・19 完掘状況（東から）

2．掘立柱建物 SB20、柵列 SA02・03 完掘状況（北から）

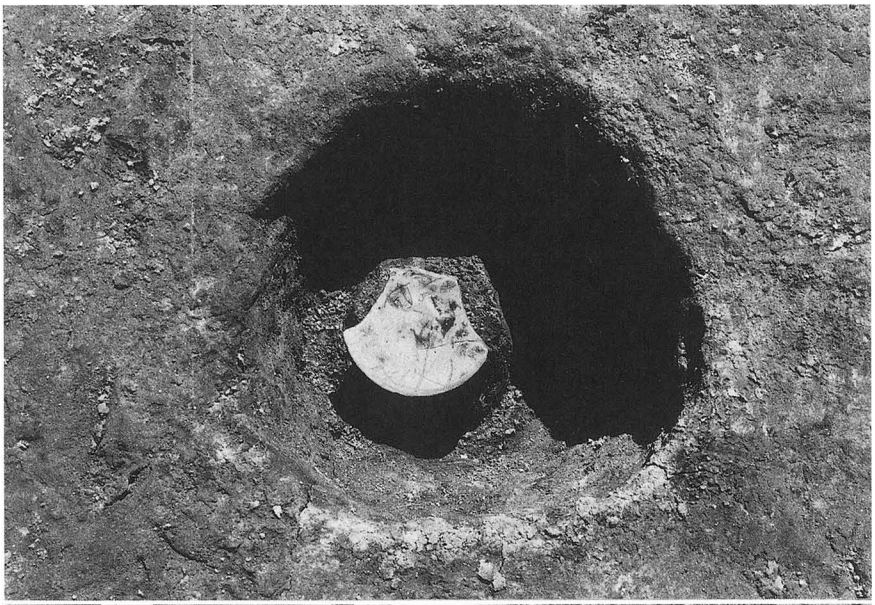


1．掘立柱建物SB10 柱穴 P10
遺物出土状況（東から）

2．掘立柱建物SB14 柱穴 P10
柱根出土状況（東から）

3．小穴 P360 栗石出土状況
（北から）

図版〇八　遺構写真



1．小穴 P195 遺物（17）
出土状況（北から）

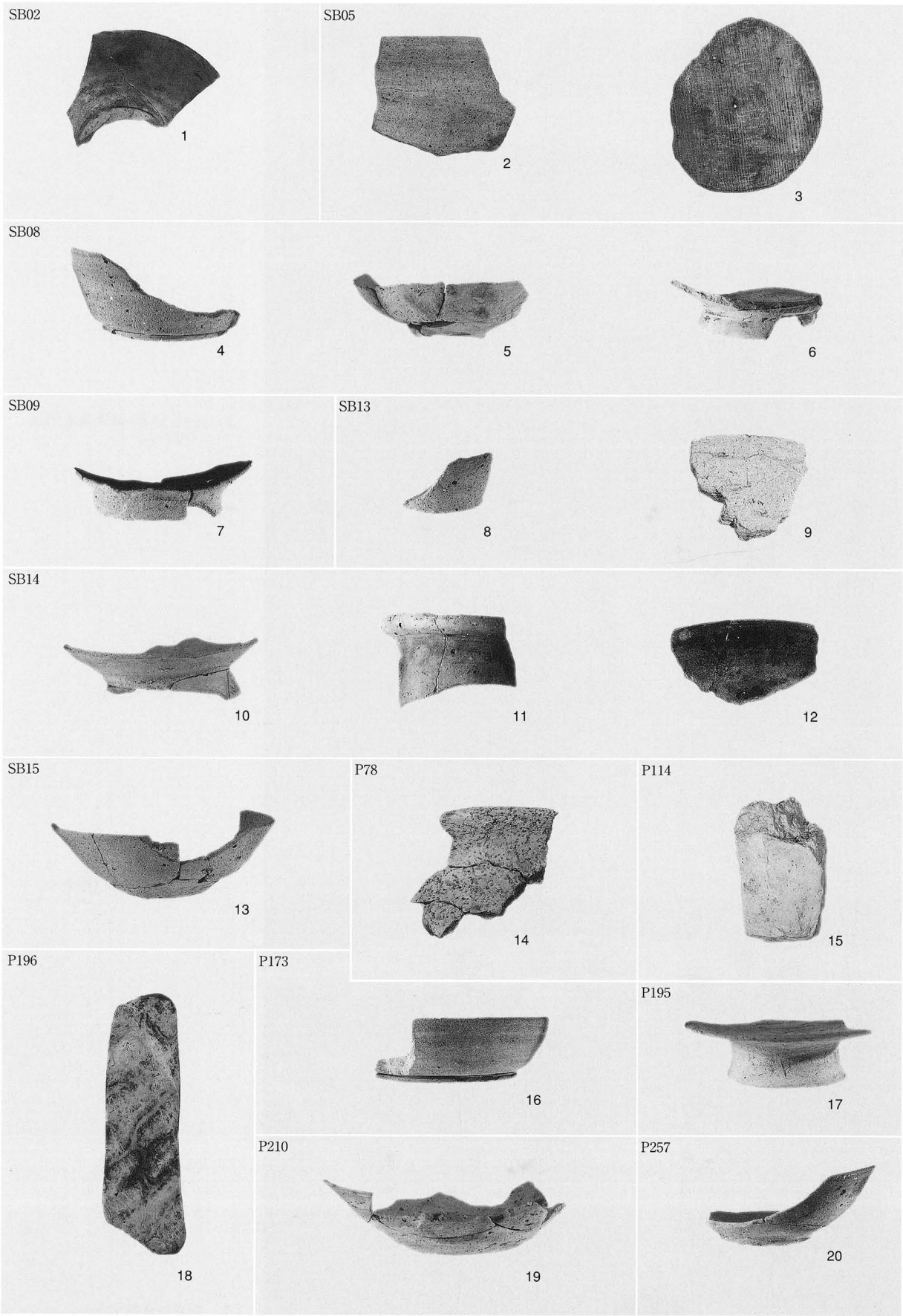
2．井戸 SE01 土層堆積断面
（南から）

3．井戸 SE01 完掘状況
（北から）

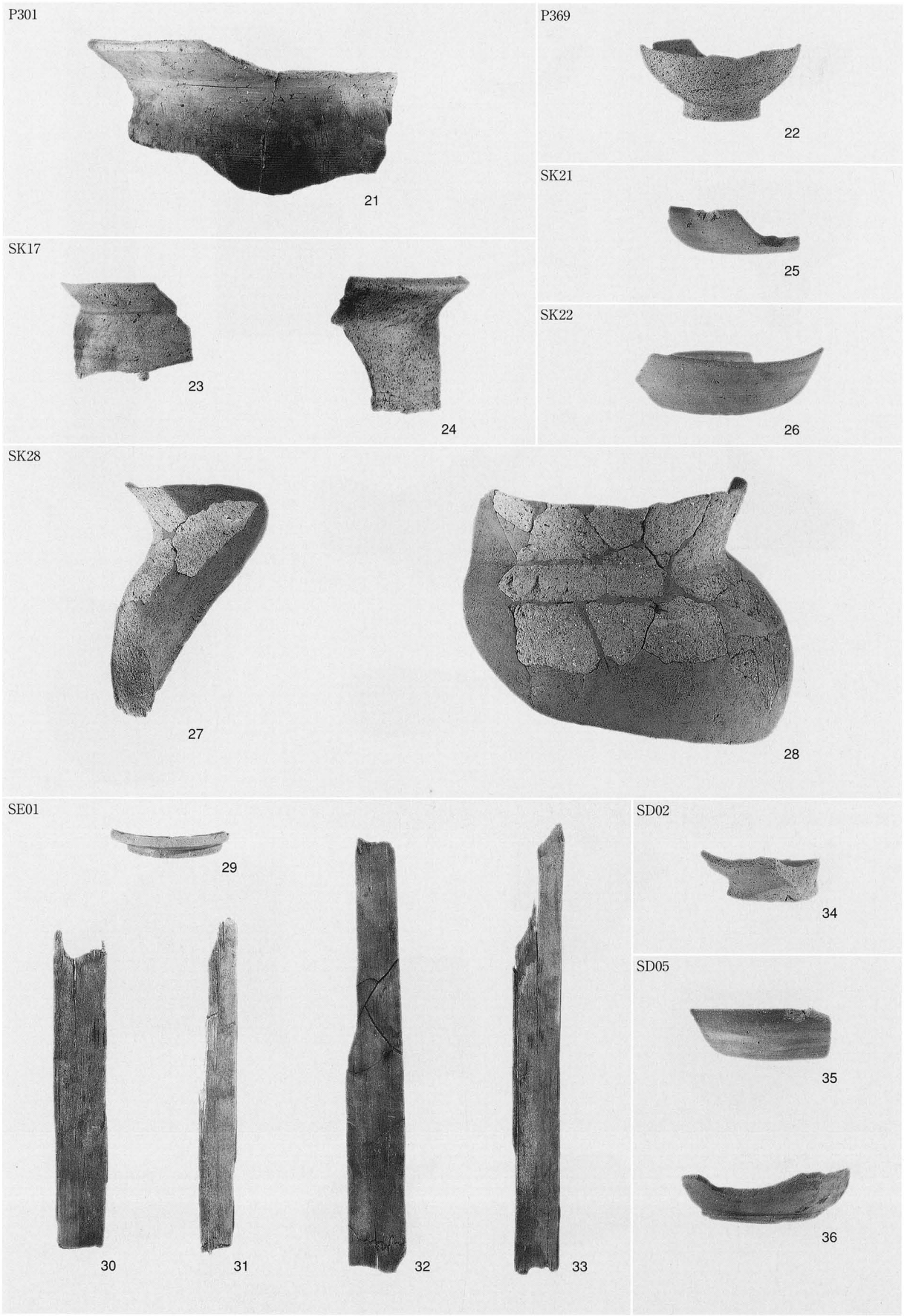
1．土坑 SK28 遺物出土状況
（西から）

2．掘立柱建物 SB01
発掘調査状況（東から）

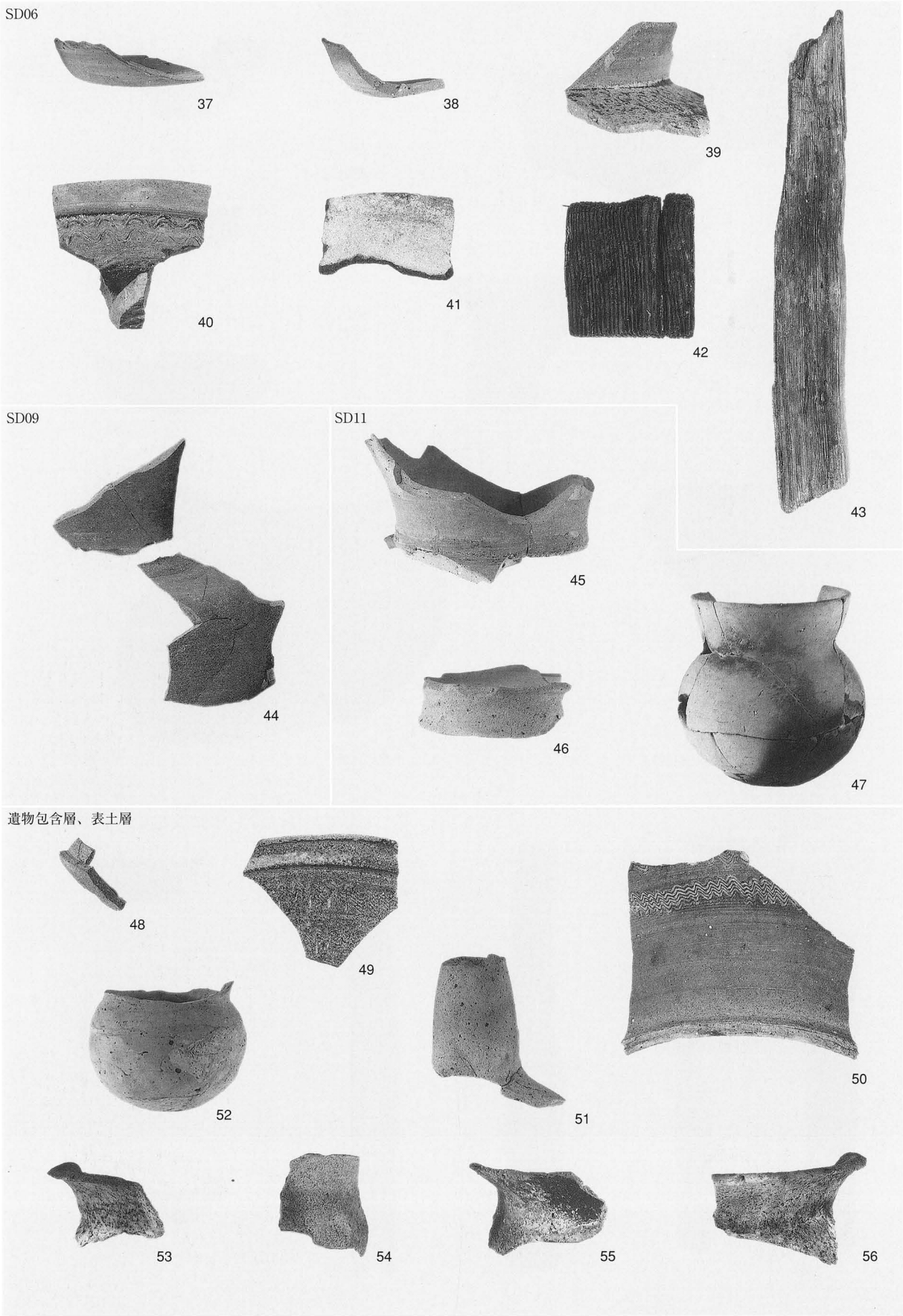
3．掘立柱建物 SB02
発掘調査状況（南から）



掘立柱建物 SB02・05・08・09・13・14・15、小穴 P78・114・173・195・196・210・257 出土遺物

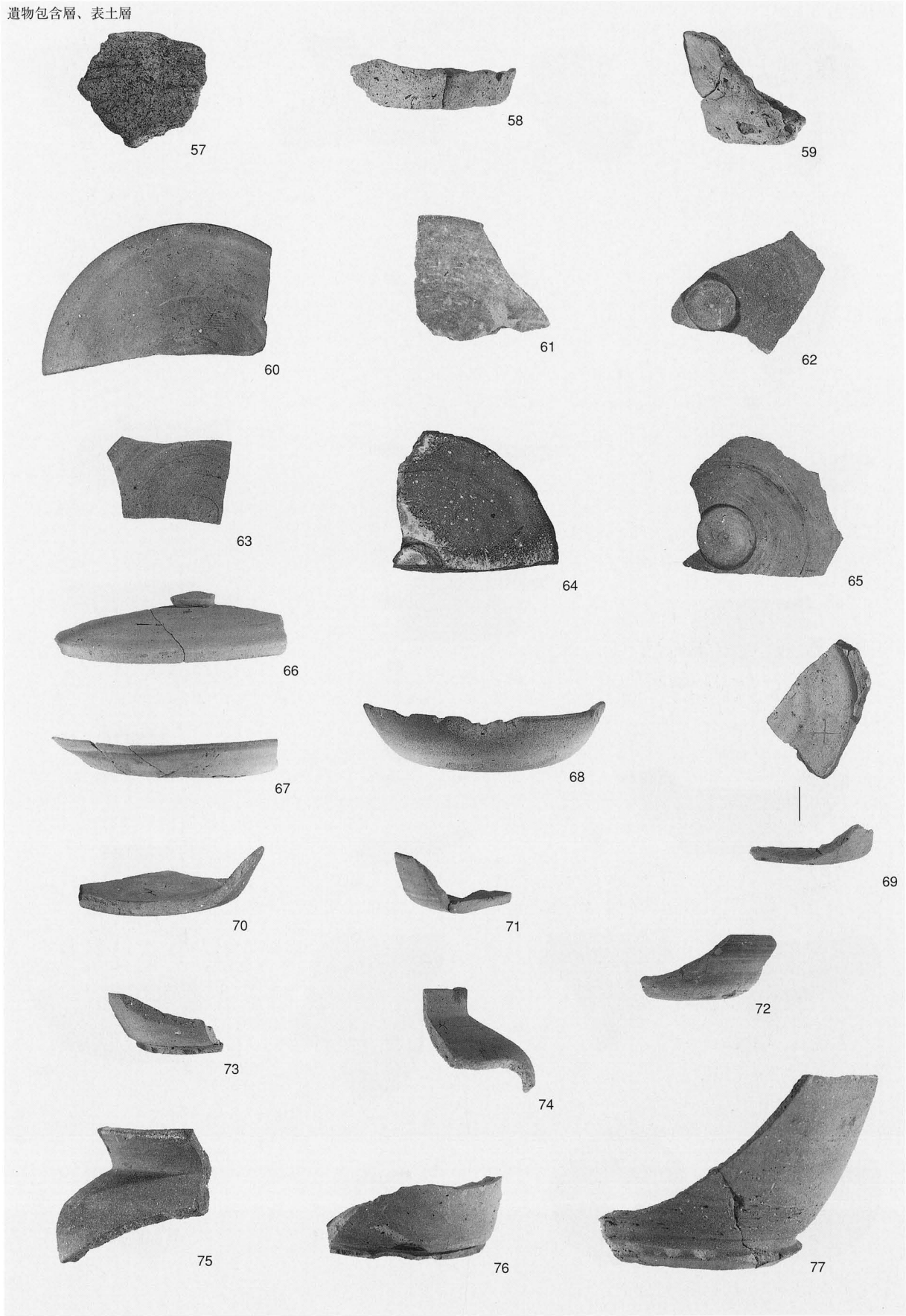


小穴 P301・369、土坑 SK17・21・22・28、井戸 SE01、溝 SD02・05 出土遺物



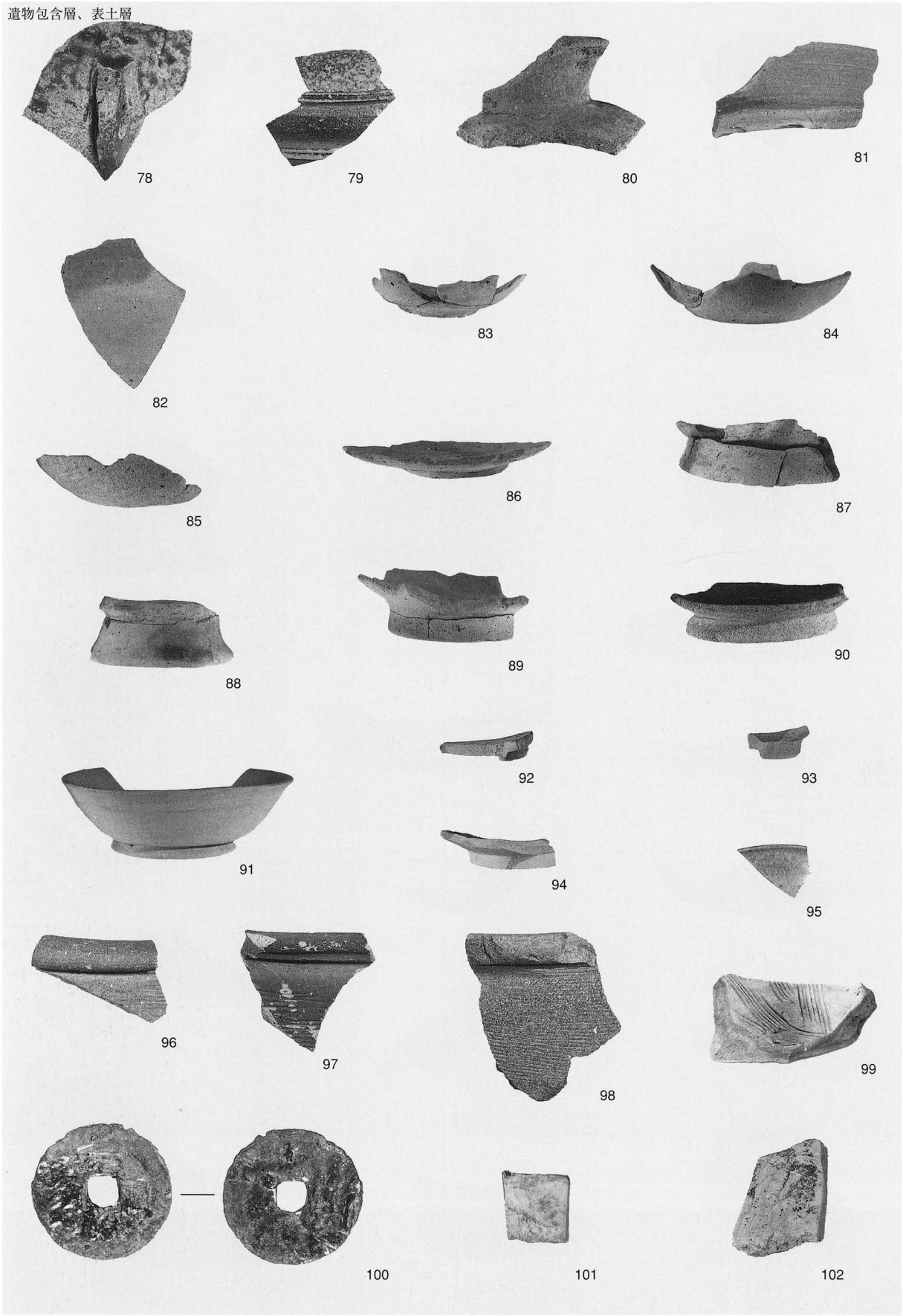
溝 SD06・09・11、遺物包含層、表土層出土遺物

遺物包含層、表土層



遺物包含層、表土層出土遺物

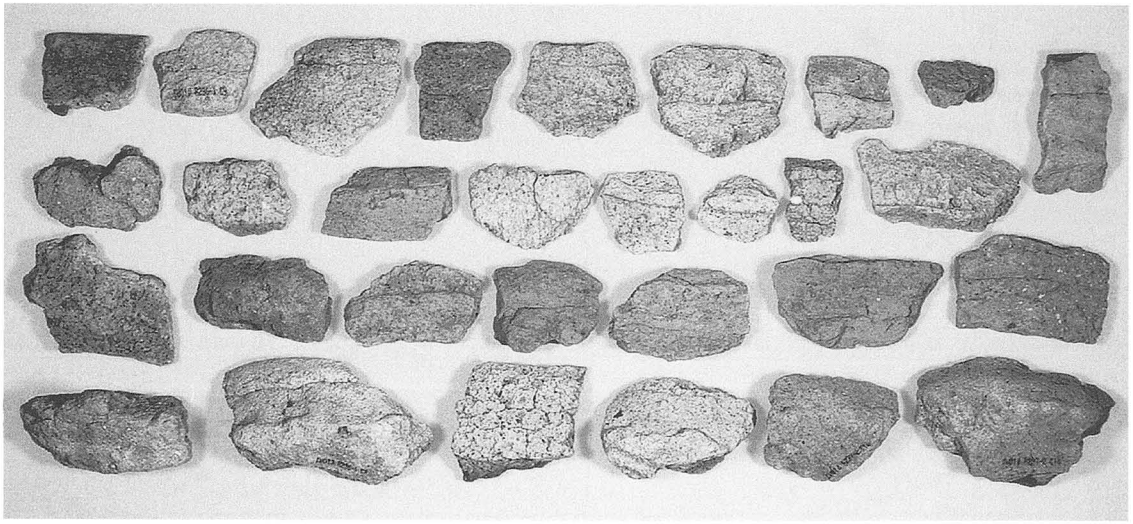
遺物包含層、表土層



遺物包含層、表土層出土遺物

遺跡内出土　土錘

遺跡内出土　製塩土器



遺跡内出土土錘（掘立柱建物 SB10P10、SB20P7、小穴 P253・346、土坑 SK22、溝 SD02・11、遺物包含層、表土層）及び製塩土器

報告書抄録

ふりがな	いわつぼおかだじまいせき ちょうさがいほう
書名	岩坪岡田島遺跡 調査概報
副書名	平成16年度、グラスキューブ地区の調査
巻次	
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第63冊
編著者名	武部喜充　大橋忠昭　桐谷　優　根津明義
編集機関	有限会社山武考古学研究所　〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地
発行機関	高岡市教育委員会　〒933-8601　富山県高岡市広小路7番50号
発行年月日	西暦2005年（平成17年）3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩坪岡田島遺跡（いわつぼおかだじまいせき）	富山県高岡市 国吉1913他22筆	016202	202074	36° 45′ 4″	136° 58′ 28″	20040809 ～ 20041106	4,453㎡	事務棟及び倉庫の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩坪岡田島遺跡（いわつぼおかだじまいせき）	集落	古墳～中世	掘立柱建物20棟 柵列3条　井戸1基 土坑23基 小穴300余基 溝30条	古墳土師器　古代土師器　中世土師器　古代須恵器　灰釉陶器　緑釉陶器　白磁　珠洲　土錘　古銭　砥石　木製品　製塩土器	本遺跡は、弥永貞三氏らによる東大寺領須加荘比定地の西方、また和田一郎氏らの比定地に、北接する位置にあたる。

高岡市埋蔵文化財調査概報第63冊

岩坪岡田島遺跡調査概報

— 平成16年度、グラスキューブ地区の調査 —

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2005年3月31日　印刷所　株式会社文化総合企画

千葉県富里市日吉台1-23-12